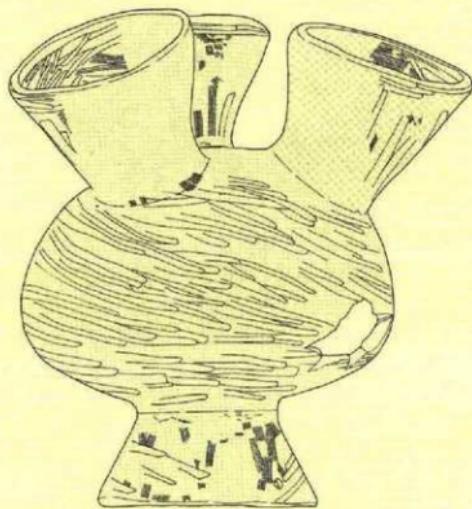


だいにちがわら
大日川原遺跡

県営圃場整備に伴う古墳時代の方形周溝墓・平安時代の住居の
発掘調査報告書



2001

明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

だい にち がわら
大日川原遺跡

県営圃場整備に伴う古墳時代の方形周溝墓・平安時代の住居の
発掘調査報告書

2001

明野村教育委員会
峠北土地改良事務所



12号方形周溝墓出土 三口台付壺

例　　言

- 1 本書は、山梨県北巨摩郡明野村上神取43ほかに所在した大日川原遺跡の発掘調査報告書である。遺跡は、绳文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構・遺物を含む複合遺跡である。
- 2 発掘調査は1999年4月より6月まで現地での発掘調査を行い、2000年10月より2001年3月まで遺物の整理、報告書作成作業を行った。
- 3 発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調査主体 明野村教育委員会 教育長 新海博基
調査担当者 明野村教育委員会社会教育係文化財担当 佐野隆
調査員 高田賢治 内藤かおり
整理調査員 大山祐喜
調査補助員 川村智子
調査事務局 明野村教育委員会

- 4 本書の執筆は高田、内藤が行い、編集は高田が行った。遺構遺物の実測・トレースは高田、内藤、大山、秋山生子、川道亨、筒井つや子、仲澤千代美が行った。本書中の遺構写真は佐野、高田、内藤が撮影した。本書中の遺物写真は高田、内藤、大山が撮影した。遺物の検査・復元作業は、高田、内藤、大山、小松原千津が行った。版組は兼松章子、仲澤、阿部恵子が行った。
- 5 発掘調査及び本書作成にあたり次の方々に多くの御指導・御教示をいただいた。記して感謝したい。(敬私略)
市宮正樹（高根町教育委員会）、伊藤公明（大泉寺教育委員会）、山下孝司、閑間俊明（弘崎市教育委員会）、岡野秀典（豊富村教育委員会）、小林健二（山梨県教育庁学術文化課）、石神孝子、今福利恵、小林公治、中山誠二、保坂和博、森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、小林正春（飯田市教育委員会）、柴垣勇夫（静岡大学）、西川修一（神奈川県生涯学習文化財課）、橋本輝彦（櫻井市埋蔵文化財センター）、山岸良二（東邦大学付属中高等学校教諭）、米田敏幸（大阪府八尾市教育委員会）、村松佳幸（長坂町教育委員会）、和氣清明（三重県鈴鹿町教育委員会）、渡井英輔（富士宮市教育委員会）、駒ヶ根市立博物館
- 6 本書の挿図は以下のとおりに作成した。
 - (1) 遺構および遺物の実測図の縮尺は各図中に示した。
 - (2) 遺構実測図中の水糸高は海拔高（m）である。
- 7 遺構観察表の各計測値の単位にはmを用い、遺物観察表では、土器はcm、石器はmm、重量にはgを用いた。また、（ ）内の数値は推定値、（ ）内の数値は遺存値を示している。
- 8 図中のスクリーントーンは、遺構図の場合には焼土範囲を、土器実測図の場合には赤彩範囲を、石器実測図の場合には使用痕範囲（底面もしくは光沢面）を示している。

- 9 文章中の註は各章末にまとめた。
- 10 本遺跡の出土品及び諸記録は、すべて朝野村教育委員会が保管している。
- 11 調査参加者（敬称略）
石渡節子、板垣真雪、伊藤佳子、岩田恵子、上村ゆき江、川手栄子、切刀ゆみ、栗山道明、奥石ひさみ、小松悦子、小松原千津、篠原美春、清水貞子、清水里子、清水さゆり、清水みゆき、清水やす子、鈴木晶子、筒井つや子、仲澤千代美、西川優子、入戸野宏、入戸野いくよ、早坂房江、深沢洋巳、保坂秋蘭、本川伸子、講部しづ江、三井啓介、三井民子、皆川穂子、八橋和美、山下千代子、米山由美子
- 12 整理作業参加者（敬称略）
秋山圭子、川道 亨、阿部恵子、伊東典雄、兼松章子、小松原千津、清水さゆり、筒井つや子、仲澤千代美、八橋和美

目 次

巻頭図版

例 言

第 1 章 遺跡をとりまく環境	1
(1) 遺跡の地理的環境	1
(2) 遺跡の歴史的環境	1
第 2 章 調査に至る経緯と発掘経過	5
第 3 章 遺跡の概要	5
第 4 章 古墳時代の遺構と遺物	10
(1) 方形周溝墓	10
1号方形周溝墓/2号方形周溝墓/3号方形周溝墓/4号方形周溝墓/	
5号方形周溝墓/6号方形周溝墓/7号方形周溝墓/8号方形周溝墓/	
9号方形周溝墓/10号方形周溝墓/11号方形周溝墓/12号方形周溝墓	
(2) 積穴住居	53
2号住居	
(3) 遺構外出土遺物	57
第 5 章 平安時代の遺構と遺物	59
1号住居	
第 6 章 その他の遺構・遺物	64
(1) 遺構	64
1号七坑	
(2) 純文時代の遺物	65
土器/石器	
(3) 弥生時代の遺物	78
第 7 章 自然科学分析 一大日川原遺跡における周溝内埋設土器の内容物について	79
第 8 章 考 察	83
第 1 節 大日川原遺跡と神取遺跡の年代的位置とその関係	83
第 2 節 三口台付壺について	85
第 3 節 貼石を有する周溝墓について	87
第 4 節 大日川原遺跡・神取遺跡の北巨摩地域古墳時代前期にどう位置づけるか	94

写真図版

あとがき

第1章 遺跡をとりまく環境

(1) 遺跡の地理的環境

明野村は、北に八ヶ岳、東に茅ヶ岳を望み、西は秩父山系より流れ出る塙川で区画された、南北15km、東西8kmほどの茅ヶ岳山麓に位置する。茅ヶ岳は、海拔1,704mのコニー型火山で、西部から南部にかけて広大な裾野を開拓している。茅ヶ岳山麓には、小河川が形成した谷が東西に数多く伸びているが、現在ある河川は、北から湯沢川、折沢川、正樂寺川などがあるだけである。いずれも小河川である。明野村は、茅ヶ岳火山の西麓から南西麓に位置しており、総面積28.1平方キロメートルの大部分は南西に緩やかに傾斜する平坦な山麓部を占め、西縁はほぼ南北に流路をとる塙川によって区画されている。塙川の左岸部には、ほぼ南北方向に帯状に発達する2～3段の河岸段丘が形成されている。大日川原遺跡が立地する神取面は中位段丘に相当し、上神取から御領平、下神取、小笠原の平坦面に及ぶ。この中位段丘は大日川原付近での東西幅は100mであるが、調査区の両450m地点では50mに狹まる。

大日川原遺跡の南700mには、ほぼ同時期の神取遺跡が存在し、平成4年に発掘調査された。大日川原遺跡の南で狭まった段丘面は、この神取遺跡付近で再び東西幅300mに広がる。大日川原遺跡は海拔約500mで、現河床から御領平までの比高は約10mである。

(2) 遺跡の歴史的環境

大日川原遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓12基と古墳時代の住居1軒、平安時代の住居1軒が検出され、绳文・弥生時代の遺物も出土した。そこでここでは、特に遺構・遺物の検出例が多かった绳文時代早期後半・前期・晚期、弥生時代前期・後期、古墳時代前期を中心に、大日川原遺跡周辺地域を概観してみたい。

绳文時代早期後半では、茅ヶ岳山麓の明野村神取遺跡、釜無川右岸の白州町屋敷平遺跡などが挙げられる。神取遺跡からは、押型文・沈線文・条痕文土器や、入海I式に比定される土器を伴う住居跡1軒が検出された。また、革新期の微隆起線文土器や爪形文土器や尖頭器も検出されている。屋敷平遺跡からは、葛ヶ島台式併行の土器が出土している。

前期前半では、明野村寺前遺跡から前期初頭木島式期の住居跡3軒が検出されている。釜無川右岸の白州町上北田遺跡は、山梨県内でも数少ない中越式期の集落跡である。遺跡からは住居跡22軒と、関山式・神ノ木式・中越式土器とそれに伴う無文土器が大量に出土した。八ヶ岳南麓の長坂町酒呑場遺跡では、中越式併行の土器を伴う住居跡2軒が検出され、大東村甲ッ原遺跡からも木島式の土器を伴う住居が1軒発見されている。

前期後半になると八ヶ岳南麓では遺跡数が急激に増加する。八ヶ岳南麓の大泉村天神遺跡では諸磯式期の住居跡49軒と土坑群からなる環状集落が発見された。集落の直径は150mにも及び、拠点集落と考えられている。山崎第4遺跡からは諸磯式期住居跡7軒、甲ッ原遺跡でも諸磯式期の住居跡9軒、寺所遺跡からは諸磯式期の住居跡2軒と水場として使用されたと考えられる湧水地点なども発見された。長坂町酒呑場遺跡からは、住居跡30軒と土坑群が発見されている。茅ヶ岳山麓でも明野村寺前遺跡から諸磯式期の住居跡約30軒、集石造構約40基、土坑群が検出されている。

绳文時代中期では、明野村寺前遺跡で、曾利式期の環状集落が発見された。環状集落は約30軒の住居跡が「」の字状に並び、土器捨て場、土坑群、屋外埋設土器15基、方形柱穴列3基を伴う。その規模は直径120mにも及ぶ。その他に五箇ヶ台式期の埋設土器5基、猪沢式から新道式にかけての住居跡5軒が検出されている。寺前遺

跡と同じ段丘面上の750m北に位置する麻訪原遺跡では、藤内式～曾利式にかけての住居・土坑群が検出されている。

縄文時代後～晚期では、寺前遺跡から堀之内式期の敷石住居1軒、屋敷添遺跡でも堀之内式期の敷石住居3軒と加曾利B式期の住居跡1軒、配石20基が検出されている。須玉町桑原遺跡からも、同時期の敷石住居2軒と、大量の石器集中区を含む住居跡4軒が検出されている。八ヶ岳南麓では、後期から晚期にかけての配石遺構を伴う集落跡が多く発見されている。大泉村金生遺跡では住居跡35軒と、配石遺構5基が検出されている。高根町青木遺跡では、住居跡15軒、石棺20基、大型配石3基が検出された。石堂B遺跡では、住居跡が11軒、石棺状遺構24基、集石遺構3基、立石3基、石列遺構1基、階段状遺構1基、祭壇状遺構10期、方形環状遺構1基が検出され、配石遺構は合計42基にも及んだ。他に明野村神取遺跡、村之内II遺跡、須玉町大豆牛田遺跡、長坂町長坂上条遺跡からも、後期～晚期にかけての遺物が発見されている。

弥生時代になると、並崎市北部の藤井平に位置する宮ノ前遺跡から弥生時代前期の水田跡が発見され、稻作が行われていたことが明らかにされた。藤井平は塩川右岸の氾濫原で、現在も水田が広がっている。茅ヶ岳南麓の並崎市上手沢遺跡では住居跡1軒が確認されている。明野村下大内遺跡からは、再葬墓と思われる壺形土器を伴う土坑1基が検出され、中村道祖神遺跡からは水神平式の壺形土器を伴う土坑が検出されている。八ヶ岳山麓では長坂町健康村遺跡から土器棺墓3基が検出され、大泉村寺所遺跡では条痕文土器を伴う土坑が2基検出されている。これらは、当時の墓制を解明する上で重要な資料を提供している。

しかし、弥生時代中期になると八ヶ岳南麓・茅ヶ岳山麓一帯で遺跡はほとんどみられなくなる。再び遺跡が出現するのは弥生時代後期で、八ヶ岳南麓の長坂町柳坪遺跡、並崎市中田小学校遺跡・堂の前遺跡、後田堂の前遺跡・後田第2遺跡・上横屋遺跡・北下条遺跡・下横屋遺跡などが挙げられる。また、八ヶ岳南麓・茅ヶ岳山麓地域に隣接する中巨摩郡敷島町金の尾遺跡は、弥生時代後期を代表する集落遺跡で、住居跡33軒と方形周溝墓12基、円形周溝墓2基が検出されている。これらの遺跡からは、いずれも中部高地系構造文土器の影響を受けた土器が出土している。弥生時代後期の遺跡は、八ヶ岳南麓に位置する長坂町柳坪遺跡を除き、ほとんどは並崎市北部の藤井平に集中していることが、特徴として挙げられよう。

古墳時代前期では、遺跡の立地に変化が見られるようになる。主な遺跡として、茅ヶ岳山麓の明野村神取遺跡、高台・中谷井遺跡、中原遺跡、八ヶ岳南麓の長坂町北村遺跡、七里ヶ岩台地上の並崎市伊藤隣第2遺跡、坂井遺跡、坂井南遺跡、藤井平の立石遺跡、釜無川右岸の河岸段丘上では久保屋敷遺跡などが挙げられる。このうち立石遺跡を除き全て台地・山麓上に位置し、弥生時代後期に遺跡が集中していた藤井平は遺跡数が減少する。特に坂井南遺跡は、七里ヶ岩台地上に営まれた墓域を伴う大集落跡で、該期の住居跡99軒、方形周溝墓12基が検出されている。

またこの時期は八ヶ岳南麓・茅ヶ岳山麓一帯で方形周溝墓が出現し、北村遺跡で6基、坂井南遺跡で12基検出されている。特に北村遺跡は、遺構の遺存状況が良く方台部の盛土が残っており、周溝墓の構造を考える上であわめて貴重な資料である。また坂井南遺跡も住居跡と周溝墓が隣接し、古墳時代前期の集落形態を考える上で重要な遺跡である。



第1図 縄文時代～弥生時代前期遺跡位置図 (1/100,000)

周辺の縄文時代・弥生時代前期遺跡

1 大日川原遺跡	2 神取遺跡	3 寺前遺跡	4 薬師堂遺跡	5 中村道祖神遺跡
6 諏訪原遺跡	7 桑原遺跡	8 青木遺跡	9 石堂B遺跡	10 甲ヶ原遺跡
11 姥神遺跡	12 天神遺跡	13 山崎第4遺跡	14 寺所遺跡	15 金生遺跡
16 柳坪遺跡	17 小屋敷遺跡	18 酒呑場遺跡	19 長坂上条遺跡	20 健康村遺跡
21 屋敷平遺跡	22 上北田遺跡	23 大豆生田遺跡	24 村之内II遺跡	25 屋敷添遺跡
26 中道遺跡	27 下大内遺跡	28 宮ノ前遺跡	29 上手沢遺跡	



第2図 弥生時代後期～古墳時代前期遺跡位置図 (1/100,000)

周辺の弥生時代後期～古墳時代前期遺跡

1 大日川原遺跡	2 神取遺跡	3 柳坪遺跡	4 北村遺跡	5 伊藤塙第2遺跡
6 中田小学校遺跡	7 立石遺跡	8 坂井遺跡	9 坂井南遺跡	10 堂ノ前遺跡
11 後田堂ノ前遺跡	12 後田第2遺跡	13 上横屋遺跡	14 北下条遺跡	15 下横屋遺跡
16 久保屋敷遺跡	17 金の尾遺跡	18 中原遺跡	19 高台・中谷井遺跡	

第2章 調査に至る経緯と発掘経過

明野村では平成10年度に県営圃場整備事業上神取工区の施工が計画された。そのため明野村教育委員会では平成10年度に工区内の埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。試掘調査は20000m²の工区全域を対象に行われ、面積2250m²を埋蔵文化財包蔵地として確認した。

試掘調査の結果を受けて、明野村教育委員会は事業主体の岐北土地改良事務所と遺跡の取り扱いについて協議を行い、施工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することとした。現地発掘調査費は7,075,214円である。発掘調査は重機による表土剥ぎとトレノチ調査を行い、その結果、最終的に遺構が確認された2250m²の範囲を調査区とした。調査期間は平成11年4月3日から開始し、6月14日までである。

発掘調査で検出された遺構の調査記録と出土遺物の整理作業は平成12年度に実施した。調査経費は4,527,614円である。

調査期間中、平成12年5月15日には北巨摩市町村文化財担当者会との共催で遺跡見学会を実施した。見学会は120人の参加者を得た。

発掘調査は公共座標系第Ⅲ区系による3級基準点を調査区内に3ヶ所設け、光波測量機により全遺物の出土位置を記録した。遺構の全休図は写真測量により作成した。個々の遺構は必要に応じて実測図を作成した。

遺跡は現在、圃場整備された水田となっているが、包蔵地は道路を挟んだ南側にもなお広がっていると予想される。

第3章 遺跡の概要

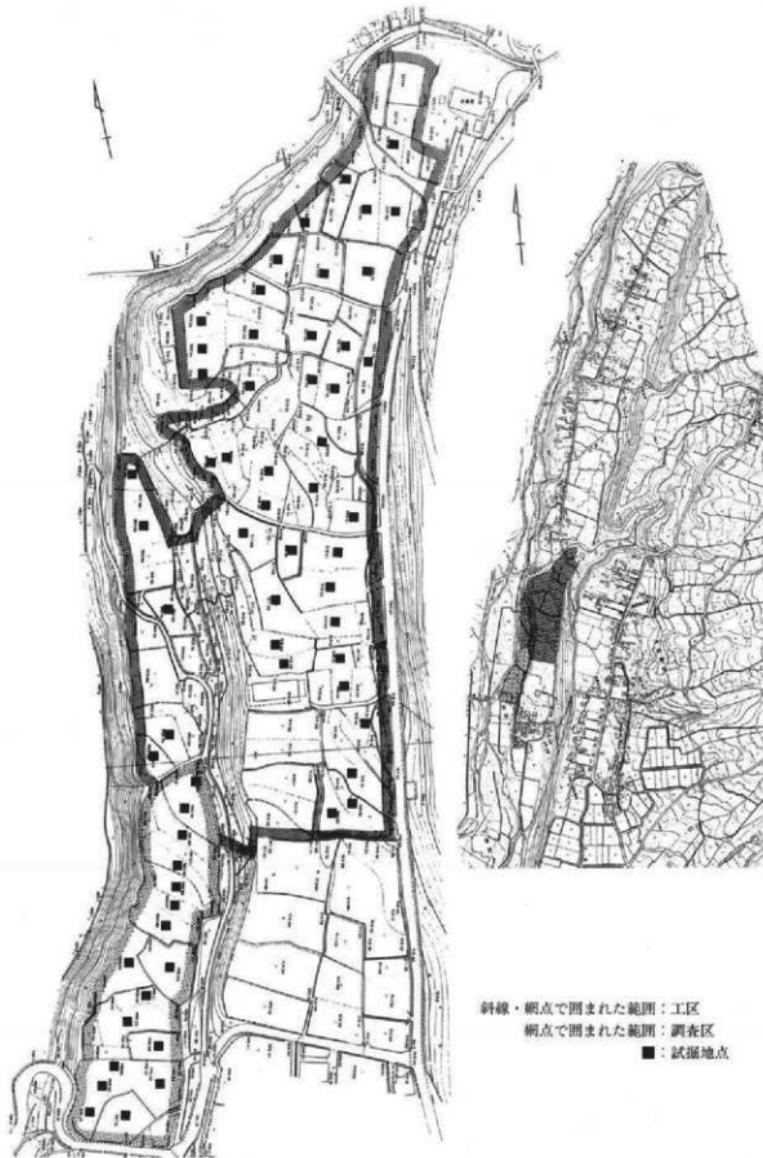
大日川原遺跡は、塩川左岸の河岸段丘上、標高498mに位置する。河岸段丘は塩川の蛇行により幅100mから50mへと変化し、遺跡南方の御領平集落付近でもっとも狭くなり、下神取集落北側で大きく広がる。遺跡は、段丘面が最も広くなるあたりに位置し、調査区の南側にも分布すると思われる。御領平を経て下神取に至る間の段丘上には、平成4年度に調査された神取遺跡が所在した。

遺跡からは、縄文時代早期後半～晩期・弥生時代前期の遺物、古墳時代前期の方形周溝墓12基、古墳時代前期の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒、時期不明の上坑1基が検出された。北巨摩郡内での方形周溝墓の調査例は、垂崎市坂井南遺跡、長坂町北村遺跡について3例目で、茅ヶ岳山麓では初例である。

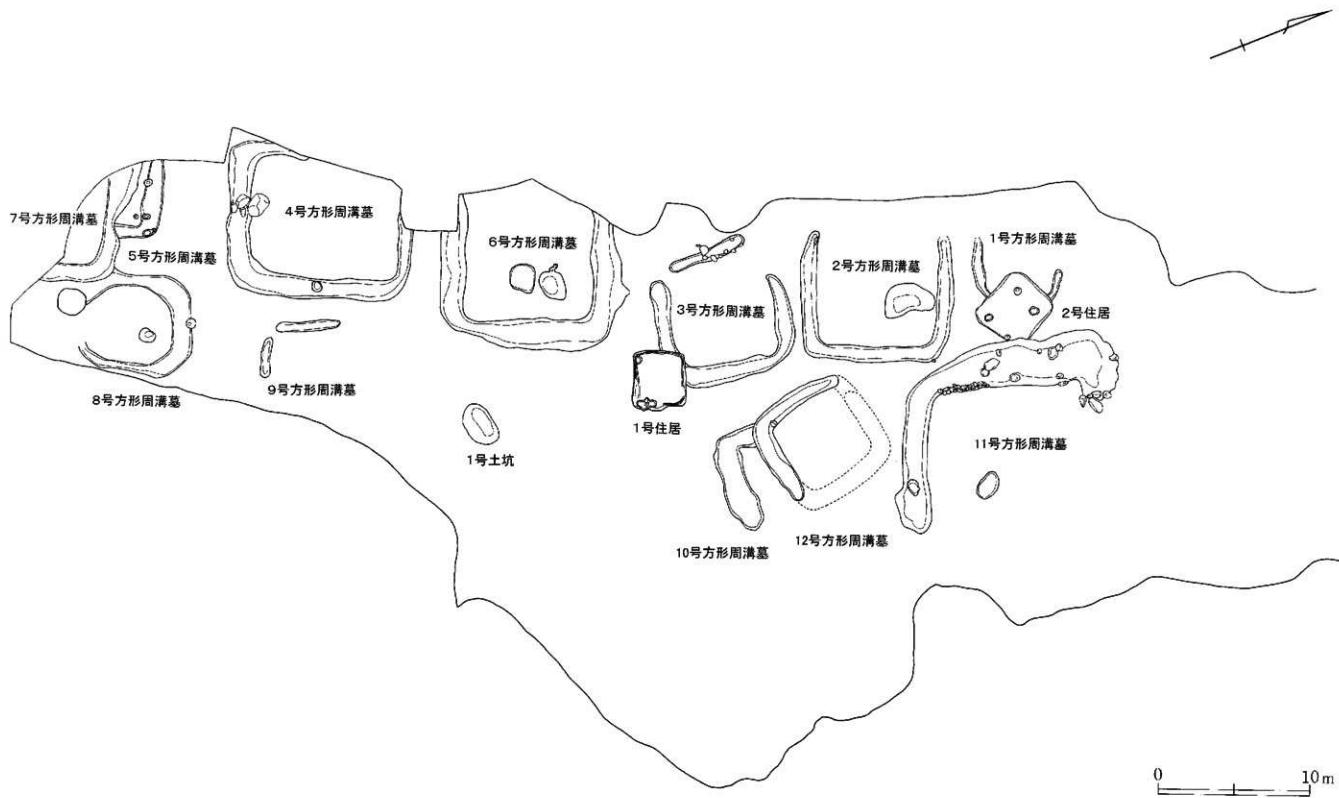
縄文時代は、早期後半では野島式に併行する土器、鶴ヶ島台式土器と思われる土器、条痕文系土器ほか、羽状沈線や格子目状沈線を施す土器が出土した。前期初頭では、東海系土器、神ノ木台式と思われる土器のほか、燃糸文を施す土器が出土した。前期後半では、諸磯C式土器が出土した。中期では洛沢式土器、曾利式土器が出土した。後期では堀之内式土器が出土した。晚期では水式土器が出土した。石器は石鎚、石鏃、石匙、スクレイバー、楔形石器、横刃形石器、磨製石斧、礫器、磨石、敲石、凹石、石皿のほか、石錐・石匙未製品、二次加工や使用痕のある剝片が出土した。遺構は検出されなかった。

弥生時代は、前期の条痕文土器が出土している。遺構は検出されなかった。

方形周溝墓12基は、河岸段丘西端に1・2・3・4・5・6・7号方形周溝墓が並び、その東側には8・9・10・11・12号方形周溝墓が並ぶ。8・9号方形周溝墓と10・11・12号方形周溝墓の間に周溝墓は検出されず、約20mにわたって空白地帯となっている。塩川の浸食により河岸段丘西端の周溝は失われている。一部に重複がみられるが、東西2列に整然と並んでいるため、方形周溝墓の造営時期に大きな時間差はないと思われる。



第3図 工区・調査区及び試掘坑位置図 (1/3,000・1/20,000)



第4図 大日川原遺跡全体図 (1/250)

各方形周溝墓には格差が見られ、それは周溝墓の規模・構造、遺物の出土量などに現れていた。

最大の規模を持つものは11号方形周溝墓で、一辺が14.5mである。次に大きいものは、1辺が10~12mの規模のもので、2・4・6・8号方形周溝墓が該当する。全て西側の周溝墓列上に位置し、数も一番多い。3・10・12号方形周溝墓は平均よりも一回り小型で、一辺が9~8m前後である。8号方形周溝墓は一辺が8.5mだが幅は6.3mで3・10・12号方形周溝墓よりもさらに小型である。最小の周溝墓は1・9号方形周溝墓で、一辺が約6~5mである。

11号方形周溝墓の西溝方台部法面には、3.5mにわたって貼石が施されている。人頭大から一抱えほどもある礫を法面傾斜にあわせて上下3段に貼ってあるが、石積みと呼べるようなものではない。このような貼石例は、山梨県内では知られておらず、初例となる。長野県飯田市の田園遺跡・寺所遺跡に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての類例があるが、こちらは貼石が方台部法面の全周に施されていた。

周溝内からは蓋、台付甕、高坏、甕などが多く出土しているが、方形周溝墓間で遺物の出土量に差がみられ、2号、4号、10号、11号で比較的多く、特に11号方形周溝墓は突出する。

また、10号・11号・12号方形周溝墓の周溝からは、製作時にあらかじめ穿孔を施し器面に赤彩を施した、明らかに明器と思われる土器が出土した。特に12号方形周溝墓出土の赤彩土器は、三つの口をもち特異な形状をしている。この3基の周溝墓は、こうした特殊な土器が出土することに加え、調査区東側で南北に並ぶことから、西側とは別の周溝墓列を形成していると思われる。

2号、6号、8号、11号方形周溝墓の方台部からは土坑が検出された。いずれも遺物・人骨は出土していないが、方台部上に存在することから埋葬施設と考えられる。また、4号方形周溝墓の東溝からは、蓋付きの埋設土器が検出された。

12号方形周溝墓の南溝覆土中から、緑色磁灰岩製の勾玉1点、管玉6点が出土した。これらは一組の装身具と考えられるが、装着状況は示していない。

古墳時代前期の住居跡は1軒のみ検出され、1号方形周溝墓を切る。

平安時代の住居跡は1軒検出された。時期は9世紀後半頃と思われ、規模は小さく床面積は12.5m²である。ほかに住居跡は検出されていない。

遺跡の南700mには、古墳時代前期の住居跡8軒が検出された神取遺跡がある。大日川原遺跡の方形周溝墓から出土した遺物は、神取遺跡とはほぼ同時期であることから、塩川の段丘上に集落と墓域が同時に存在したものと考えられる。

第1表 方形周溝墓観察表

() は推定値、() は遺存値を示す

遺 墓 名	地 球	形 制	フ リ	規 模 (m)	深 度 (m)	周 溝 (m)	通 槽 内 容	出 土 遺 物	備 考
1号方形周溝墓	西側	円形?	(1)	(6.0)	0.42~0.79	0.12~0.80	—	—	7号方形周溝墓に切られる
2号方形周溝墓	西側	隅丸方形	(1)	19.1	1.1	0.48	方台部に土坑1	甕2、腰2、高坏1、器種 小判?	
3号方形周溝墓	西側	隅丸方形	2	9.1×9.6	0.6~1.3	0.21~0.33	—	—	
4号方形周溝墓	西側	隅丸方形	不明	12.3×(10.3)	0.8~1.5	0.2~0.4	施槽内にビット1基	広口甕1、腰2、小形甕2、 台付甕1	
5号方形周溝墓	西側	隅丸方形	不明	(5.3)×(3.0)	1.6~1.3	0.15	施槽内にビット4基、 方台部にビット1基	小形甕1、腰1、台付甕1、 蓋種不明1	7号方形周溝墓に切られる
6号方形周溝墓	西側	隅丸方形	不明	12.0×(10.3)	0.9~2.0	0.6	方台部に土坑2	台付甕2	
7号方形周溝墓	西側	隅丸方形	不明	(8.5)×(5.5)	0.7~2.5	0.27	—	ミニチュア土器1	5・8号方形周溝墓に切る
8号方形周溝墓	東側	隅丸方形	不明	(6.5)×3.6	1.2~1.5	0.33	方台部に土坑1	ミニチュア土器1	7号方形周溝墓に切れる
9・2号方形周溝墓	東側	円形	(1)	5.3×(3.6)	3.55	0.15~0.25	—	—	
10号方形周溝墓	東側	隅丸方形	不明	(6.0)×(3.7)	1.1~2.0	0.3	—	甕1、台付甕1、高坏1	12号方形周溝墓に切られる
11号方形周溝墓	東側	隅丸方形	不明	(14.5)×(13.5)	1.3~2.6	0.5~0.7	方台部に土坑1	小形甕2、腰1、台付甕10、 高坏3、蓋1、腰1、蓋1、瓶 1、甕1、ナツクル形甕1、 青磁3個、残文鏡1枚	方台部西側底面半部に貼 石あり、2号住居を切る
12号方形周溝墓	東側	隅丸方形	不明	(7.0)×(6.0)	1.2	0.3	—	甕1、腰1、6、三口台 付甕1	10号方形周溝墓を切る

第4章 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、方形周溝墓12基と竪穴住居跡1軒が検出された。方形周溝墓は遺跡の西に流れる塩川に沿って2列を成し、西側には1~7号方形周溝墓が、東側には8~12号方形周溝墓が並び、それぞれ周溝墓列を形成している。

(1) 方形周溝墓

1号方形周溝墓 (第5図、写真図版2)

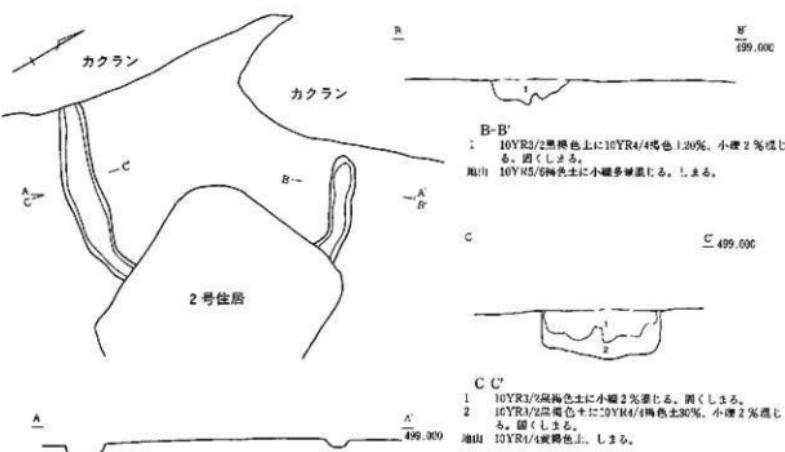
(形態・規模) 調査区西側の最北に位置する。南には2号方形周溝墓が、東には11号方形周溝墓が存在する。

遺構西部は擾乱に切られ、遺構東部は2号住居に切られるため、南溝と北溝の一部のみ遺存する。そのため、平面形は不明である。周溝北縁にはブリッジがあると思われる。規模は推定で6m、周溝は幅が0.42~0.70m、深さが0.12~0.30mである。底面形状はU字形である。方台部に盛土や埋葬施設は確認されなかった。

(出土遺物) なし

(遺構時期) 古墳時代前期の2号住居に切られるため、古墳時代前期と思われる。

(調査所見) 遺物が出土せず、埋葬施設も検出されていないが、西側の周溝墓列の延長線上に位置するため、周溝墓とした。覆土の様子や堆積状況は、他の方形周溝墓と同様である。木遺跡の周溝墓の中では、もっとも規模が小さい。方形周溝墓としたが、周溝が緩やかな弧状にも見えるため、円形周溝墓の可能性もある。2号住居との切り合いを土層断面から確認できなかったが、1号方形周溝墓の周溝と2号住居の壁面が切り合う位置で、周溝の底よりも高い位置に貼床がみられたため、1号方形周溝墓は2号住居よりも古いと判断した。



第5図 1号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)

2号方形周溝墓（第6～11図、写真図版2・3）

（形態・規模）

調査区の北西、1号方形周溝墓と3号方形周溝墓の間に位置する。遺構の西側は擾乱があり、そのため周溝北西隅と西溝は失われている。平面形は隅丸方形である。周溝の南西隅は溝が切れており、ブリッジがあると思われる。規模は南北方向に10mで、周溝は幅1.1m、深さ0.48mである。周溝の底面形状はU字型である。

方台部北寄りの位置に、隅丸凸形の土坑一基が検出されている。規模は長軸3.4m、短軸1.8m、深さ0.75mである。遺物は出土せず、埋葬の痕跡も確認されなかった。方台部に盛土は確認されなかつた。

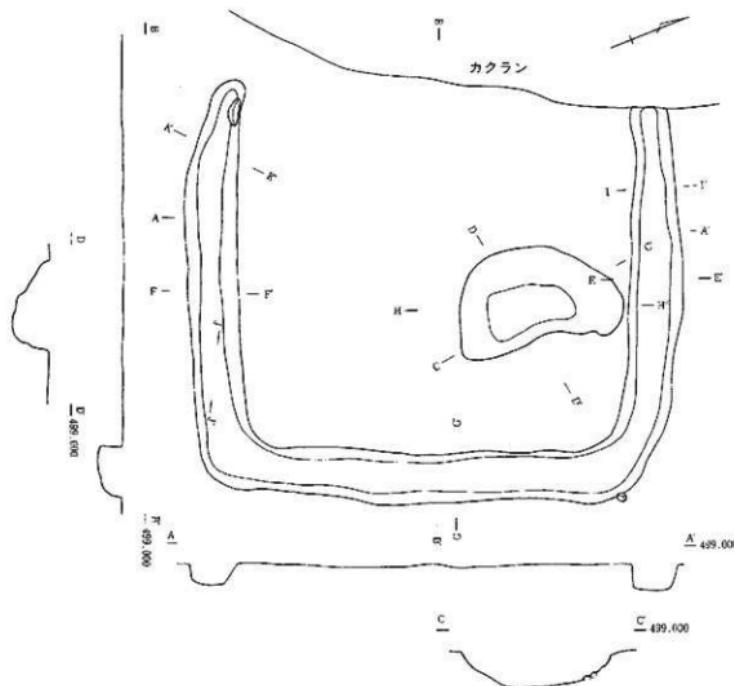
（出土遺物）

いずれも周溝内から出土し、壺1、甕4、高坏1の計6個体を図化した。その他に土器片115点が出土している。1の壺は北溝西部の溝底から、逆位でつぶれて出土した。2の甕は南溝西部の中層から出土し、逆位で中に拳2つ分大の石が入っていた。石は自然礫で、甕の底部は割れていた。副部下方には焼成後に穿孔が施されていた。3の高坏は南溝東部の中層から出土し、坏部と脚部の付け根で二つに割れていた。脚部内側を除き、器面全体に赤彩が施されていた。

5の甕は口唇部に刻み目を施す。6の土器は、器面に備蓄麻状文と赤彩が施されている。

（遺構時期）

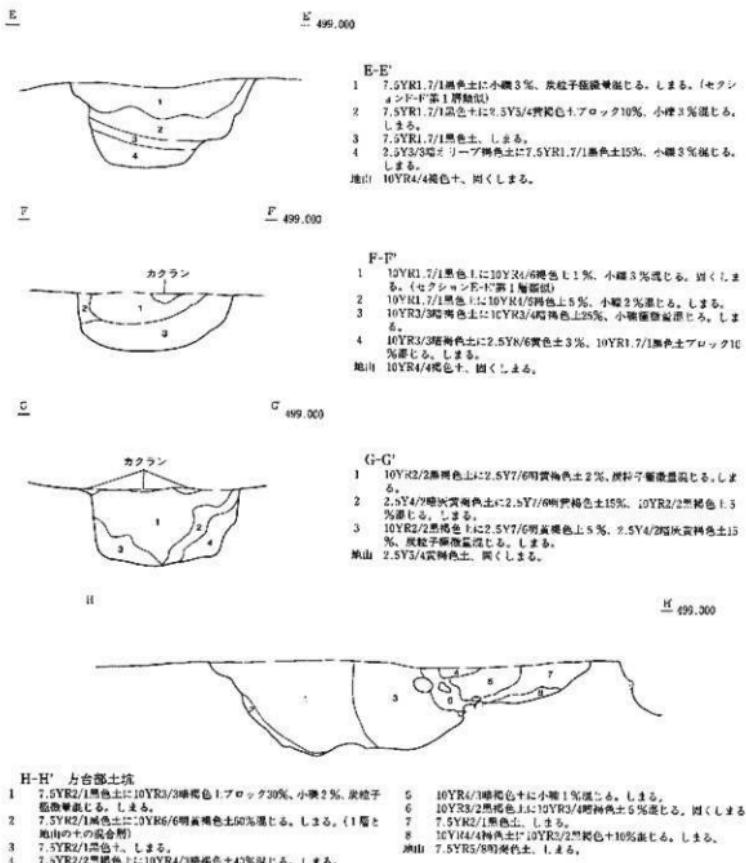
古墳時代前期



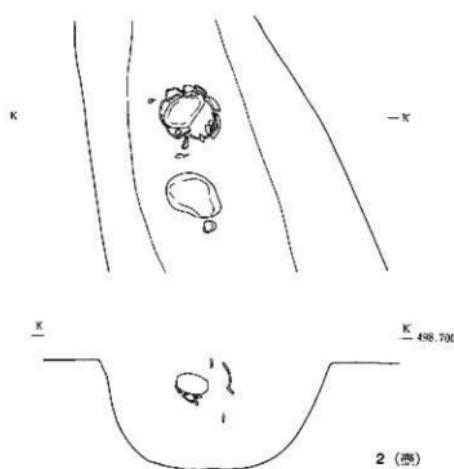
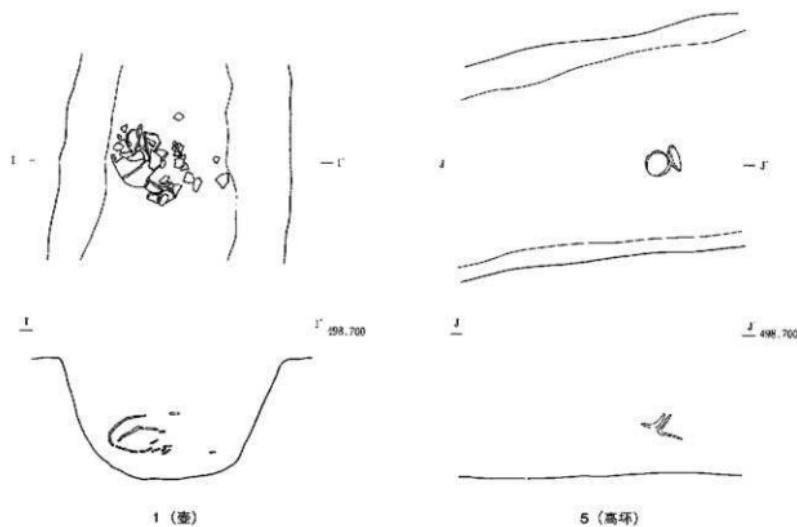
第6図 2号方形周溝墓 (1/100)

(調査所見)

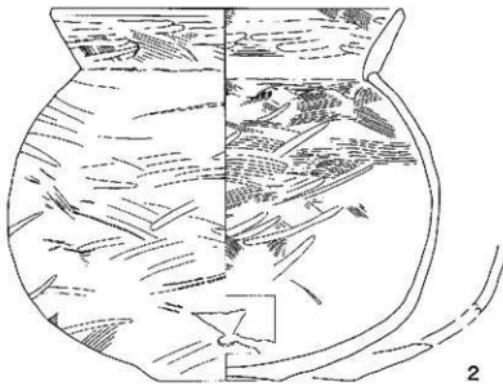
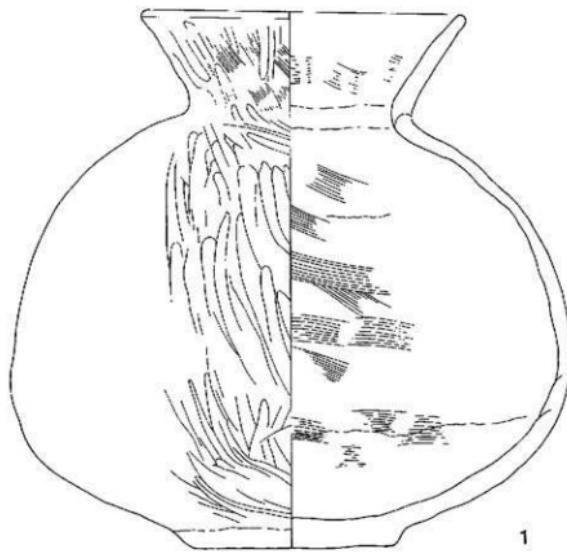
この周溝墓は、遺構西側が擾乱により失われているため、西溝がどのような形態をしていたのか確認できなかった。そのため、北西隅にもブリッジが存在する可能性がある。西側の周溝墓列上に位置し、規模は後述する4・6・7号方形周溝墓とはほぼ共通で、平均的な大きさといえ、またそれらと輪線も一致している。周溝墓内の土坑は、埋葬の痕跡は確認できず、遺物も出土していないが、方台部上に存在することから埋葬施設と考えられる。南溝西側から出土した2の小形甕に右が入っていたことは注目に値する。検出時の状況では底部が割れていたので、逆位に置かれた土器の底部に向けて、人の手で石が落とし込まれた状況が想定できよう。また、6の土器は弥生時代後期の中部高地系七器である。



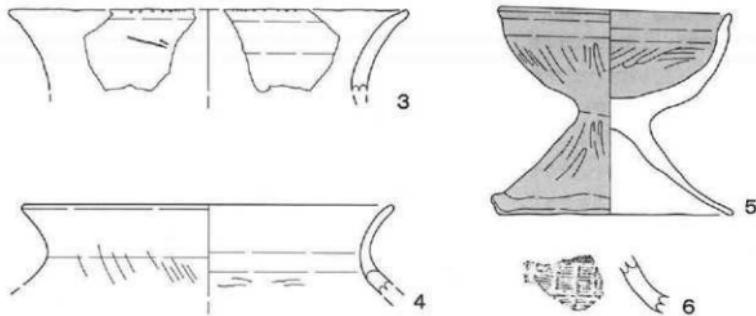
第7図 2号方形周溝墓 周溝・主体部セクション (1/30)



第8図 2号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/20)



第9図 2号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第10図 2号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第11図 2号方形周溝墓 遺物分布図

第2表 2号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

因版番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第9図1	中層	壺	13.4	8.2	22.2	外面 横位へラミガキ 口縁部斜位 ハナ目→斜位へラミガキ 内面 横位へラミガキ	外面 7.5VR2/1 内面 7.5VR6/5	石英微量 長石少量	
2	上層	壺	14.1	4.6	16.3	内外面 橫位ハナ目→横位へラミガキ	外面 7.5VR7/4 内面 10YR7/4	石英微量	側部下方に二次穿孔
第10図3	上層	壺	16.4	—	(3.3)	口特部 刮入目 外面 扇子テ 内面 追ナテ→ハラケズリ	外面 5YR6/6 内面 10YR7/4	石英微量 長石少量 金雲母微量	
4	上層	壺	15.2	—	(3.7)	外縁 斜位ハナ目→扇ナテ	外面 10YR7/6 内面 10YR7/6	石英 長石 少量	
5	中層	高环	9.4	9.7	8.6	外縁 斜位へラミガキ 内面 横位へラミガキ (环部のみ)	外面 2.5VR6/3 内面 10YR8/2	石英 長石微量 金 雲母少量	外表面赤彩
6	一括	不明	—	—	—	外縁 落葉状皮文	外縁 5YR6/6 内面 7.5VR6/5	石英 長石 白色 中部 黒色 黒色粒子多量	高地系土器

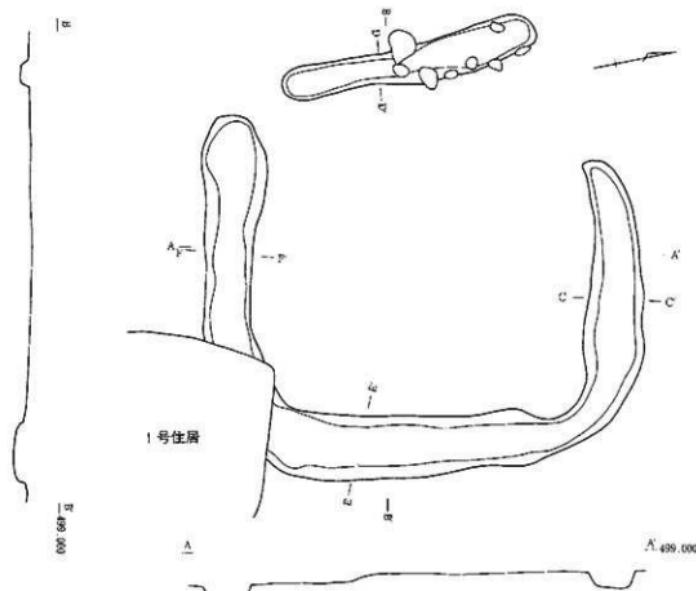
3号方形周溝墓（第12～15図、写真図版4）

(形態・規模) 検査区西側中央、2号方形周溝墓と6号方形周溝墓の間に位置する。南東隅は1号住居に切られていた。平面形は、北西隅と南西隅にブリッジを設ける隅丸方形である。規模は南北に8.9m、東西に9.2mで、周溝は幅が0.6～1.3m、深さは0.21～0.33mである。周溝の底面形状はU字形である。ブリッジは、西溝の北側が多少西に開いているため幅に違いが見られ、北西隅の方が広い。ブリッジの幅は北西隅が2.6m、南西隅が0.9mである。方台部に盛土や埋葬施設は確認できなかった。

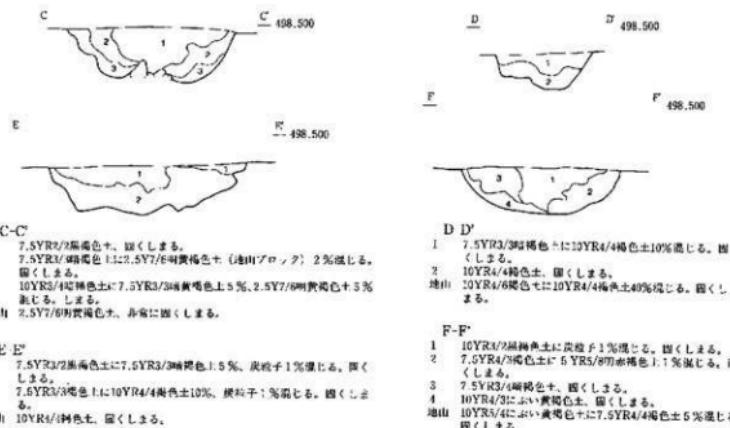
(出土遺物) いずれも周溝内から出土し、S字状口縁台付甕1、甕2の計3個体を図化した。いずれも破片である。その他に土器片12点が出土している。1のS字状口縁台付甕は、南溝や西寄りから出土し、確認面すでに土器の一部が見えていた。土器は横に倒れた状態で、上半分と脚台部は削平のため失われていた。

(造構時期) 古墳時代前期

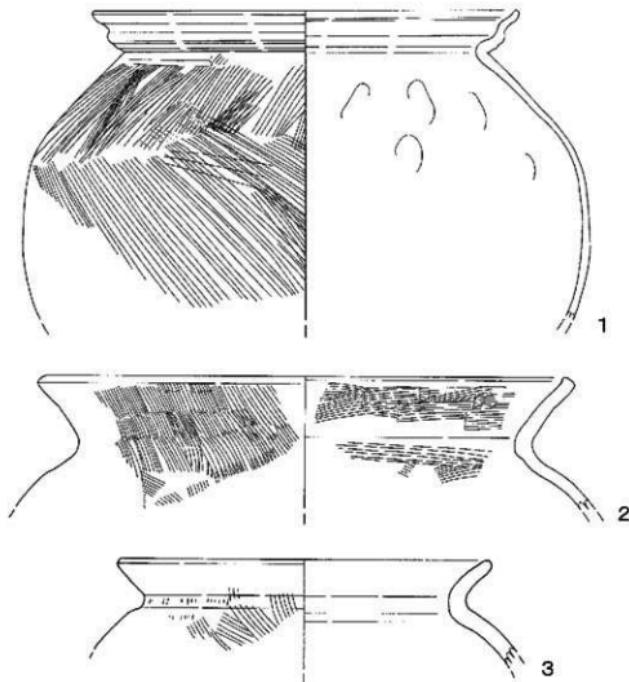
(調査所見) 西側の周溝墓の多くは、塩川の浸食や擾乱により西溝を失っているが、この3号方形周溝墓は唯一完全な姿をとどめる。典型的な大きさの2・4・6・7号方形周溝墓よりも一回り小さく、1号方形周溝墓よりは大きい。軸線は西側の周溝墓列の中で唯一異なり、10・12号方形周溝墓と同方向である。南溝から出土したS字甕は、口唇部が面取りされず肥厚し、口縁部は屈曲が弱くなつて外反し、肩部の横ハケも施さないことから、古墳時代前期でも新相に属するものと思われる。他の方形周溝墓と比較して、遺物の出土量が少ない。



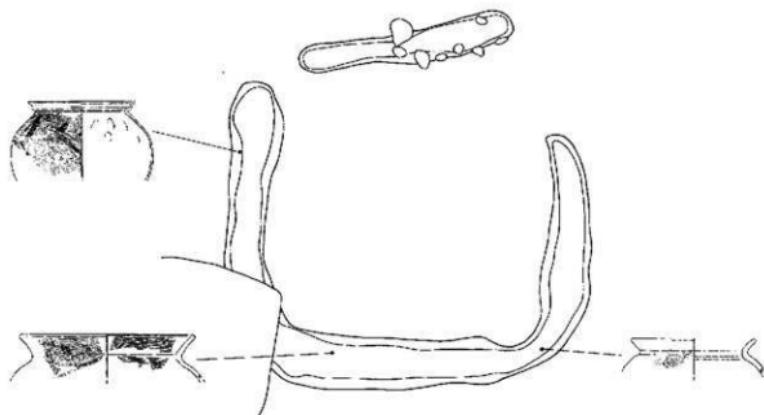
第12図 3号方形周溝墓 (1/100)



第13図 3号方形周溝墓 周溝セクション (1/30)



第14図 3号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第16図 3号方形周溝墓 遺物分布図

第3表 3号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

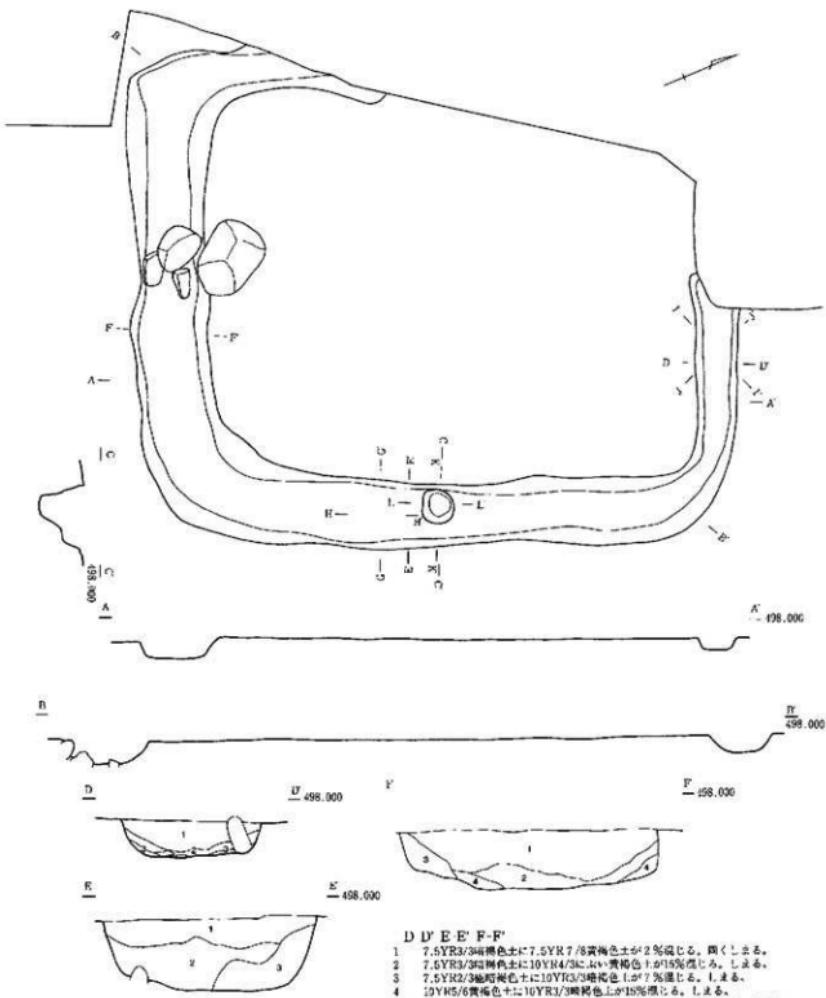
測定番号	出土層位	鉢 壺	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	技法・形態の特徴	色 調	胎 土	備 考
第14回1	確認面	合併壺	17.2		(12.7)	S字状口縁 外曲 時代ハケ目 内面 陶質灰釉	外面 10YR6/3 内面 10YR7/3	白色粒子・黑色粒子 多量、会合形鉄量	推定値
2	下層	壺	21.9		(5.4)	外側 ハケ目 内側 ハケ目	内外面 10YR8/4	白色粒子・黑色粒子 多量、会合形鉄量	
3	上層	壺	15.0	-	(4.5)	外側 ハケ目	内外面 10YR7/4	白色粒子・黑色粒子 多量、会合形鉄量	

4号方形周溝墓（第16～23図、写真図版5～7）

（形態・規模） 調査区西側の南寄り、6号方形周溝墓と5号方形周溝墓の間に位置する。東には9号方形周溝墓がある。平面形は隅丸方形であるが、やや南北に長い。西側が農道で切られており、北西隅と西溝の一部は検出できなかった。そのため、ブリッジの有無は不明である。規模は南北に12.4m、東西に10.4mで、周溝は幅0.8～1.5m、深さ0.2m～0.4mである。底面形状はU字形である。後世の耕作により遺構上部は削平され、方台部の盛土は検出できなかった。

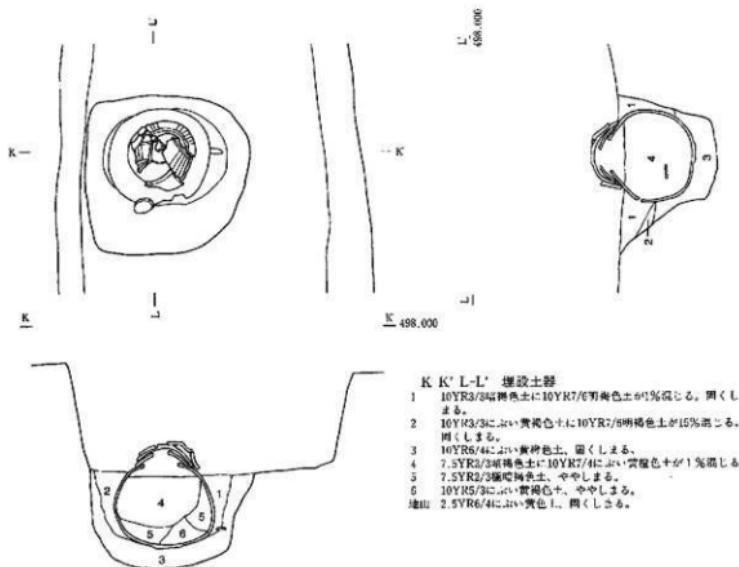
（埋葬施設） 東溝中央の溝底から、土器を埋設した土坑が一基検出された。埋設土器本体には口縁部から頸部を取り去った複合口縁壺の颈部を使用し、口縁部が打ち欠かれた壺を副部中央で2つに割り、副部上半を内蓋に、副部下半を上蓋に用い、最後に本体に用いた複合口縁壺の口縁部片がのせてあった。蓋部以上は周溝底から上に出ていた。また、埋設土器検出時、副部中央にひび割れによる穴があいており、埋設土器内は周溝覆土と類似する土が流入していた。人骨は出土していない。方形周溝墓検出時には、周溝内に壺を埋設する際に掘ったであろう土坑を確認することはできなかった。

（出土遺物） 1は複合口縁壺である。埋設土器の本体として使用された。頸部の破片が埋設土器の南約1.2mの地点から出土している。出土層位は中層である。口縁部外側には平行縦列沈線を施し、7本→7本→6本→8本→5本の5単位である。肩部には上下端部を結節した縄文2段を施文する。上下段とも単節のL字で、原体はそれぞれ異なり、上段は下段より縦目が大きい。また、

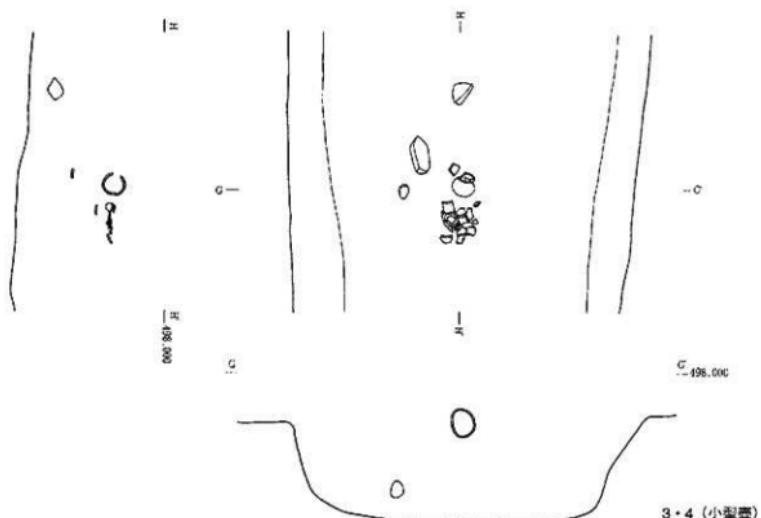


第16図 4号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)

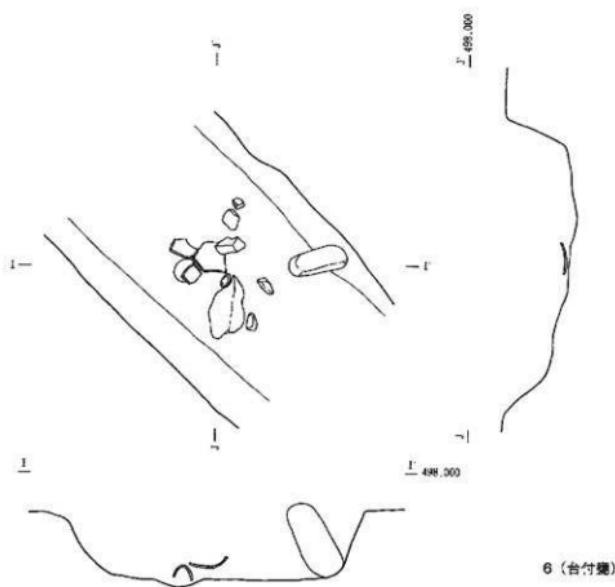
2段の繩文の施文の後、その境にボタン状の貼付文を施す。ボタン状の貼付けは2個一組の5組で計10個ある。土器内面は艶く、ほとんどが剥げておりハケ調整の痕が部分的にしか確認できない。また、この土器は副部外面の約1/3が白く変色しており、二次焼成を受けている。2は蓋である。埋設土器の蓋に転用された。また、この蓋にした壺の胴中央部の破片が埋設土器の



第17図 4号方形周溝墓 周溝内埋設土器 (1/20)



第18図 4号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/20)



第19図 4号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/20)

南約1.4mの地点に集中して出土している。出土層位はいずれも中層である。外面は丁寧にヘラ磨きが施されていて、内面はハケ調整が全体に施されている。3は小形壺である。底部に焼成後の穿孔を施している。口縁部内面と外面にはヘラ磨きを施す。4は小形壺である。焼成後に底部と胴部中央を穿孔している。3・4の土器は埋設土器南の確認面付近から並んで出土した。3は横に倒れた状態ではほぼ完形、4は潰れた状態で、口縁部が失われていた。5は幅広の口縁部を持つ壺である。南東隅の上下層にわたって出土した。口縁部の大半と胴部下半は失われていた。6は台付壺である。口縁部は失われていたが、器厚は薄く胴部に羽状ハケが見られるため、S字型であろう。北溝中央部の床直から出土し、胴部は割れて散乱していたが、脚台部は正位の状態だった。

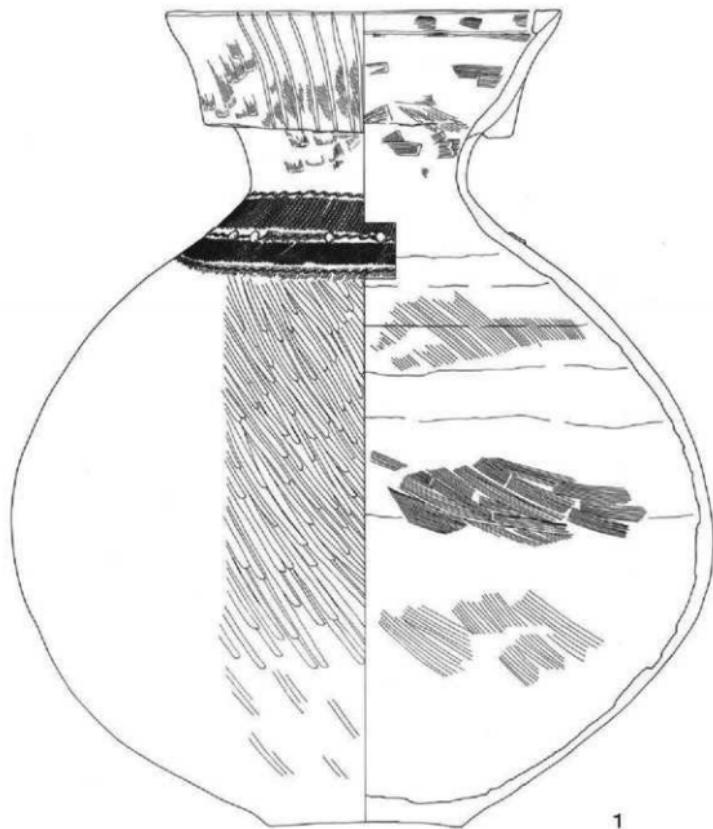
(遺構時期)

古墳時代前期

(調査所見)

この周溝墓は西側の周溝墓列上に位置しており、軸線もそれらと共通する。規模も2・6・7号方形周溝墓とはほぼ一致し、西側の周溝墓列の中では平均的といえる。方台部から埋葬施設は検出されていないが、東溝中央の溝底から検出された埋設土器は、埋葬施設と考えられる。方形周溝墓検出時には、周溝内に壺を埋設する際に掘ったであろう土坑を確認することはできなかったが、周溝全体を埋めている黒土の上に、埋め戻しと考えられる黒土と黄褐色土の混合土が堆積していること、埋設土器の南約1m離れた地点で壺にした壺の胴部の破片や、埋設土器本体に使用した複合口縁壺の頭部の破片が検出され、いずれも溝底から15~25cmの高さに集中すること、以上のことからこの埋設土器は、周溝がある程度埋没してから、土器を埋設する

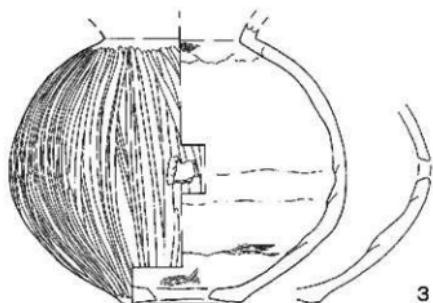
ために土坑を掘り、口縁部を打ち欠くなどの加工をした後、土器を埋設し、埋め戻したと思われる。また、埋設土器の南側で出土した2個の小形壺は、出土層位が前述した埋設土器を埋め戻した土層の最上位に位置していたこと、埋設土器のすぐ近くに二つ並んでいたことなどから、この二つの土器は埋設土器を埋め戻した直後に置いたと考えられよう。北溝から出土した6の台付甕は、溝底の直上から出土しており、周溝の埋没が始まる前に置かれたと考えられる。



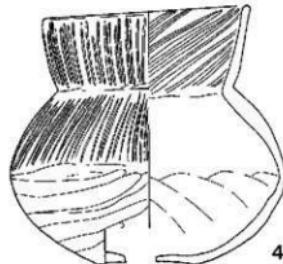
第20図 4号方形周溝墓 出土遺物 (1/3)



2

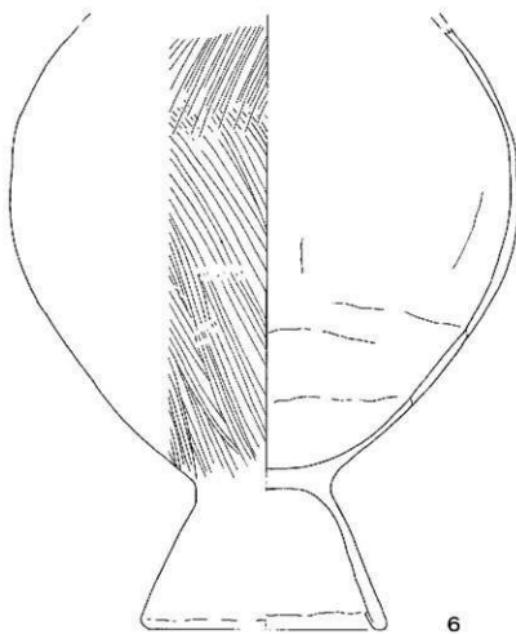
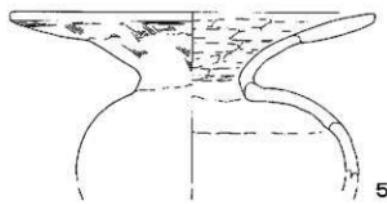


3

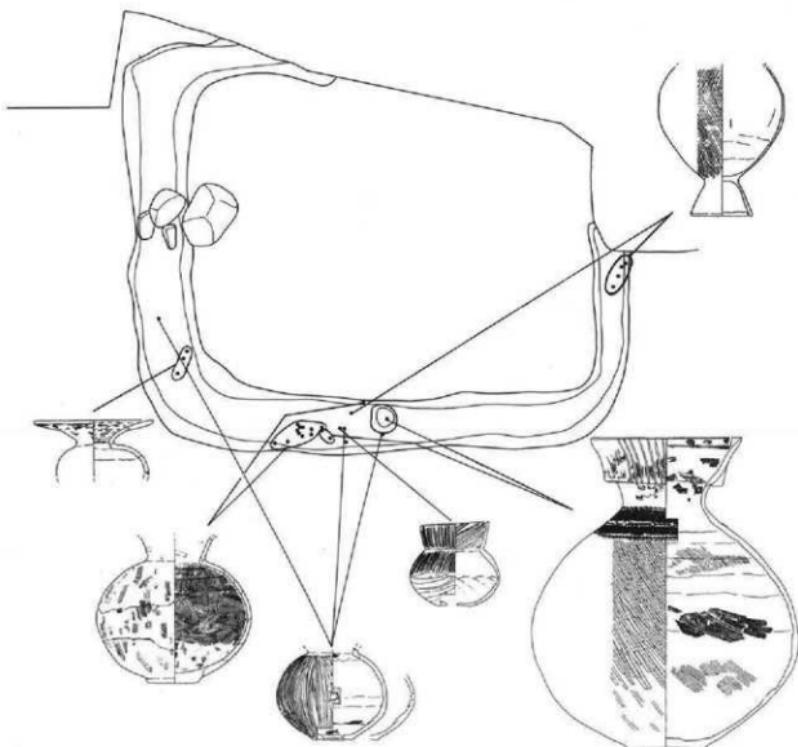


4

第21図 4号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第22図 4号方形周溝基 出土遺物 (1/2)



第23図 4号方形周溝墓 遺物分布図

第4表 4号方形周溝墓 出土遺物観察表

()は推定値、〔 〕は遺存値を示す

因数番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	技法・形態の特徴	色調	地土	備考
第20回1	中層～下層	壺	24.6	12.0	49.8	複合口縁 外面 斜位～ハケ目 ガキ 頭部二段の結晶質大一ポタシウム粘土質文 口縁部 磨擦ハケ目→頭位ハケ目〔5單位〕 瓶位～ラナデ～瓶四辺縫〔5單位〕 瓶位ハケ目～瓶位～ラナデ 口縁部 磨擦ハケ目	外面 10YR8/6 内面 10YR8/4	長石少量	埋設土器に転用
第21回2	中層～下層	壺	(11.8)	8.4	(24.0)	外面 磨擦ハケ目→ヘラミガキ 内面 ハケ目	外面 7.5YR6/6 内面 7.5YR7/6	長石、石英、白色粒 子多量混入 金屬物 含む	焼き泥瓦あり
3	上層	小形壺	—	4.7	(11.5)	外面 磨擦～ラナデ～瓶位～ヘラミガ キ 内面 ハケ目	外 7.5YR7/4 内 7.5YR7/3	黑色粒子・金雲母微 量	底部・脚部に二次 穿孔 赤砂
4	上層	小形壺	8.2	4.0	10.6	外面 口縁部及び瓶部上半部位～ラ ナデ～瓶位～ヘラミガキ 瓶部下半部 ラケズリ 内面 口縁部瓶部～ラナデ～斜位～ ヘラミガキ 瓶部下半部指頭任直	外 7.5YR 6/4	金雲母少量	底部に二次 穿孔
第22回5	上層～下層	壺	14.8	—	(7.6)	幅広口縁 外面 利位～ハケ目→瓶十デ 内面 磨擦ハケ目→瓶ナデ 口縁部 ミガキ	内外面 10YR4/6	長石・石英微量	
6	床直	古付壺	—	10.1	(24.7)	外面 磨位ハケ目 脚部瓶位～ラ ナデ 内面 磨位ハケ目→ナゲ	外 10YR6/4 内 5YR6/4	金雲母多量、長石、 石英微量	赤色顔料付着(内 外面、側面口)

5号方形周溝墓（第24～26図、写真図版8）

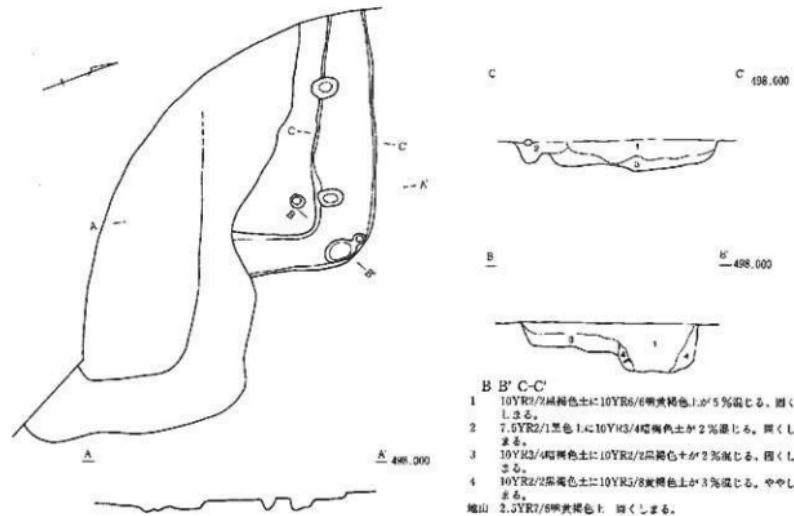
（形態・規模） 調査区最南部で、4・7号方形周溝墓の間に位置する。東には8号方形周溝墓が存在する。

周溝墓基南西部は削平されているため確認できず、北溝と東溝の一部のみ遺存していた。平面形は隅丸方形と思われる。ブリッジの有無は不明である。7号方形周溝墓に切られる。東溝は7号方形周溝墓内にまで存在するとと思われたが、東溝は確認できなかった。ピットが方台部に1基、方台部北側法面に2基、北東隅に2基の計5基検出され、そのうち、周溝北東隅にあるピットからは遺物が集中して出土した。規模は遺存している部分で東西に5.4m、南北に3mで、周溝は幅が1.0～1.3m、深さ約0.15mである。周溝の底面形状はU字形である。方台部に盛土や埋葬施設は確認できなかった。

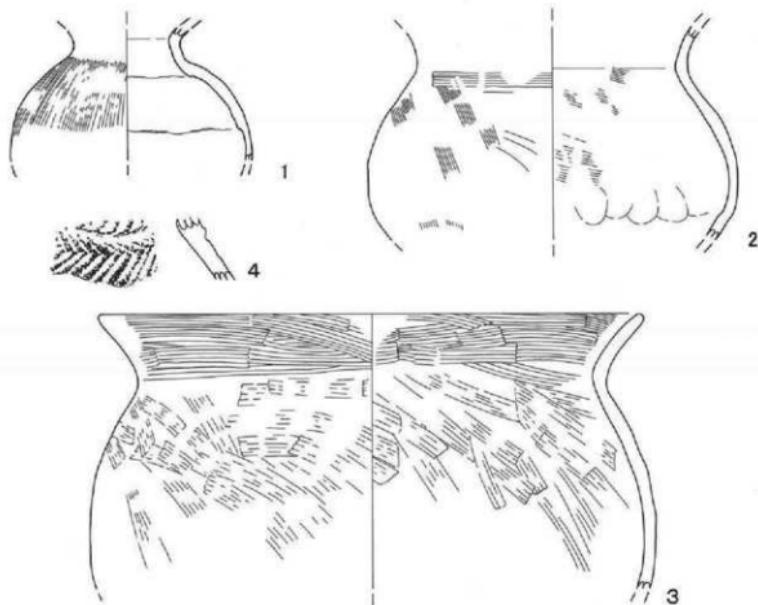
（出土遺物） 壺1、甕2、器種不明1の計4点を図化した。その他に土器片31点が出土している。1の壺、2・3の甕は周溝北東隅にあるピットからまとめて出土した。1の壺は口縁部と胴部下半は失われ、バラバラに割れていた。出土層位は中層～下層である。2の甕は胴部の破片で、出土層位は下層である。ハケ目がまばらで、器面整形が丁寧に行われていない。3の甕は口縁部から胴部にかけての大きな破片で、ピットの最下層から土器片が底面を覆うような状態で出土した。器面には、内外面共通して胴部は斜位、口縁部は横位にハケ目を施す。4の上器は北溝内の最も西寄りのピットから検出された。出土層位は上層である。器面には柄状工具の刺穴による羽状の文様を施す。

（遺構時期） 古墳時代前期

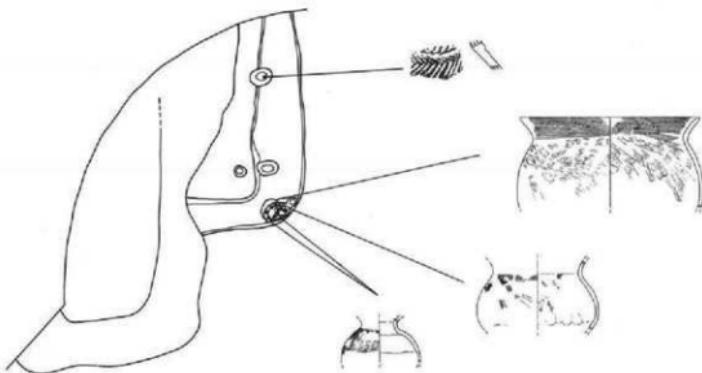
（調査所見） この周溝墓は調査区西側の周溝墓列上に位置し、軸線もそれらと共に通する。周溝の幅が隣接する4・7号方形周溝墓よりも狭いため、両周溝墓よりも一回り小型の周溝墓と考えられる。7号方形周溝墓と切り合っているが、溝を共行し合っている訳ではなく、また7号方形周溝墓が時期



第24図 5号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)



第25図 5号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第26図 5号方形周溝墓 遺物分布図

的に新しくいため周溝墓の拡張でもない。調査時には確認できなかったが、5号方形周溝墓の周溝は本来7号方形周溝墓の方台部まで存在していたと考えられる。この付近に存在する5・7・8号方形周溝墓は、耕作による遺構上部の削平が著しく、周溝が浅い。5号方形周溝墓の周溝は、溝底高が7号方形周溝墓よりもずっと高く、7号方形周溝墓の方台部とともに削平されてしまったのであろう。遺物が集中した北東隅のピットは、周溝下層の覆土を切っており、ある程度周溝が埋没してから掘り込まれ、土器を入れたと考えられる。4の土器は弥生時代のものである。

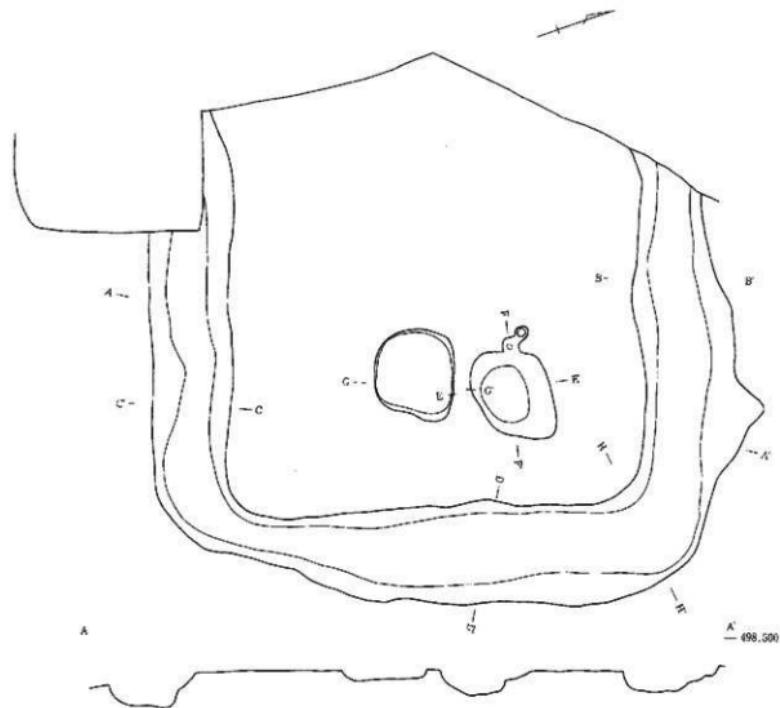
第5表 5号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は追査値を示す

調査番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	技術・形態の特徴	色調	地土	備考
第25組 1	中層一下層	小形罐	—	—	〔5.4〕	外面 縦紋ハラミガキ 内面 指ナデ	外面 7.3YR6/4 内面 10YR7/4	石英・長石・褐色粒子・白色粒子多量、 金雲母少量	
2	上層	甕			〔8.8〕	外因 縦紋ハケ目→指ナデ 口縁部 指ナデ	外面 7.3YR6/4 内面 5YR6/4	石英・長石・白色粒子・黑色粒子多量、 金雲母少量	
3	下層	台付甕	22.4	—	〔11.3〕	外因 斜紋・斜紋ハケ目・指ナデ 口 縁部斜紋ハケ目	外面 10Y2/4 内面 10YR6/4	石英・長石・黑色・ 白色粒子多量	
4	下層	不明				外因 斜状捲文 内面 指ナデ	内外面 10YR7/4	石英・長石・白色・ 白色粒子多量、金雲 母少量	

6号方形周溝墓 (第27~31図、写真図版9・10)

(形態・規模) 調査区西側中央部、3号方形周溝墓と4号方形周溝墓の間に位置する。平面プランは隅丸方形である。河川の浸食により西溝と西南・西北隅は失われていた。ブリッジは確認されていない。北東隅を含む東溝から北溝にかけて、周溝の幅が広い。規模は南北に12mで、周溝の幅は南溝が1.6m、南東隅が0.9m、東溝から北溝にかけては2.0mで、深さは均一で約0.6mである。底面形状はU字形である。



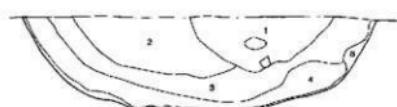
第27図 6号方形周溝墓 (1/100)

B

E 498.500 C

CD

F 498.500 D



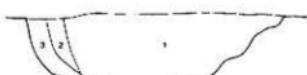
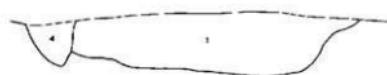
B-B' C-C' D-D'

- 1 10YR4/3に2%黒褐色土に小砾が1%混じる。炭化物1%混じる。固くしまる。
- 2 7.5YR3/2黒褐色土に小砾が1%混じる。炭化物1%混じる。固くしまる。

- 3 10YR4/3黒褐色土に10YR3/3黒褐色土が40%混じる。炭化物1%混じる。小砾が2%混じる。固くしまる。
- 4 10YR4/3黒褐色土に10YR4/3黒褐色土が50%混じる。炭化物1%混じる。小砾が2%混じる。固くしまる。
- 5 7.5YR4/3黒褐色土に5YR4/2黒褐色土が20%混じる。
- 6 10YR4/3黒褐色土に10YR3/3黒褐色土が10%混じる。炭化物1%混じる。小砾が2%混じる。固くしまる。
- 7 7.5YR4/4黒褐色土に5YR3/2黒褐色土が2%混じる。
- 8 2.5YR4/2黒褐色土に小砾2%混じる。固くしまる。
- 9 10YR4/3黒褐色土に小砾が2%混じる。固くしまる。
- 10 10YR5/6黒褐色土に小砾が1%混じる。固くしまる。
- 地山 10YR8/8黒褐色土に小砾が2%混じる。鉄分を含んだ固くしまった土が40%混じる。しまる。

E

F 498.500 E

E

E-E' 方台部土坑(南壁)

- 1 7.5YR2/1灰土。固くしまる。
- 2 7.5YR3/2黑褐色土。やわらかまる。

3 7.5YR3/2黑褐色土。固くしまる。

- 4 7.5YR3/3灰褐色土。固くしまる。

地山 10YR5/6黄褐色土。固くしまる。

G

G 498.500

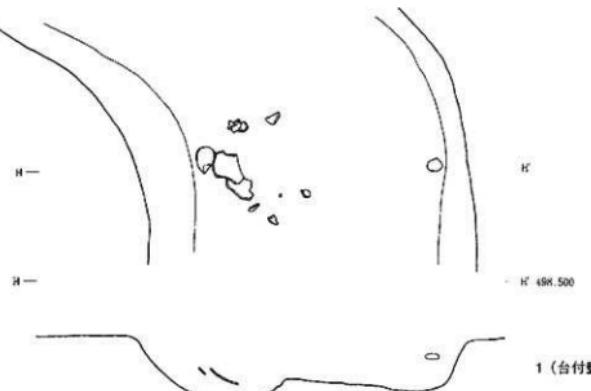


F-F' 方台部上坑(北壁)

- 1 7.5YR3/2黑褐色土に10YR4/4褐色土が5%混じる。肉くしゅる。
- 2 7.5YR2/2黑褐色土に10YR4/4褐色土が2%混じる。しまる。
- 3 7.5YR3/2黑褐色土に10YR4/4褐色土が2%混じる。固くしまる。

地山 10YR4/4褐色土に7.5YR2/2黑褐色土が2%混じる。固くしまる。

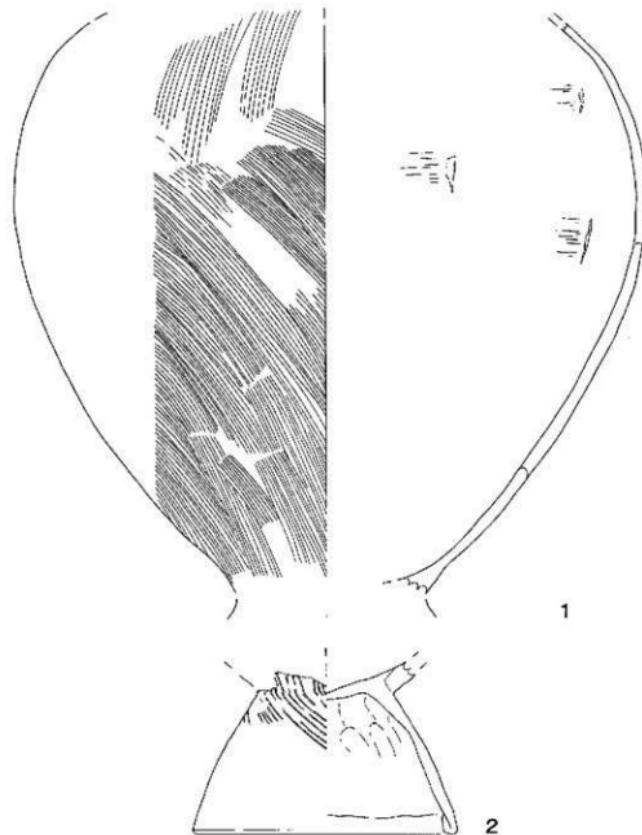
第28図 6号方形周溝墓 セクション (1/30)



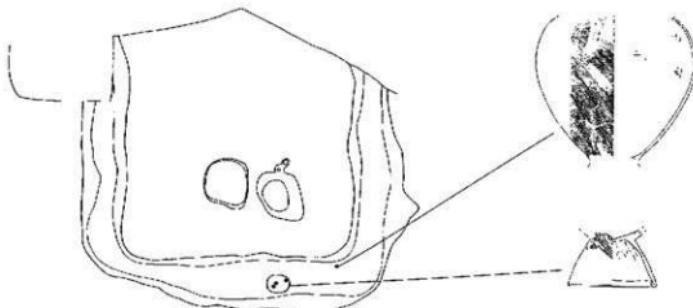
第29図 6号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/30)

方台部東寄りに土坑が2基、南北に並んで検出された。南側は円形に近い隅丸方形で、一辺約1.6m、深さ0.15mである。底面形状は平坦である。覆土は黒色土で、遺物や埋葬の痕跡はいずれも確認できなかった。北側の土坑は不正形な隅丸方形で、長軸1.8m、短軸1.6m、深さ0.42mである。底面形状はU字形である。覆土は黒色土で、遺物や埋葬の痕跡はいずれも確認できなかった。土坑の北壁に、ピットが2基切り合っていた。新旧関係はピットの方が新しい。ピットから遺物は検出されていない。方台部に蓋土は確認されなかった。

(出土遺物) 台付甕2点を図化した。その他に土器片が79点出土している。1の台付甕は、北東隅最下層から出土した。検出時は横倒しの状態で潰れ、破片が周囲に散乱している状況で、台部と口縁部は失われていた。器厚は薄く、副部には羽状のハケ目を施す。2の土器は台付甕の脚台部で、脚台部下端は折り返され、外面には斜位の不連続なハケ目を施す。覆土中層から出土した。



第30図 8号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第31図 6号方形周溝墓 遺物分布図

第6表 6号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

調査番号	出土層位	断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	構法・形態の特徴	色 調	胎 土	備考
第31號 1	下層	円筒型	—	—	[23.4]	外周 砂洗ハケ日 内面 横壁へラグズリ→ミガキ	内外面 5YR5/6	良石・全盤追多量	脚部に一次砂瓦 内外面に粗大骨付石
2	中層	古台型	—	19.8	(7.1)	外周 掘ナダ→不洁焼斜めハケ日 内面 掘ナダ・鉛鉬压痕	内外面 2.5YR4/4	石英・全盤追少量	

(造構時期) 古墳時代前期

(調査所見) この周溝墓は、3・4号方形周溝墓と並んでいるため、調査区西側の周溝墓列に属すると思われる。規模も2・4・7号方形周溝墓とはほぼ同じである。また方台部の土坑は、埋葬の痕跡は見られなかったが、その位置から埋葬施設と考えられる。方台部内での上坑の位置は2号方形周溝墓と類似する。上器破片の出土点数は多いものの、完形品や供獻当時の状況を示す遺物は少ない。古台型1・2は、ともに口縁部は失われているが、脚部の羽状ハケ日、脚台部の不連続斜めハケ日の存在から、S字状口縁古台付型であろう。

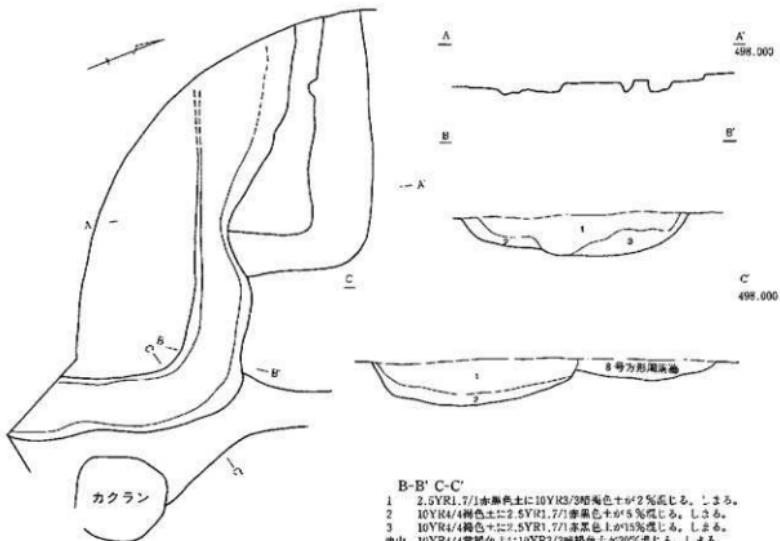
7号方形周溝墓(第32・33図、写真図版10・11)

(形状・規模) 遺跡の南端に位置する。北には5号方形周溝墓、東には8号方形周溝墓がある。周溝墓の南に存在する農道により造構の大半が失われ、北溝と東溝の一部しか検出できなかった。また、耕作により造構の上部も削平され、遺存状況は悪い。5・8号方形周溝墓と切り合いで、7号方形周溝墓は両者を切っている。平面形は隅丸方形と思われる。北溝は5号方形周溝墓と切り合うところで外周が引っ込んでおり、西側に向かうにつれて張り出す。アーチジは検出していない。規模は遺存している部分で東西に8.5m、南北に5.5mで、周溝は最大で2m、平均1.1m、最小で0.7mである。深さは0.27mである。方台部に盛土・埋葬施設は検出されなかった。

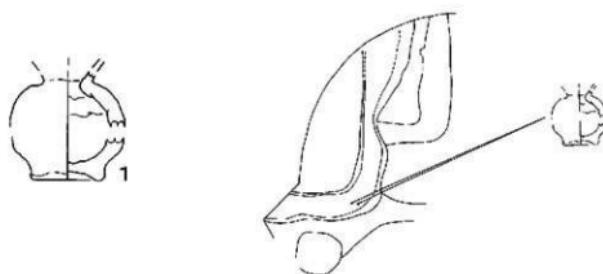
(出土遺物) ミニチュア土器の漆1点を図化した。その他に土器片29点が出土している。1のミニチュア漆は北東隅最上層から出土した。口縁部と胴半は失われていた。外面は磨かれている。

(造構時期) 古墳時代前期

(調査所見) 4・5号方形周溝墓と並ぶことから、調査区西側の周溝墓列に属すると思われる。周溝の幅などから推測するに、2・4・6号方形周溝墓と同程度の規模だと思われる。軸線の向きもそれらと一致している。5号方形周溝墓と切り合っており、北溝は5号方形周溝墓の方台部まで及



第32図 7号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)



第33図 7号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)・遺物分布図

第7表 7号方形周溝墓 出土遺物観察表

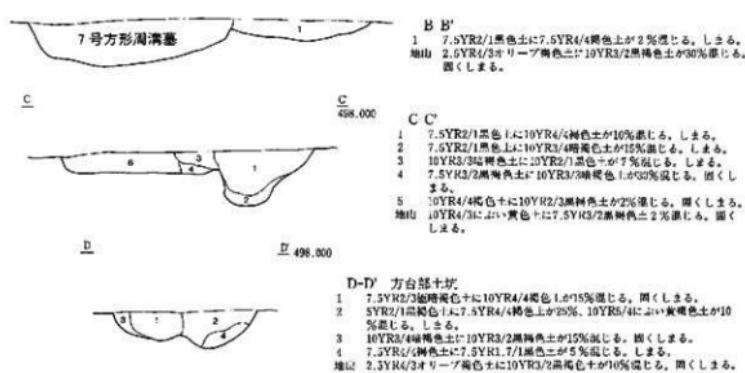
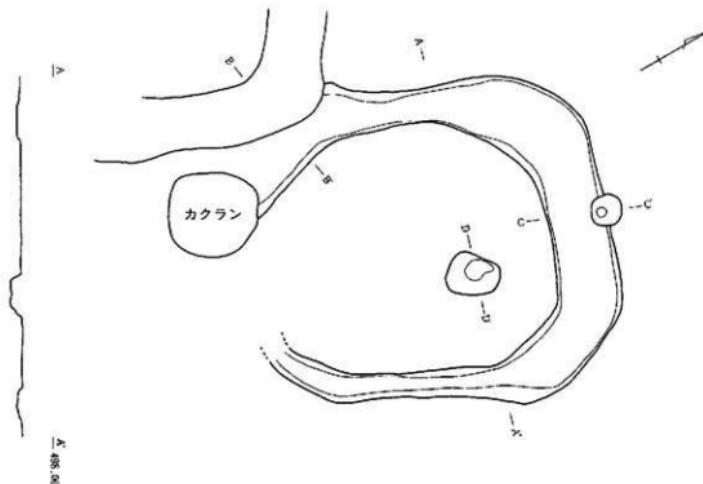
() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

調査番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	深度(cm)	性別	特徴	色調	加土	備考
第33号1	上層 中づくね上 部 小型壺	-	(3.0)	(1.5)	外側 ミガキ 内側 指ナタ	内外面 10YR6/4	石灰微量			

んでいる。8号方形周溝墓とは互いの周溝隅が部分的に重なるように切り合っている。この周溝墓は、5・8号方形周溝墓よりも大きいが造営時期は周溝墓よりも後であること、しかも切り合う形態が5号方形周溝墓と8号方形周溝墓で違っていることから、この周溝墓の被葬者と5・8号方形周溝墓の被葬者との関係が複雑であることを窺わせる。また、出土遺物に器形を復元できる個体は存在しなかった。

8号方形周溝墓（第34・35図、写真図版11）

(形状・規模) 調査区の南端に位置する。西には5・7号方形周溝墓が存在する。耕作による削平のため、遺構南端は検出できなかった。周溝南西隅は7号方形周溝墓の北東隅と部分的に切り合う。平面形状は隅丸方形だが、南北に少し長い。他の方形周溝墓と比較して四隅があまり張り出しておらず、方台部は八角形に近い。ブリッジは確認できなかった。北溝中央部外壁際でピット1基が検出された。ピットが周溝を切る。遺物は出土していない。規模は南北に8.5m、東西に6.3mで、周溝は幅1.2~1.5m、深さ0.15mである。周溝の底面形状はU字形である。ピットは直

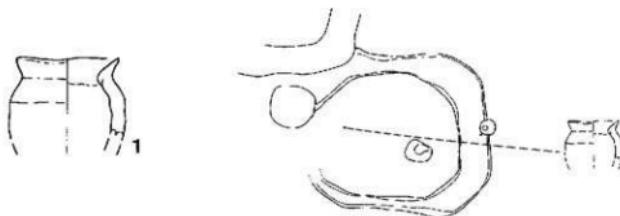


第34図 8号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)

径0.6m、深さ約0.33mである。

方台部北東寄りの位置に土坑1基が検出された。平面プランは不正円形で、規模は長軸1.0m、短軸0.85m、深さ0.24mである。土坑の底は周溝底よりも深い。土坑内から遺物や埋葬の痕跡は検出されなかった。方台部に盛土は確認されなかった。

- (出土遺物) ミニチュア土器の要し点を図化した。その他に土器片11点が出土している。1のミニチュア甕は、方台部中央から出土し、器の半分以上が失われていた。器面調整は指ナデのみで、ミガキなどは施されていない。外面は黒色である。



第35図 B号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)・遺物分布図

第8表 B号方形周溝墓 出土遺物観察表

()は推定値、〔 〕は遺存値を示す

因縁番号	出土遺物	鉢 横口径(cm)	口径(cm)	底径(cm)	抜法・形態の特徴	色 艶	胎 土	備 考
第35回1	破片由 手づくね土 器 小形甕?	(4.2)		(3.4)	内外圓 指ナデ	内外面 10YRS/1	石英少無	

(遺構時期) 古墳時代前期

(調査所見) 四隅にブリッジが見られないため、推定されるプランとして、南溝の中央に1つだけブリッジを有する形態か、ブリッジを持たず周溝が全周する形態のいずれかが考えられる。周溝墓内の土坑は、遺物・埋葬の痕跡いずれも発見されていないが、方台部内に存在することから主体部と判断した。1の甕は、出土地点が方台部内だったことからこの周溝墓の遺物として扱ったが、遺構上半が削平を受けていることを考慮すると、別遺構の遺物の可能性もある。

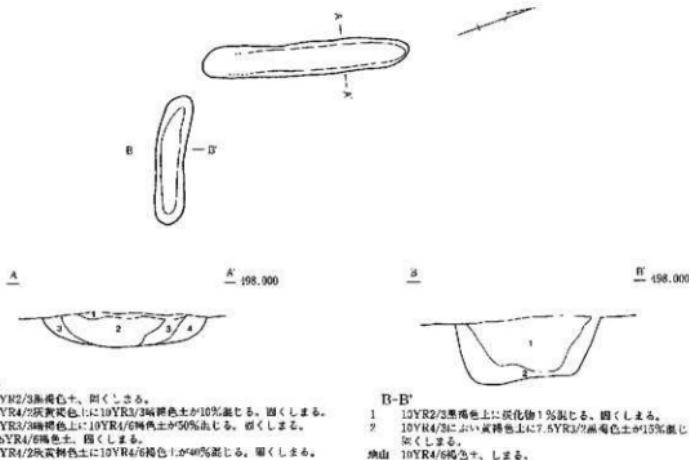
9号方形周溝墓 (第36図、写真図版12)

(形状・規模) 調査区の南部、4号方形周溝墓の東に位置する。南には8号方形周溝墓が存在する。耕作のため、遺構の上半は削平されていた。西溝と南溝のみ遺存し、平面プランはやや南北に長い方形と思われる。西溝と南溝の間にブリッジを持つ。規模は南北に5.3m、東西に3.6mで、ブリッジの幅は0.6m、周溝は幅が0.5~0.55m、深さ0.15~0.25mである。周溝の底面形状はU字形である。方台部に盛土や埋葬施設は確認されなかった。

(出土遺物) 土器片1点が出土した。

(遺構時期) 古墳時代前期

(調査所見) 周溝墓の規模は1号方形周溝墓と並んで最小である。遺構北東部に周溝は確認できなかったため、想定される平面プランは、北西隅・南西隅・南東隅の3カ所にブリッジを持つ形態か、



第36図 9号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)

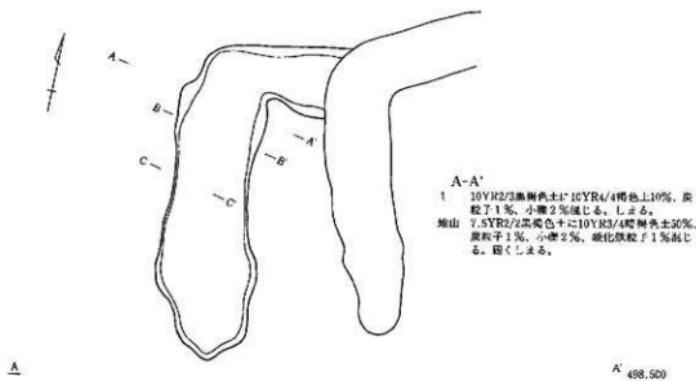
四隅にブリッジを持つ形態が考えられる。もしこの周溝墓が四隅にブリッジを持つ形態だとすると、造営年代が弥生時代にさかのばる可能性がある。しかし、ここで仮に周溝が遺構北東部に存在したとすると、削平された結果遺構南西部の西溝・南溝は遺存し、遺構北東部の周溝だけが失われてしまうことは考えにくい。しかも遺構確認面の標高は、遺構北東部の方が遺構南西部よりも10cm高い。こういった点を考慮すると、もともと周溝が遺構北東部に存在しなかった可能性もある。周溝から土器片が1点出土しているが、非常に小さく、年代決定の手がかりにはならなかったが、この周溝墓は周辺の4~8号方形周溝墓に隣接し、軸線も同方向を向いていることから、それらと同時期に造営されたと判断した。

10号方形周溝墓 (第37~40図、写真図版12・13)

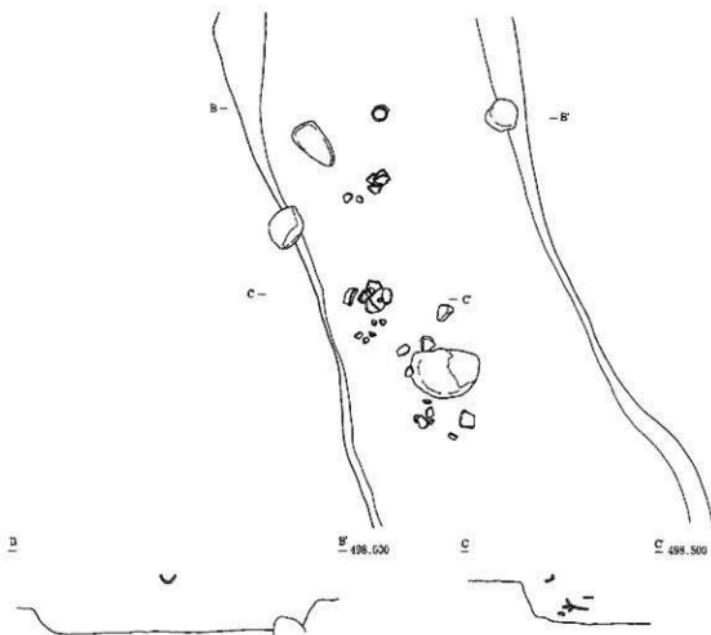
(形状・規模) 調査区の中央に位置する。北には12号方形周溝墓、西には2・3号方形周溝墓が存在する。後世の耕作により遺構の上部は削平され、遺存状況は悪い。平面プランは隅丸方形である。12号方形周溝墓に切られている。規模は東西に6.8mで、周溝は幅が1.1m~2m、深さが0.3mである。周溝の底面形状はU字形である。方台部に盛土や埋葬施設は確認されなかった。

(出土遺物) いずれも周溝内からで、壺1、台付甕1、高环1の計3点を同定した。その他に土器片92点が出土した。1の壺は、周溝南東隅の下層から出土した。口縁が大きく外反し、底部には焼成前の穿孔が施されている。器面は指ナデだけでミガキなどの調整は施さず、赤彩を全面に施している。2の台付甕は、1の壺のやや東から出土した。出土層位は上層で、脚台部のみ遺存していた。3の高环は、周溝中央の外壁付近から出土した。出上層位は中層で、検出時は横に倒れていた。底部の下半分は失われていた。器面は指ナデだけでミガキなどの調整は施さず、赤彩を全面に施している。環部中央には焼成前の穿孔が施され、脚部に貫通している。

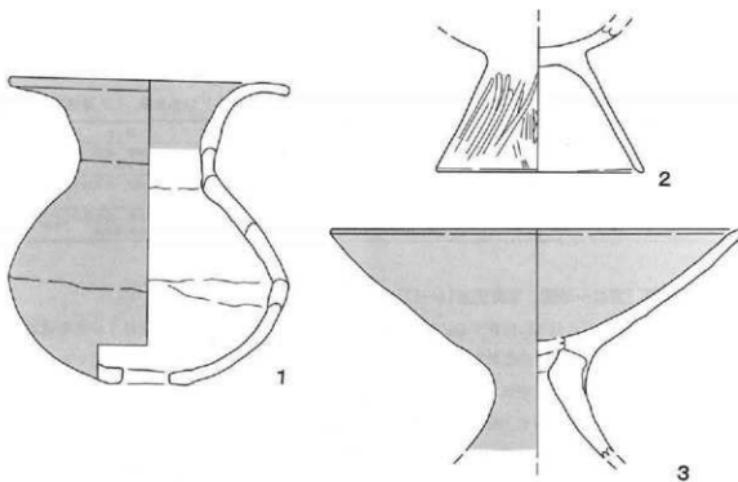
(遺構時期) 古墳時代前期



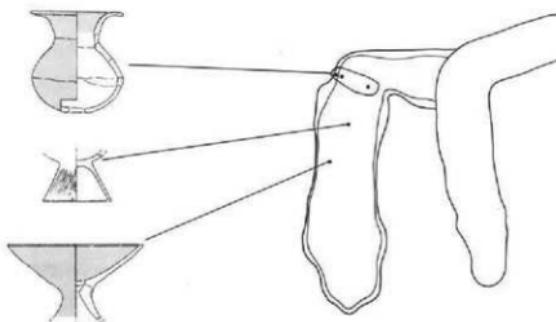
第37図 10号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)



第38図 10号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/30)



第39図 10号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第40図 10号方形周溝墓 遺物分布図

(調査所見)

調査区の北東から中央東によりかけて流路跡があり、黒色土が堆積して調査区内に黒色土帯を形成している。10号方形周溝墓はこの黒色土帯上に造営されていたため、調査は困難を極めた。切り合う12号方形周溝墓との関係だが、10号方形周溝墓の周溝は12号方形周溝墓内に確認されなかったので、周溝が方台部にまで及ぶ切り合い関係ではない。また周溝墓の拡張という場合も考えられるが、この場合拡張の対象になる周溝墓は12号であり、10号方形周溝墓は12号方形周溝墓の拡張部という扱いになる。しかし新旧関係は12号方形周溝墓が新しく、矛盾が生ずる。故にここでは周溝の共有と考えたい。また、1と3の土器は製作技法が類似し、器面が指ナデのみでミガキなどの調整を施さない、焼成前穿孔が施されている、全面に赤彩を施すなどの共通点を持つ。11・12号方形周溝墓の項でも後述するが、調査区東側に並ぶ10・11・12号

方形周溝墓は、こうした赤彩が施された特殊な土器が出土するという共通点を持つことから、西側の周溝墓列とは別の周溝墓列を形成していると思われる。

第9表 10号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

因紙番号	出土層位	新 種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴・形態の特徴	色 調	胎 土	備考
第39図1	下層	壺	11.5	3.2	12.6	横口縫、穿孔に穿孔、外面 塗ナガ 内面 塗ナガ、内面 塗ナガ	外面 5.5VR5/6 内面 7.5VR7/8	石英多量 油石、黒 色粒子少量	外曲状部
2	上層	古付壺	-	8.6	(6.0)	外面 縦欝へラミガキ 内面 梶ナガ	外面 2.5VR5/6 内面 7.5VR5/3	右突少量 黒色粒子 微量	-
3	下層	壺	17.0	-	9.4	南溝中央に穿孔、外面 环状痕ナガ 跡跡痕部へラミガキ 内面 塗ナガ	外・内面 7.5VR5/6 胎土 2.5VR4/6	石英多量 少量 少量 黒色少量	外曲状部

11号方形周溝墓 (第41~49図、写真図版14~17)

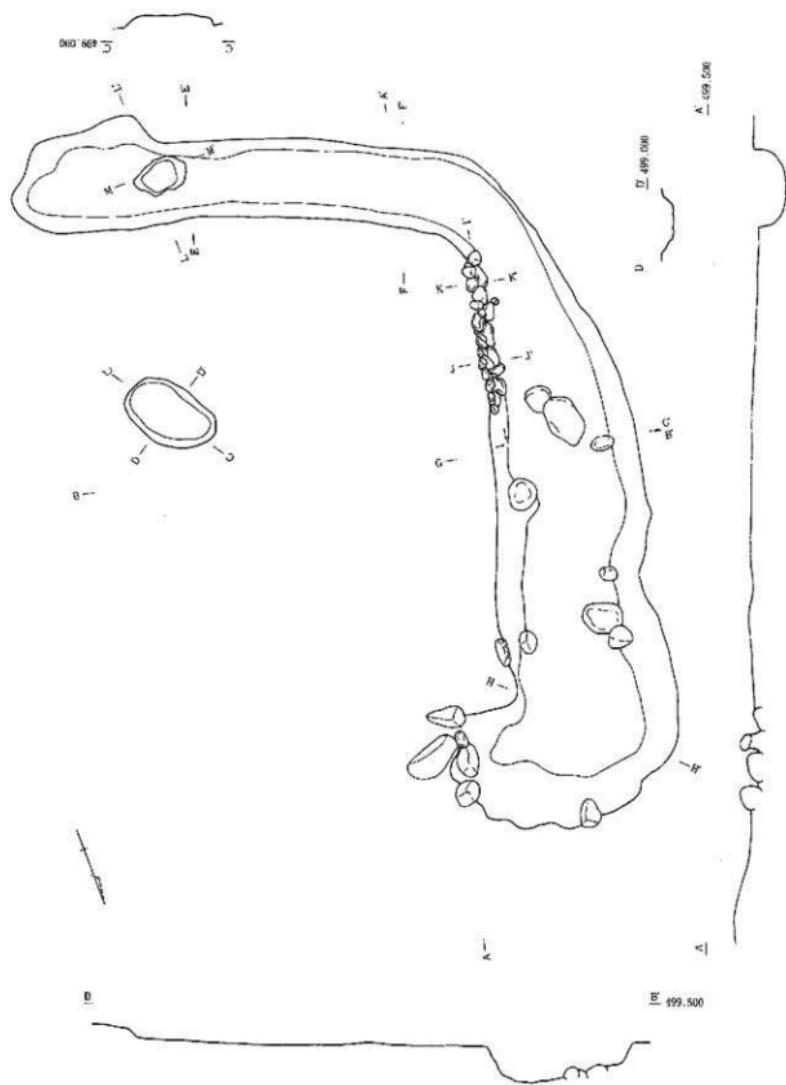
(形状・規模) 調査区の最北に位置する。西には2号住居・1号方形周溝墓、南西には2号方形周溝墓、南には10・12号方形周溝墓が存在する。2号住居を切る。平面プランは隅丸方形である。西溝は南溝と比べ外周が張り出し、幅が広い。遺構北東部に周溝は確認されなかった。方台部西側法面には貼石を施す。規模は南北に14.5mである。周溝の幅は南溝が幅1.3m、深さ0.5mで、北溝は最大幅2.6m、深さ0.7mである。南溝東部の溝底に楕円形の浅いくぼみがあり、遺物が集中して出土した。土坑の大きさは長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.06mである。方台部中央南東寄りに、楕円形の土坑が一基検出された。規模は長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.3mである。遺物は出土せず、埋葬の痕跡も検出されなかった。方台部に盛土は確認されなかった。

(貼 石) 方台部西側法面の南側に、周溝の傾斜にあわせて2~3段にかけて施されていた。貼石には人頭大から一抱えもある自然礫を使っていた。全長は3.5m、高さは0.45mである。貼石と周溝の壁面の間に、周溝覆土とも地山とも違う暗灰黄色土層がみられた。

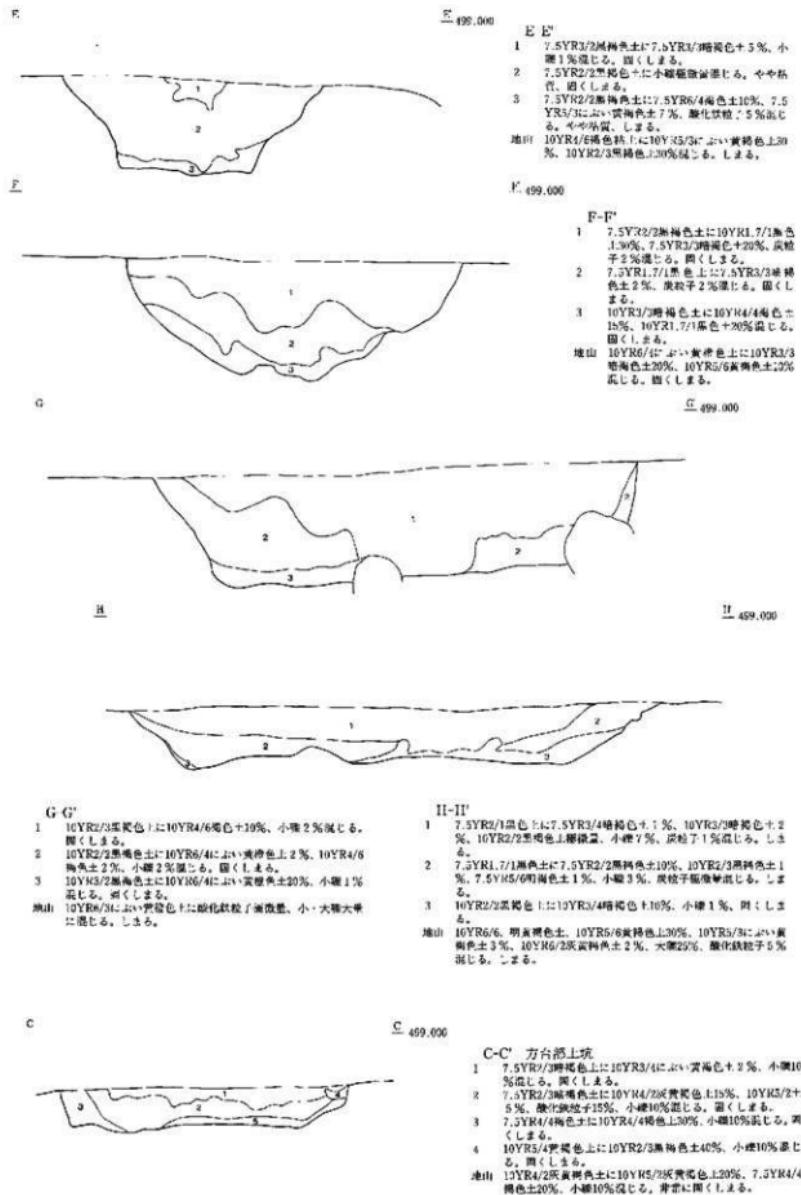
(出土遺物) 全て周溝内から出土し、小形壺2、折り返し口縫壺1、古付壺3、S字状口縫台付壺7、壺3、小形壺1、高壺1、器台1、壺1、瓶1、小塙1、器種不明4、縄文時代晩期の小鉢1の計32点を図化した。その他に土器片909点が出土している。出土量は他の方形周溝墓を圧倒する。遺物の分布は西溝中央部と周溝南西隅、南溝内くぼみ周辺の3カ所にまとまっている。

西溝中央部では1の小形壺、27の器台、29の瓶、30の小鉢、32の器種不明の土器片5点が出土した。これらの遺物の分布は、貼石の北端から北東隅手前の6mの範囲に及ぶ。1の小形壺は南溝中央部から出土し、破片が2.5mの範囲にわたって散乱していた。出土層位は覆土下層である。27の器台は、南溝中央にある地山裸の上から出土した。出土層位は覆土下層である。脚部の大半は失われていた。器受部は中央に焼成前の穿孔を施し、孔は台部と貫通する。器受部下方にヘラ削りを施す。脚部は焼成前の穿孔を3ヶ所に施し、内面にはヘラ削りを施す。29の瓶は、西溝北側から正位で出土した。出土層位は覆土上層である。器の半分が失われていた。30は縄文時代晩期の小鉢である。西溝北寄りから正位で出土した。出土層位は覆土下層である。口縫の一部は欠けていた。32は器種不明である。西溝中央部南寄りから出土した。頸部の破片で、器面に廉状文と赤彩を施す。

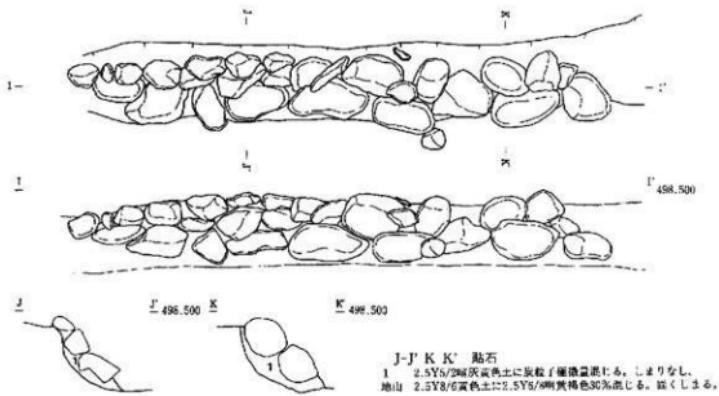
周溝南西隅では、2の小形壺、3・5・6・8の折り返し口縫壺、12・13のS字壺、31の器種不明の土器片8点が出土した。南西隅から南溝西端までの1.5mの範囲に分布する。2は小形壺で、覆土中層から出土した。出土時は逆位であった。口縫部は失われていた。内面は指でなでているが輪積み痕を残す。外面は赤彩を施した後、斜位ミガキを施す。底部にはミガキの前



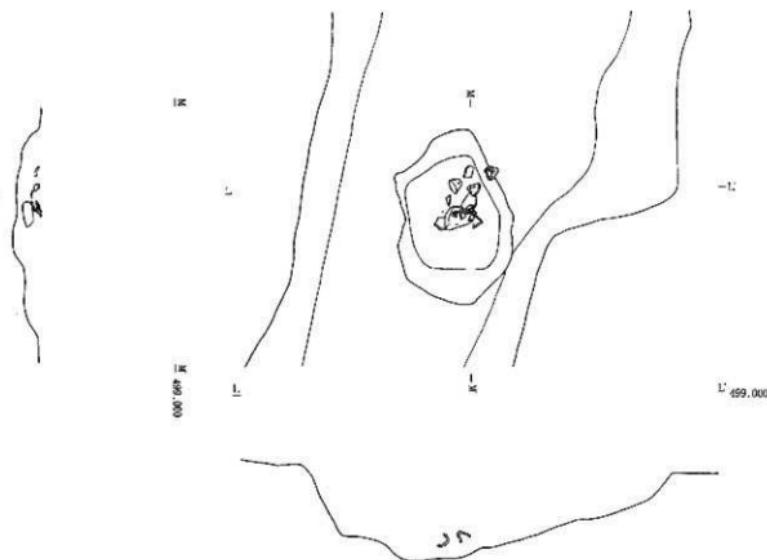
第41図 11号方形周溝蟲 (1/100)



第42図 11号方形周溝墓 周溝・主体部セクション (1/30)



第43図 11号方形周溝墓 貼石 (1/30)



第44図 11号方形周溝墓 遺物出土状況 (1/30)

に施したと思われる目の細かいハケ目が見られる。3・5~8は折り返し口縁甕で、いずれも破片で出土した。出土層位は3・6が覆土上層、5・8が覆土中層である。12・13はS字状口縁台付甕で、覆土下層から出土した。両者ともに口縁部は軽く屈曲し、口唇部は面取りされ、頸部に横位ハケ目が施されている。12の内面には指頭圧痕がある。31は器種不明である。覆土中層から出土した。肩部の破片で、器面に赤彩と廉状文が施されている。

南溝内くぼみ周辺部は、9・10・11・15・16のS字甕、17・18の台付甕、19・20・21の甕、22の手づくね土器、23・24の脚台部片、25の高坏、26の蓋、28の小碗の計16点が出土している。遺物は南溝中央部から南溝内くぼみまでの3mの範囲に分布し、特にくぼみとくぼみの西脇には遺物が集中する。この両地点から出土した遺物はほとんどが割れ、28の小碗を除き検出時に土器の形状をとどめている個体はなかった。9はS字状口縁台付甕で、南溝中央部上層から出土した。口縁部は外反し、肩部には横位ハケ目を施す。頸部内面には横位ハケ目が、胴部内面には指頭圧痕がある。10はS字状口縁台付甕で、口縁部は屈曲し、肩部に横位ハケ目を施す。頸部内面には横位ヘラ削りを施す。11はS字状口縁台付甕で、南溝中央部中層から出土した。15は台付甕で、南溝内くぼみから23の脚台部破片や25の高坏とともに出土した。出土層位は覆土下層である。胴部と脚台部の付け根部分のみ遺存する。外面には不連続な斜位ハケ目をほどこす。16は台付甕で、南溝中央部中層から出土した。胴部上半は失われていた。台部下端を折り返す。17は台付甕で、南溝内くぼみ西脇の26の蓋と同地点から出土した。出土層位は覆土中層である。胎土の質が悪く表面が崩れやすい。外面には斜位ハケ目を施すが、胴部下半には輪積み痕を残す。口縁部内面には横位ハケ目、胴部内面には斜位ヘラ削り、台部内面には斜位ハケ目を施す。20は甕で、南溝中央部から出土した。出土層位は覆土下層である。口縁部内面には横位ハケ目を施す。21は甕で、南溝内くぼみの東から出土した。出土層位は覆土下層である。口縁部を折り返す。外面には指頭圧痕がある。22は手づくね土器の甕で、胴部の2/3は失われていた。23は脚台部の破片で、器種は不明である。南溝内くぼみから15の台付甕や25の高坏とともに出土した。出土層位は覆土下層である。3ヶ所に穿孔を施す。24は台部の破片で、器種は不明である。南溝内くぼみ東半部からくぼみ東脇にかけて出土した。出土層位は覆土上層から下層にわたる。25は高坏で、南溝内くぼみから15の台付甕や23の脚台部片とともに出土した。出土層位は覆土下層で、一部上層から出土している。脚部に3ヶ所穿孔を施す。器面は赤彩の後斜位ミガキを施す。26は蓋で、くぼみ西脇の、17の台付甕と同じ地点から出土した。出土層位は覆土上層で、一部下層から出土している。胎土の質が悪く表面が崩れやすい。端部を折り返す。外面は斜位ハケ目を施した後中央部のハケ目を磨り消す。内面は横位ハケ目が施される。28は碗で、くぼみ西脇の南溝壁際から出土した。出土層位は覆土上層である。出土時は逆位である。内・外面ともに斜位ハケ目を施す。

(遺構時期)

古墳時代前期

(調査所観)

この周溝墓は全12基中最大の規模で、貼石を有するなど他の方形周溝墓とは格差が感じられる。遺物の出土量でも他の方形周溝墓を圧倒し、遺物の出土量が2番目に多い2号方形周溝墓と比較しても、破片の点数で8倍、重量で6.5倍の開きがある。この数には固化した遺物は入っていないが、その個体数でも2号方形周溝墓で6個体、11号方形周溝墓では32個体と、5倍以上の開きがある。全周溝墓の被葬者の内で、最も地位が高かったことが窺えよう。

また、調査区東側の最北に位置し、10・12号方形周溝墓とともに南北に並ぶ。周溝内から赤

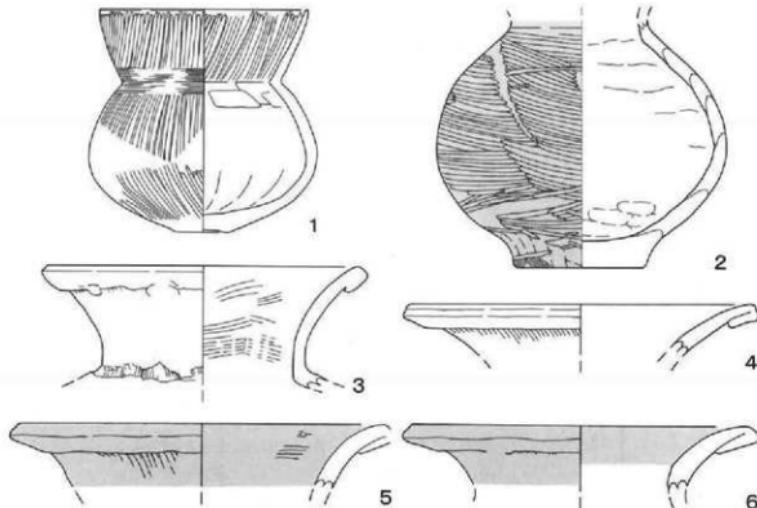
彩された土器も出土することから、この周溝墓はそれらとともに周溝墓列を形成すると思われる。

貼石は、山梨県では初例である。周辺地域では長野県飯田市田園遺跡・八幡原遺跡などで良好な事例が確認されている。両遺跡から検出された貼石を持つ方形周溝墓は、いずれも方台部法面の全周に貼石が施されていた。しかし11号方形周溝墓は方台部西側法面の一部にしか見られない。周溝内覆土から貼石から転落したと思われる礫は出土しておらず、飯田市の類例のように、貼石が方台部法面を全周していたのではないと思われる。

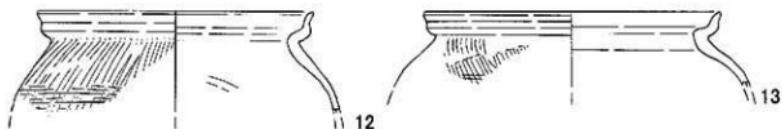
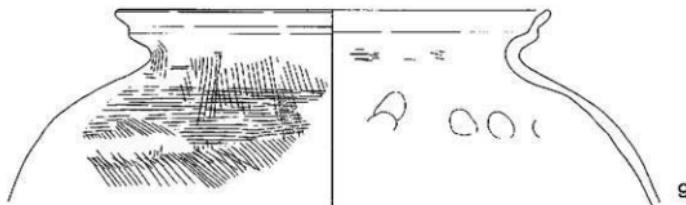
方台部内の土坑は、遺物・埋葬の痕跡いずれも発見されていないが、方台部内に存在することから埋葬施設と思われる。

遺物の分布は西溝中央部・周溝南西隅・南溝東部溝底のくぼみ周辺の3ヶ所にまとまる。各集中域の出土傾向は、西溝中央部は小形壺や器台、小鉢などの小型土器が多く、周溝南西隅は壺類が多く、南溝東部溝底のくぼみ周辺は台付甕が比較的多い。特に南溝東部溝底のくぼみとその西脇は多数の遺物が集中し、くぼみからは高环、くぼみの西脇からは蓋、台付甕、S字状口縁台付甕が出土している。

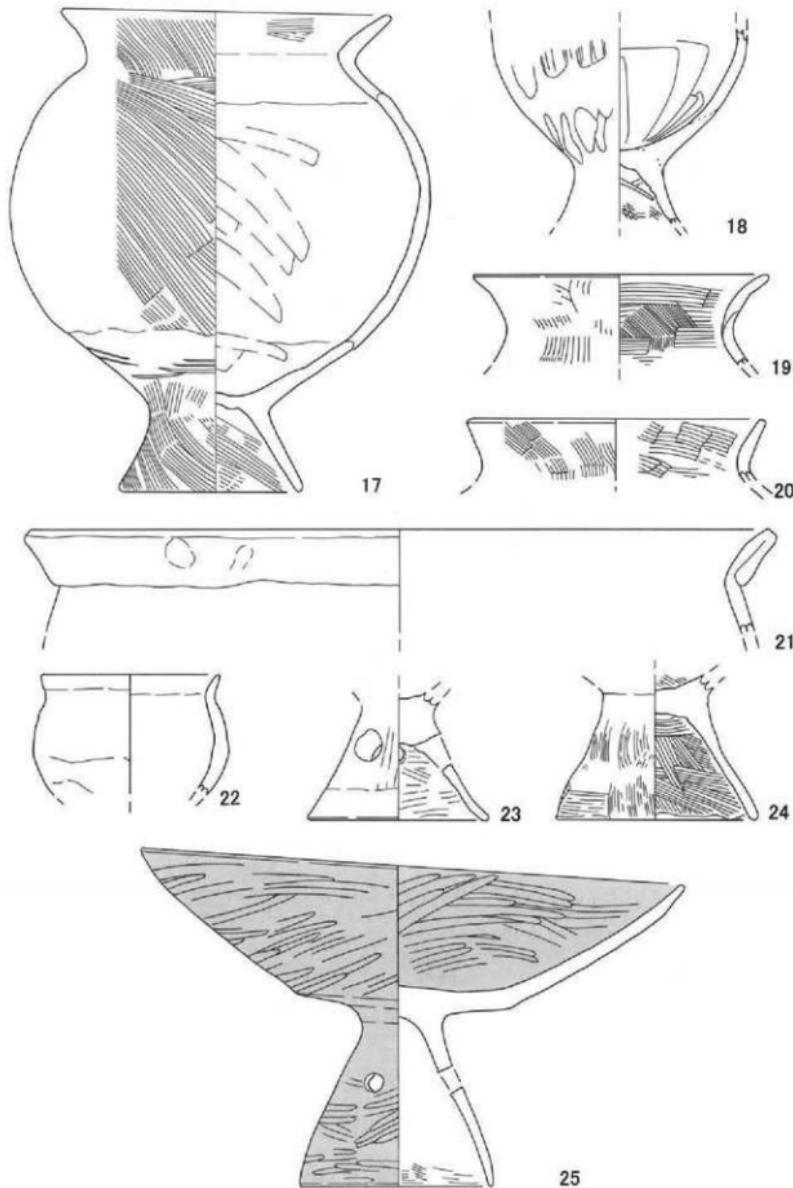
2の壺は、厚い器壁、内面に輪積み底を残す、外面に目の細かいハケ目を施した後赤彩を施し、最後に磨きをかけるといった点が、後述する12号方形周溝墓出土の三口台付壺と類似する。28の土器は绳文晚期の小鉢であるが、南溝中央部の中層から正位で検出されたため、周溝内に供献されたと判断し、この周溝墓の出土遺物に含めた。31と32の土器は中部高地系繩描文土器であり、2号方形周溝墓から出土した6の土器と類似する。



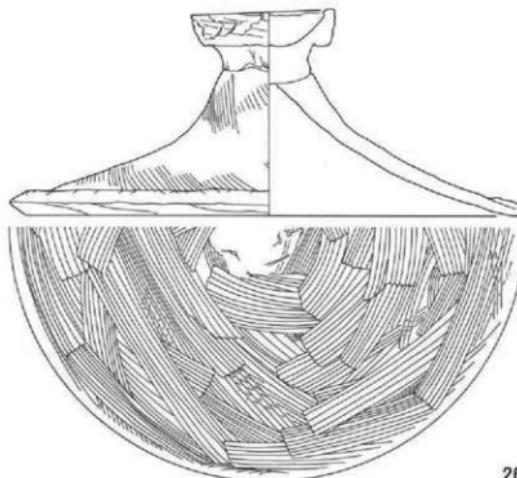
第45図 11号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



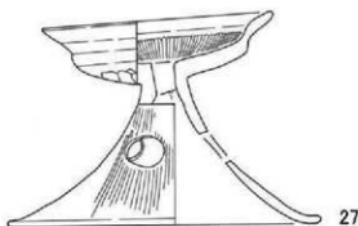
第46図 11号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第47図 11号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



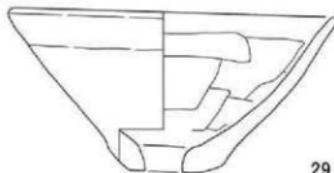
26



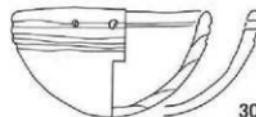
27



28



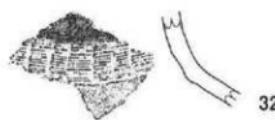
29



30

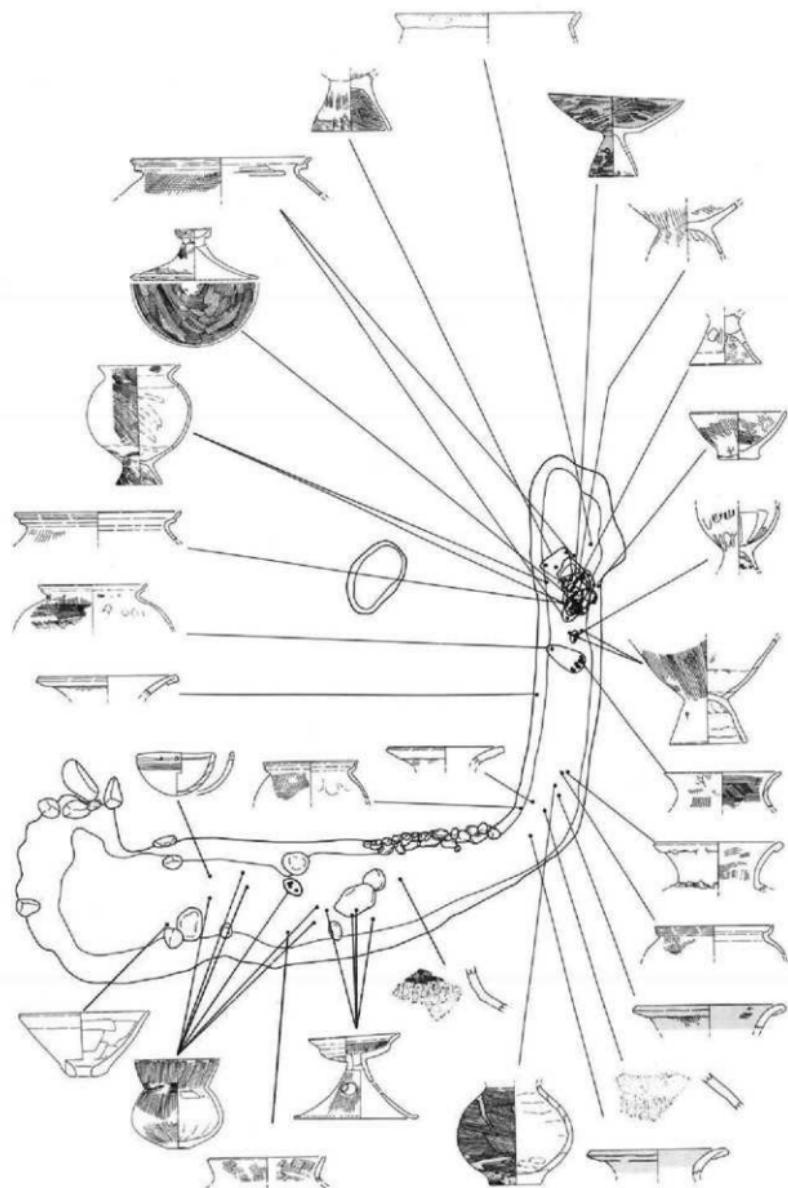


31



32

第48図 11号方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第49圖 11號方形周溝墓 遺物分布圖

第10表 11号方形周溝塗 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

段級番号	出土位置	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	新高(cm)	鉢法・形態の特徴	色	地土	備考
第45段8.1	下層	小形壺	8.7	2.4	9.2	-	外腹 斜面ハラカキ 廊底 フタナ 内腹 横側ハラカキ 口縁 例位 内腹 ハラカキ	内・外面 7.5VR7/6	石質焼成 白色粒子 少量	焼きムラあり
2	中層	小形壺	5.6	[10.2]	外腹 斜面ハラカキ→横側ハラカキ 内腹 ハラカキ	内面 10VR4/6 内面 5.5YR8/6	灰石・風化物・余土 少量	外陶薄形		
3	上層	壺	13.3	-	(4.9)	前述口縁 例位 横側ハラカキ 内腹 横側ハラカキ→横側ハラカキ	内・外面 7.5YR6/4	石英・長石少量 金 黒褐色・風化物		
4	上層	壺	14.2	-	(9.1)	前述口縁 例位 横側ハラカキ	内・外面 7.5YR7/7	石英多量 長石微量 黑色粒子 (褐色スコ リ) 中型		
5	中層	壺	15.8	-	(2.6)	前述口縁 外腹 口縫部横ナギ 横側部ハラカキ→ハラカキ 内腹 横側ハラカキ→横側ハラカ 内腹 ハラカキ	外腹 10VR4/6 内面 (水緑) 2.5YR6/4	石英・長石・風化物 余土	内陶薄形	
6	上層	壺	14.6	-	(2.6)	前述口縁 外腹 横側ハラカキ→ 横側ハラカキ 内腹 横側ハラカキ	外腹 2.5YR5/6 内面 10VR4/3	石英多量 長石・風 化物微量	内陶薄形	
第46段7	-	壺	14.2	-	(3.0)	前述口縁 外腹 横側ハラカキ 内腹 ハラカキ	外腹 7.5VR7/6 内面 5.5YR7/6	石英多量 長石・風 化物微量		
8	中層	壺	11.8	-	(2.6)	前述口縁 例位 横側ハラカキ 内腹 例位 横側ハラカキ	外腹 10YR6/2 内面 10YR6/3	石英多量 長石・風 化物・赤色粒子 (スコ リ) 微量		
9	上層	古付甕	17.8	-	(7.5)	S字不規口縁 例位 横側ハラカ 内腹 例位 横側ハラカ	内・外面 2.5Y7/3	石英少量 長石・金 黒褐色		
10	上層-中層	古付甕	18.6	-	(4.1)	S字不規口縁 外腹 横側ハラカ 内腹 例位 横側ハラカ	外腹 7.5VR5/4 内面 7.5YR7/6	石英微量 比較少量 黑褐色・余土		
11	中層	古付甕	17.1	-	(3.0)	S字不規口縁 例位 横側ハラカ 内腹	外腹 7.5YR6/4 内面 7.5YR2/1	石英少量		
12	下層	古付甕	[11.3]	-	(4.4)	S字不規口縁 例位 横側ハラカ 内腹 例位 横側ハラカ	外腹 10YR7/4 内面 10YR7/3	石英・長石・余土 微量		
13	下層	古付甕	[12.2]	-	(3.1)	S字不規口縁 例位 横側ハラカ 内腹 例位 横側ハラカ	外腹 2.5Y7/2	石英少量 長石微量		
14	下層	古付甕	(9.6)	-	(4.1)	S字不規口縁 例位 横側ハラカ 内腹 例位 横側ハラカ	外腹 10YR7/3	石英・全碧玉微量		
15	下層	古付甕	-	-	(5.0)	外付 例位ハラカ 壁内漏不連続 内付 例位ハラカ	外腹 10YR7/4 内面 2.5YR6/4	石英・長石少量 余 土		
16	上層	古付甕	-	9.7	(14.6)	外付 例位ハラカ 壁内漏不連続 内付 例位ハラカ→例位トテ 古付甕	外腹 2.5YR6/8 内面 3YR6/6	長石・金黒褐色		
第47段17	上層	内付甕	13.1	7.2	19.8	外付 例位ハラカ 壁内漏不連続 内付 例位ハラカ→横側斜面ハラカ 内付 横側斜面ハラカ	内・外面 7.5YR6/5	石英・瓦片多量 金 黒褐色・赤色 粒子 (スコリ) 微量		
18	中層	内付甕	-	-	(8.0)	外付 例位ハラカ→横側ハラカ 内付 例位ハラカ→横側ハラカ	内・外面 7.5YR6/4	石英少量 例位微量		
19	上層	甕	(12.0)	-	(3.6)	外付 例位ハラカ 壁内漏不連続 内付 例位ハラカ→横側ハラカ	外腹 10YR6/3 内面 7.5YR6/5	石英・瓦片・黑褐色 少量 金黒褐色 黑色粒子 (スコリ) 微量		
20	下層	甕	(11.8)	-	(2.5)	外付 例位ハラカ 内付 例位ハラカ	外腹 10YR7/4 内面 10YR7/4	石英多量 金黒褐色 黑色粒子 (スコリ) 微量		
21	下層	甕	30	-	(4.2)	外腹 横側斜面 内付	外腹 5YR7/3 内面 7.5YR7/4	石英微量 例位少量	手づくね上器?	
22		小形甕	7.2	-	(4.9)	外腹 瓦ナカ 西面 横側ハラカ	外腹 10YR4/3 内面 10YR5/4	石英微量 例位少量		
23	下層	不明	7.2	(5.2)	-	断面に3ヶ所成窓孔あり 外腹 瓦ナカ 西面 横側ハラカ 内腹 横側ハラカ	内・外面 10YR7/3	石英・長石少量 黑 褐色・余土 微量	脚部のみ 焼きムラあり	
24	上層-下層	不明	-	8.2	(6.0)	外腹 斜面ハラカ (一部横位もあり) 内腹 例位ハラカ	内・外面 7.5YR7/6	石英微量 白色粒子 (ス コリ) 少量	脚部のみ	
25	下層	高杯	22.3	7.9	13.9	断面に3ヶ所成窓孔あり 外腹 瓦ナカ 西面 横側斜面ハ ラカ 赤色粒子 (スコリ) 例位 横側ハラカ	外腹 (赤色) 10YR4/6 内腹 10YR6/1	石英・長石少量 黑 褐色・余土 微量	外陶厚壁	
第48段26	上層 (一部下層)	甕	5.9	20.1	8.5	外腹 例位ハラカ→横側ハラカ 内付 例位ハラカ	内・外面 7.5YR7/6	長石・白色粒子少量 石英微量		
27	下層	鉢	9.4	12.8	8.8	器底に1ヶ所成窓孔あり 外腹 瓦ナカ 例位ハラカスリ 内腹 横側斜面ハラカ 内付 横側斜面ハラカ 内付 横側斜面ハラカ	内・外面 5YR6/6 内付 2.5YR5/6	石英・全碧玉微量 赤色	脚部外面に赤影 あり	
28	上層	甕	10.1	4.4	4.9	外腹 例位ハラカ 内付 例位ハラカ	外腹 10YR7/4 内面 7.5YR7/6	石英少量 底石中量		
29	上層	甕	(13.5)	3.8	6.8	外腹 瓦ナカ 西面 横側ハラカ 内付 瓦ナカ 西面 横側ハラカ	内・外面 10YR7/3	石英微量 黑石・全碧玉 微量		
30	下層	小鉢	8.1	9.7	4.5	外腹 横側斜面ハラカ 内付 3ヶ所成窓孔位に3条付 内付 3ヶ所成窓孔位	外腹 7.5YR7/6 内付 10YR5/6	石英・長石・全碧玉 微量 黑石・全碧玉 微量	焼成時代地期上 器	
31	中層	不明	-	-	-	外腹 横側斜面 内付	外腹 5YR6/6 内付 7.5YR6/6	石英・長石・全碧玉 微量 黑石・全碧玉 微量	赤部あり	
32	中層	不明	-	-	-	外腹 西面脇端状文 内付 -	外腹 5YR6/6 内付 7.5YR6/6 内付 7.5YR7/6	石英・長石・全碧玉 微量 黑石・全碧玉 微量	赤部あり	

12号方形周溝墓（第50～54図、写真図版18・19）

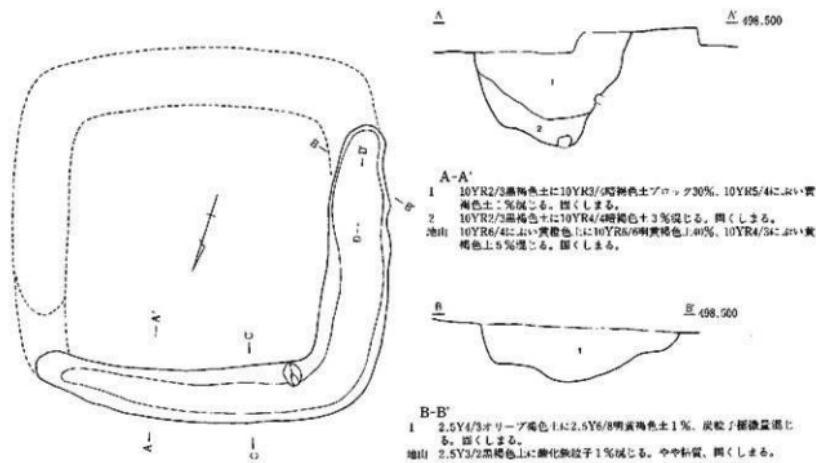
（形状・規模） 調査区中央部や北寄りに位置する。北には11号方形周溝墓、西には2・3号方形周溝墓が存在し、南の10号方形周溝墓を切る。平面形は隅丸方形で、遺構北東部に周溝は確認されず、ブリッジも確認されなかった。規模は南北に7.0mで、周溝は幅1.2m、深さ0.3mを測る。万台部の盛土・埋葬施設はいずれも確認されなかった。

（出土遺物） いずれも周溝内から出土し、三口台付壺1、勾玉1、管玉6の計8点を図化した。1の三口台付壺は、西溝中央部外壁際の最上層から出土した。出土時は正位の状態で、台部から上は削れ、周囲に破片が散乱していた。口縁は3つ持ち、副部は中央よりも下に最大径を持つ。器壁は厚く、内面には輪積み痕が残る。外面は日の細かいハケ目が施された後赤彩が施され、最後に磨きが施される。また、焼成前の穿孔が副部直上と真下に1つずつ、脚台部下端に2つある。また副部下方に焼成後に打撃が加えられ、孔があけられている。2の勾玉、3～8の管玉は、南溝中央の溝底からまとめて出土した。石質はいずれも緑色凝灰岩である。3の管玉は破損していた。

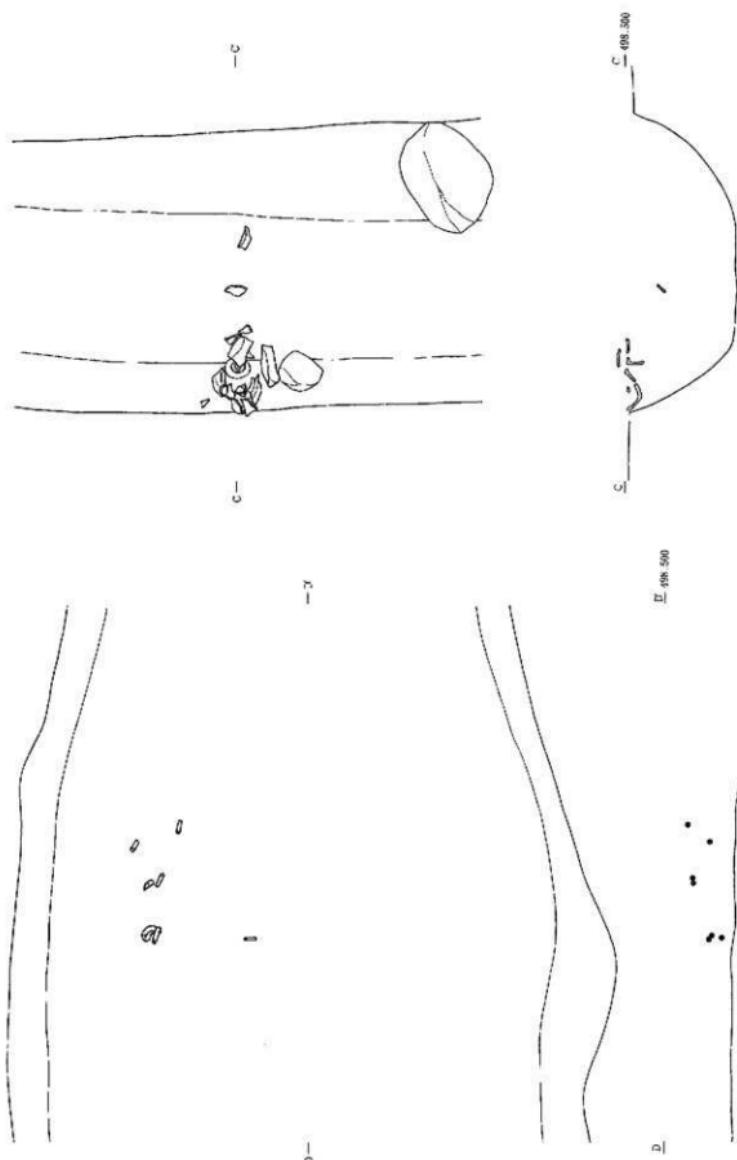
（遺構時期） 古墳時代前期

（調査所見） この周溝墓は、黒色土帶上に造営されていたため、細部に至るまで厳密に遺構平面形を確認することができなかった。調査時は遺構北東部に周溝は確認できなかったが、検出状況の写真では、周溝が全周する形のプランが見えるため、遺構北東部に周溝が存在したと思われる。ただし西溝北端では周溝壁が立ち上がっており、北西隅にブリッジがあることも考えられる。

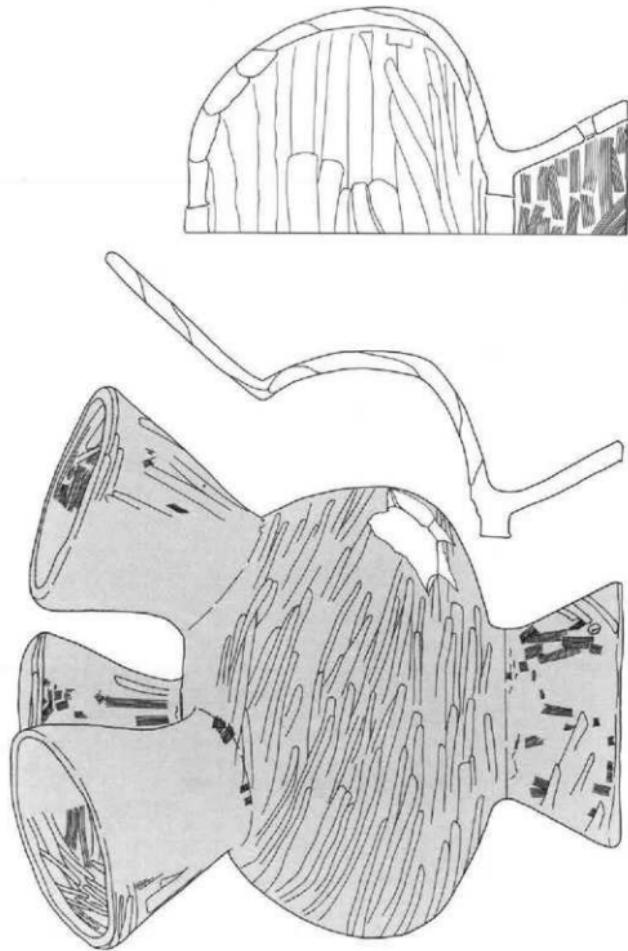
10・11号方形周溝墓とは調査区東側で南北に並び、ともに周溝から赤彩された土器が出土することから、両周溝墓とともに西側周溝列とは異なる周溝墓列を形成すると思われる。加えて、本周溝墓の規模は大きくなり、特異な形状の三口台付壺や玉類が出土しており、東側の周溝墓列の中でも特殊性が強い。軸線は、他の周溝墓と違い南に傾いており、3・10号方形周溝墓



第50図 12号方形周溝墓 (1/100・セクション1/30)

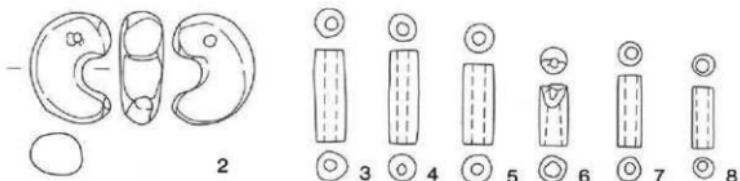


第51図 12号方形周溝基 三口台付臺 (1/20)・玉類 (1/10) 出土状況

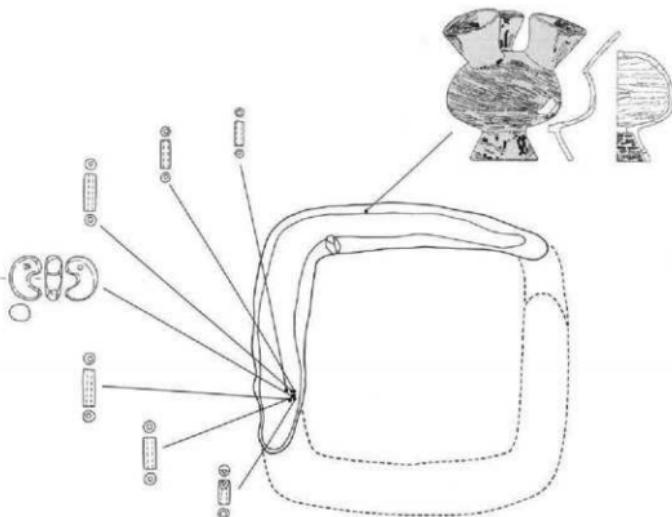


1

第52圖 12號方形周溝墓 出土遺物 (1/2)



第53図 12号方形周溝墓 出土遺物 (2/3)



第54図 12号方形周溝墓 遺物分布図

第11表 12号方形周溝墓 出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

因版番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第53図1	確認面	三口合付壺	9.6	11.6	24.4	三口口縁 壺部上・下部に地成前穿孔 外面 ハケ目→斜板ヘラミガキ 口 縁部ハケ目→縦位ヘラミガキ 内面 桜ナデ 合口部裏位ハケ目 口縁部側位ハケ目→横板ヘラミガキ	外面 10YR5/6 内面 10YR6/6	石英・白色粒子・金 雲母・多量	側部に二次穿孔 あり 全面赤芯
因版番号	下層	器種	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	技法・形態の特徴	色調	石質	備考
第53図2	下層	管玉	3.3	1.3	13			緑色凝灰岩	
3	下層	管玉	2.8	1	4			緑色凝灰岩	
4	下層	管玉	2.8	0.8	3			緑色凝灰岩	
5	下層	管玉	2.4	0.9	3			緑色凝灰岩	
6	下層	管玉	(1.85)	0.8	2			緑色凝灰岩	
7	下層	管玉	2.2	0.7	1			緑色凝灰岩	
8	下層	管玉	1.9	0.6	1			緑色凝灰岩	

と同方向である。切り合う10号方形周溝墓との関係は、10号方形周溝墓の項でも述べたが、周溝の共有と考えたい。

南溝から出土した玉類は、曲玉が1つと管玉が大・中・小の3種類の大きさが2つずつセットになっており、一組の装身具と考えられる。これらは被葬者の副葬品と思われるが、この周溝墓の方石部に埋葬施設は確認されなかった。溝内に伴う副葬品の可能性も考えられるが、溝底に土坑の掘り込みは確認できず、埋葬の痕跡・人骨いずれも確認できなかった。三口台付壺は、西溝中央部の最上層から正位で出土していることから、周溝がかなり埋没してから溝内に供獻されたと思われる。また、11号方形周溝墓の項でも述べたが、この土器は11号方形周溝墓出土の2の小形甕と同じ製作技法で作られており、11号方形周溝墓との関連を窺わせる。山梨県内に類例はなく、在地系土器か外米系土器か全く不明である。こうした赤彩土器の出土は、西側の周溝墓列にはみられないものであり、東側の周溝墓列を特徴づけているといえる。

(2) 壁穴住居

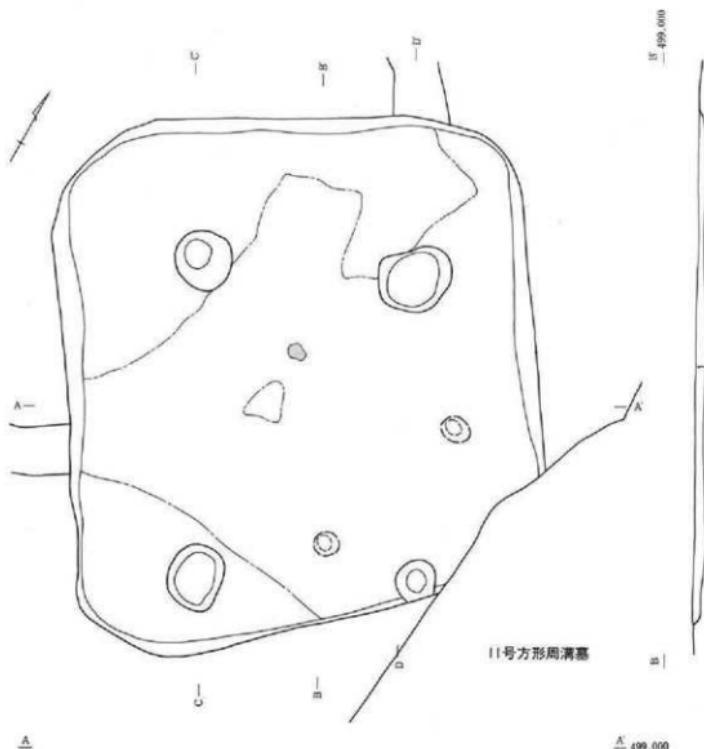
2号住居(第55~58図、写真図版20)

(形状・規模) 後世の耕作により遺構の上部は削平され、住居壁面は最大で10cm、平均5cm程度しか遺存していないかった。平面形は隅丸方形である。住居西隅は壁面が完全に失われていた。南隅は11号方形周溝墓に切られる。規模は長軸4.25m、短軸4.0m、深さは最大で0.1mを測る。柱穴は4本で、柱根は確認できなかった。住居の中央にわずかだが焼土が検出された。貼床硬化面は、北西の壁際と、住居西隅の壁際と中央の焼土周辺にみられた。また、床面検出時には確認できなかったが、住居掘り方検出時、南柱穴と東柱穴の間と北柱穴と東柱穴の間に、直径8cmの小ビットが1基ずつ確認された。

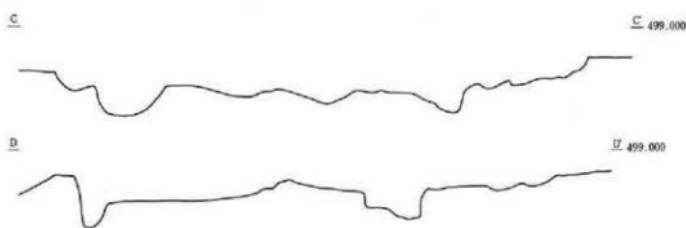
(出土遺物) 壺1、小形甕1、甕1、S字状口縁台付壺1、台付甕2、縄文時代の磨製石斧1点の、計7点を図化した。これらはすべて床面もしくは覆上最下層から検出され、磨製石斧を除き全て破片である。その他に土器片51点が出土している。1の壺は口縁が折り返されている。2の甕は肥厚した口縁部を持ち、外面には斜位ハケ目が、口縁部内面には横位ハケ目を施す。4の甕は口縁が折り返されている。内面には横位ヘラ削りを施す。5のS字状口縁台付壺は口縁部が外反する。6・7の甕は外面に斜位ハケ目、内面に横位ハケ目を施す。8の甕は口唇部に刻み目を施し、器面には斜位ハケ目を施す。9の磨製石斧はほぼ完形で、住居中央の焼土のすぐ南から出土した。

(遺構時期) 古墳時代前期

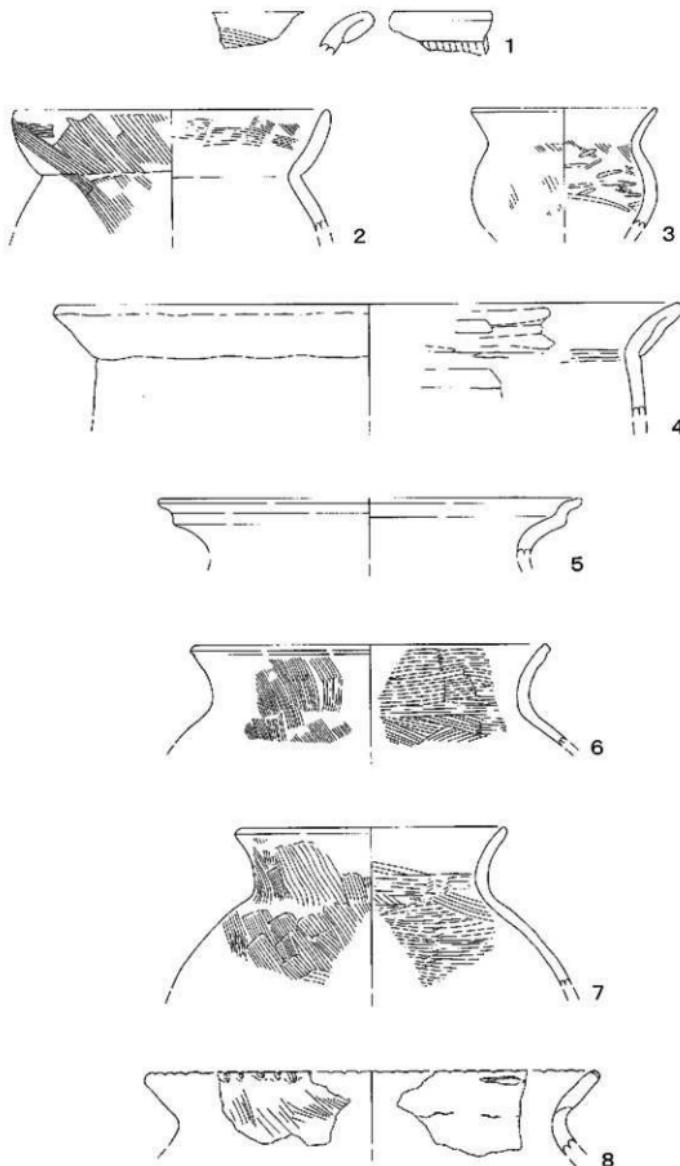
(調査所見) この住居は、遺構南半が遺跡中央の黒色土帶にあるうえ、1号方形周溝墓や11号方形周溝墓と切り合っていたために、プラン確認は困難であった。確認面で判断した住居の範囲と、柱穴の位置から想定される住居の範囲にはずれがあり、住居の南東の壁面はもう少し広がる可能性がある。1号方形周溝墓と切り合うが、切り合いを土層断面で確認できなかった。だが、1号方形周溝墓の周溝と2号住居の壁面が切り合う位置で、貼床が周溝の底よりも高い位置にみられたため、2号住居は1号方形周溝墓よりも新しいと判断した。磨製石斧は、縄文時代の遺物だが、焼土のすぐ南の床上で出土したことから、この住居に持ち込まれたと判断した。



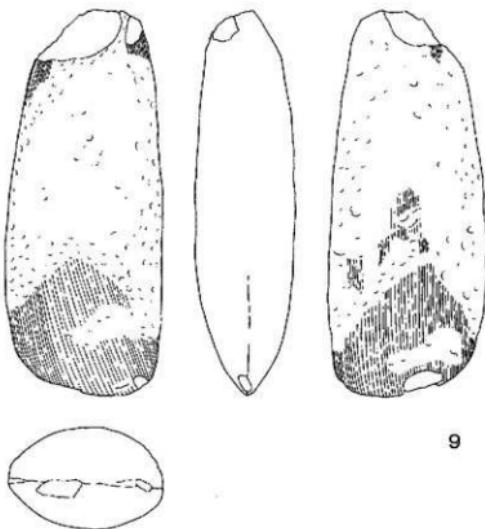
A-A' B-B'
 I 10YR2/2黒褐色土に10YRA/6褐色土15%、小礫2%混じる。しまる。
 地山 10YR2/6褐色土。10YR2/2黒褐色土5%混じる。固くしまる。



第55図 2号住居 (1/40)

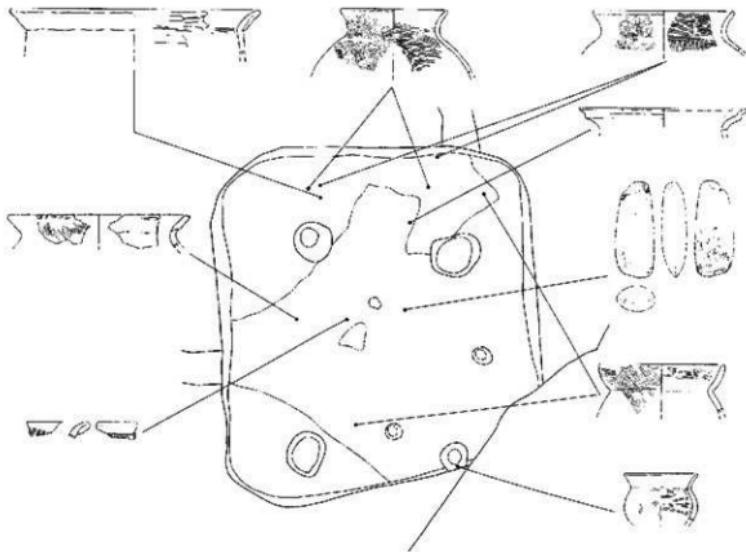


第56圖 2号住居 出土遺物 (1/2)



9

第57図 2号住居 出土遺物 (1/2)



第58図 2号住居 遺物分布図

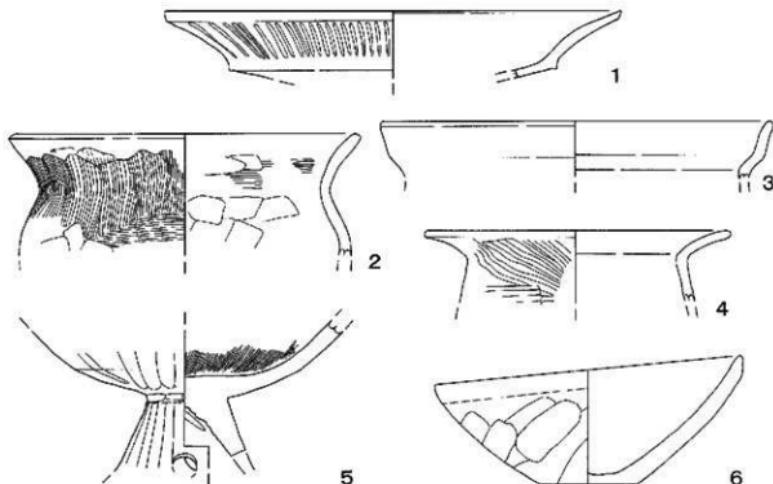
第12表 2号住居遺物観察表

()は推定値、〔 〕は遺存値を示す

回収番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	被法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第56回1	床面	壺	-	-	(1.8)	折り返し口縁 外面 横位ハケ目 内面 斜位ハケ目・横ナデ	外面 10YR6/2 内面 7.5YR6/3	金雲母・長石風呂	
2	床面	甕	(12.6)	-	(5.2)	外面 斜位ハケ目 内面 横位ハケ目→ヘラケズリ	外面 7.5YR7/4 内面 7.5YR6/4	右美・長石・白色・ 黑色・赤色粒子微量	
3	下層	小形甕	(7.8)	-	(4.5)	外面 横ナデ→斜位ハケ目 内面 斜位ハク目→ヘラケズリ	外面 10YR6/2 内面 7.5YR2/2	石英・長石・無色粒 子・金雲母微量	
4	貼灰下	甕	(25.6)	-	(4.6)	折り返し口縁 外面 横ナデ 内面 ヘラケズリ	外面 2.5Y3/1 内面 7.5YR8/4	右美・長石・黑色粒 子・金雲母少量	
5	下層	台付甕	(17.0)	-	(2.5)	5字状口縁 内面 横ナデ	外面 7.5YR4/2 内面 7.5YR5/3	金雲母・白色粒子微 量	
6	下層一床面	甕	(14.2)	-	(4.2)	外面 横位ハケ目 内面 横位ハケ目	外面 7.5YR6/2 内面 7.5YR6/4	右美・長石・白色・ 黑色粒子微量	
7	下層	甕	(11.2)	-	(6.5)	外面 斜位ハケ目 内面 横位ハケ目	外面 5YR7/6 内面 7.5YR6/6	白色粒子・黑色粒 子・微量	
8	床面	甕	(18.6)	-	(2.5)	じわ縁 刻み目 外面 横位ハケ目 内面 横位ハケ目・横ナデ	内・外面 5 YR4/6	金雲母・白色粒子・ 黑色粒子・微量	
回収番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	重量(g)	石 貝	備考	
第57回9	床面	漆器石斧	11.9	4.8	3.1	292	緑色灰岩		

(3) 遺構外出土遺物 (第59図、写真図版21)

壺1、甕3、高坏1、塊1計6点を図化した。いずれも遺構外からの出土である。1は壺である。平安時代の1号住居から出土した。口縁部に段をもつ。1号住居は3号方形周溝基の東南コーナーを切っているため、この七器はもととは3号方形周溝基の周溝内にあつたと思われる。2は甕である。頸部外面に縦位ハケ目を施す。内面は横位ハケ目の後、ヘラ削りを施す。3は甕である。口縁部に段を持つ。4は甕である。口縁部が大きく外反し、外面には斜位ハケ目を施す。5は高坏である。脚部に4ヶ所穿孔を施す。外面に縦位ヘラ削りを施し、内面に目のかいハケ目を施す。6は塊である。外面に斜位ヘラ削りを施す。



第59図 遺構外出土遺物 (1/2)

第13表 遷構外出土遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

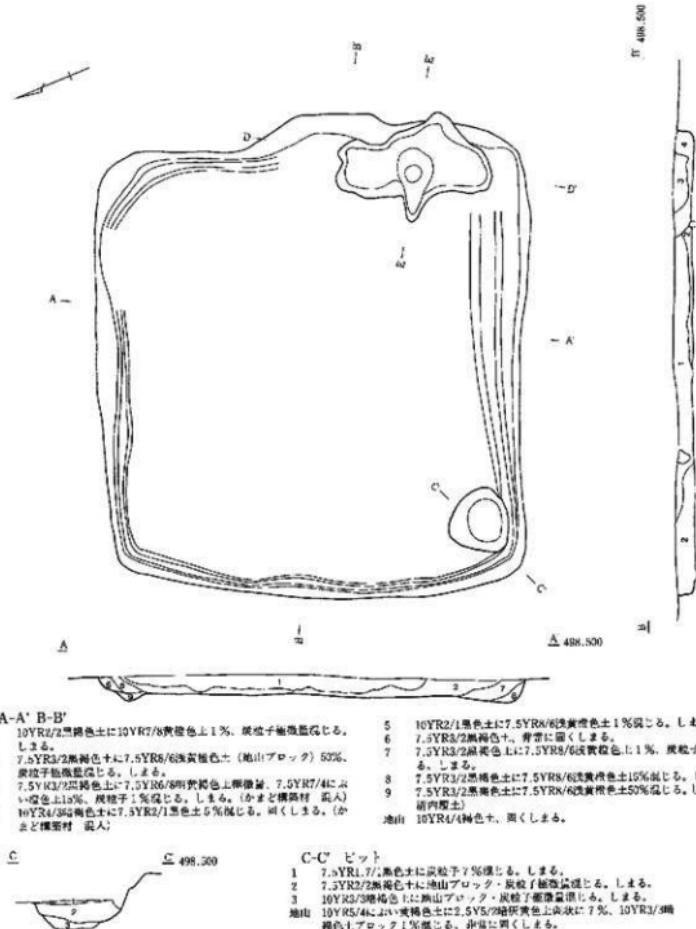
団体名	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	露口(cm)	技法・形態の特徴	色調	胎土	備考
第59回 1	—	壺	(18.6)	—	(7.9)	一重口縁、外面 幢ナデ・堅位ヘラミガキ 内面 繩ナテー縦位ヘラミガキ	外面 5YR6/6 内面 5YR7/6	石英・灰石・金雲母・ 墨色粒子少量	1号住居出土
2	焼	14.3	—	(5.0)	—	外面 ハケ目 口輪脚ナデ 内面 ハケ目→ヘラミガキ	外面 7.GYR2/1 内面 2.5Y7/3	石英・灰石・金雲母・ 墨色粒子微量	内部未完成
3	—	壺	(16.0)	—	(2.3)	外面 指ナデ 内面 ヘウミガキ	外面 10YR6/3 内面 10YR7/3	石英極量	焼きムラあり
4	小形甕	(12.0)	—	(2.3)	—	外面 ハケ目 口輪脚 指ナデ 内面 ハケ目・指ナデ	外面 10YR7/3 内面 10YR6/2	石英少々、白色・ 無粒子微量	焼きムラあり
5	—	凸环	—	—	(6.4)	外面 ハケ目→ヘラナデ 内面 ハケ目→ヘラナデ	外面 7.SV28/6 内面 3YR6/2	石英・灰石・金雲母・ 墨色粒子微量	
6	—	甕	12.6	5.3	3.8	外面 ハケ目→ヘラカズリ 口縁脚ナデ 内面 ハケ目→ヘラミガキ 口縁脚ナデ	内・外面 7.5YR7/6	白色・墨色粒子中量	焼きムラあり 内面剥離著しい

第5章 平安時代の遺構と遺物

豎穴住居跡！軒が検出された。以下に遺構・遺物を報告するが、遺構の時期は甲斐型土器研究グループ1992「甲斐型土器—その編年と年代」山梨県考古学協会の編年に従い、出土遺物より決定した。

1号住居（第60～64図、写真図版22）

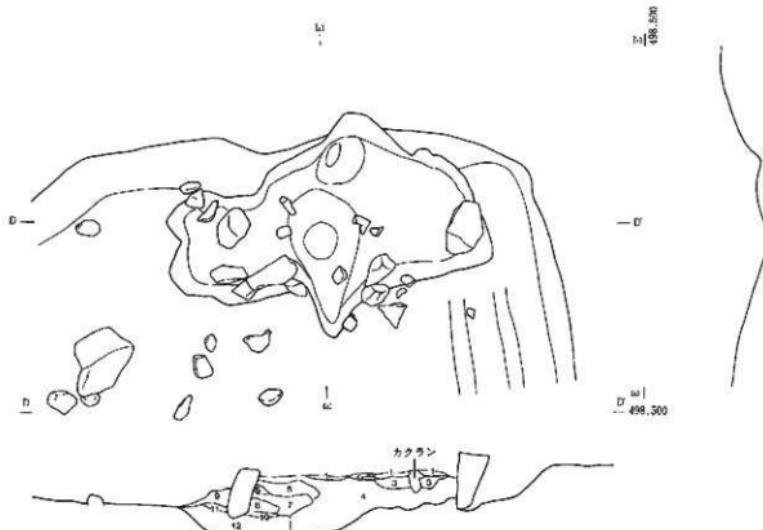
（形状・規模） 平面形は隅丸方形で、規模は1辺が3.5m、床面までの深さは0.16mである。床面はかまど部と周溝際を除き、ほぼ全面に固く締めた貼り床が検出された。かまどは東壁南寄りに位置し、



第60図 1号住居 (1/40・ピットセクション1/30)

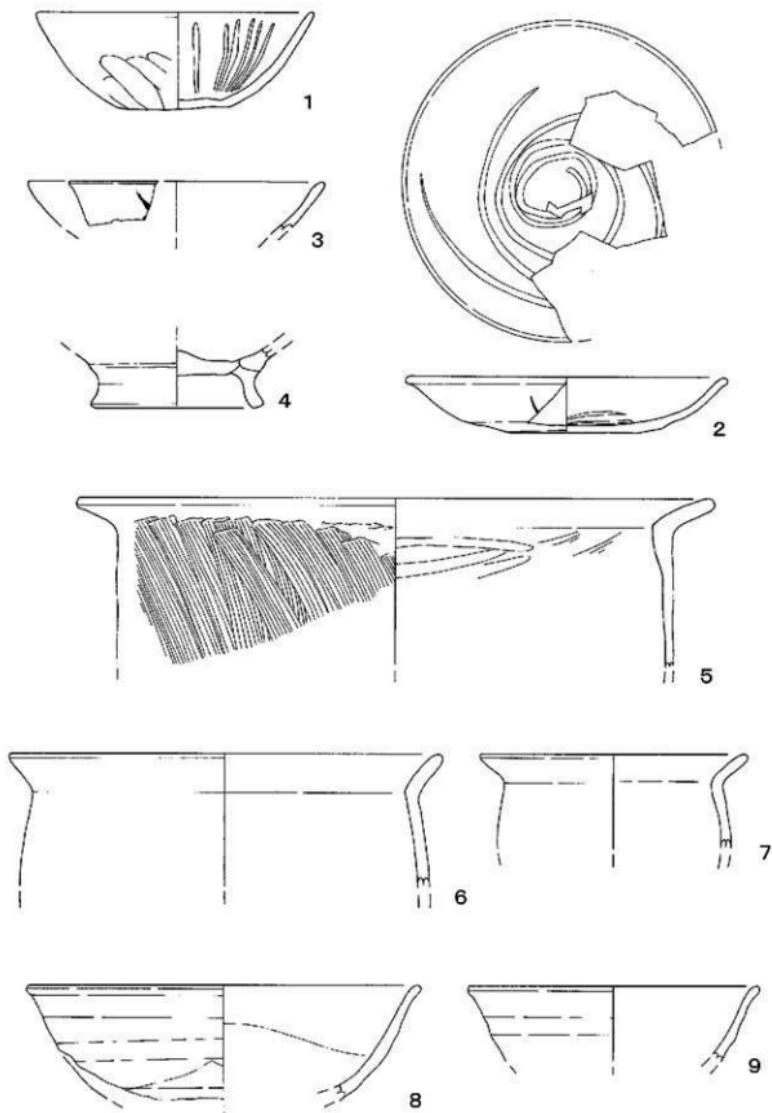
浅い掘り込みが検出された。かまどは完全に壊され、周囲には構築材に使われたと思われる灰色の粘土と被熱磚、焼土が混じった廃土が堆積していた。この廃土は、住居南壁中央部まで広がっていた。周溝は東壁南寄り周辺を除いて、ほぼ全周にわたって検出された。柱穴は確認されていない。住居南西隅にピット1基が検出された。廃土は自然堆積で縦まりがなかった。

(出土遺物) 土師器壺1、皿2、高台付壺1、甕3、灰釉陶器環2、砥石1の計10点を出土した。その他に土器片99点が出土している。遺物はかまど周辺、北壁西寄りとピット周辺の3ヶ所に集中していた。かまど周辺からは、5・6・7の土師器壺と8・9の灰釉陶器環が出土した。出土層位は5の壺と8の灰釉陶器環は上層で、9の灰釉陶器環は中層である。北壁西寄りでは、1の土師器壺と4の高台付壺が出土した。出土層位は、1の壺は床直で4の高台付壺は上層である。ピット周辺からは、2・3の土師器皿と10の砥石が出土した。出土層位はいずれも床直である。1の壺は口縁部がわずかに肥厚する。胴部下方に斜位ヘラ削りを、内部に放射状暗文を施す。底部はへらで削られている。2の皿は口縁部がわずかに外反し、底部には回転ヘラ削りを、内面には渦巻き状暗文を施す。外面に墨書がある。3の皿には墨書がある。4は高台付壺である。廃土上層から出土した。高台部のみ遺存する。5は壺である。外面には斜位ヘラ目を、頸部内面には横位ヘラ削りを施す。8は灰釉陶器環である。釉薬は付け掛けされている。10の砥石は自然礫を転用したもので、片面に丸溝状の研痕があり、反対側には平坦な砥痕がある。石質は結晶片岩である。



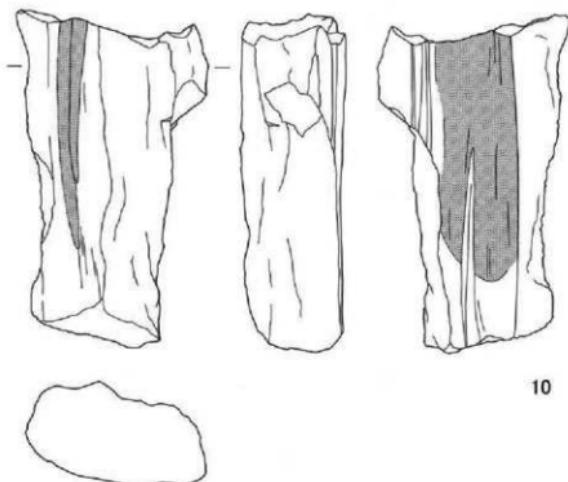
- | | |
|-----------|--|
| D D' E E' | かまど |
| 1 | S.YR3/2黒褐色土上、固くしまる。 |
| 2 | 13YR8/2黒褐色土に炭粒子散在する。固くしまる。 |
| 3 | 7.5YR2/4褐色土に粘土粒子3%混じる。しまる。(底土層) |
| 4 | 7.5YR2/2褐色土に7.5YR2/3赤褐色土7%混じる。しまる。 |
| 5 | 7.SYR4/2赤褐色土に7.5YR2/2赤褐色土7%、燒土粒7%、7.5YR4/3褐色土1%。かまど構築材に使われた粘土1%3%混じる。固くしまる。 |
| 6 | 5YR2/1黒褐色土。しまる。 |
| 7 | 10YR2/1黒褐色土に炭化子10%混じる。しまる。 |
| 8 | 7.SYR4/3褐色粘土、ややしまる。 |
| 9 | 7.5YR3/3褐色土(=7.5YR4/3褐色土)少量混じる。固くしまる。 |
| 10 | 5YR3/6H赤褐色土、固くしまる。(地上層) |
| 11 | 15層構成(地土層) |
| 12 | 7.5YR2/2黒褐色土に7.5YR4/4褐色土少半混じる。しまる。 |
| 地山 | 10YR2/2黒褐色土に7.3YR4/6褐色土10%、10YR8/4赤褐色土20%、7.5YR4/1褐色土10%、7.5YR2/3赤褐色土(=7.5YR4/1褐色土)10%、10YR2/1黒褐色土10%、炭粒子混じる。しまる。(粘土と同様) |

第61図 1号住居 かまど (1/20)



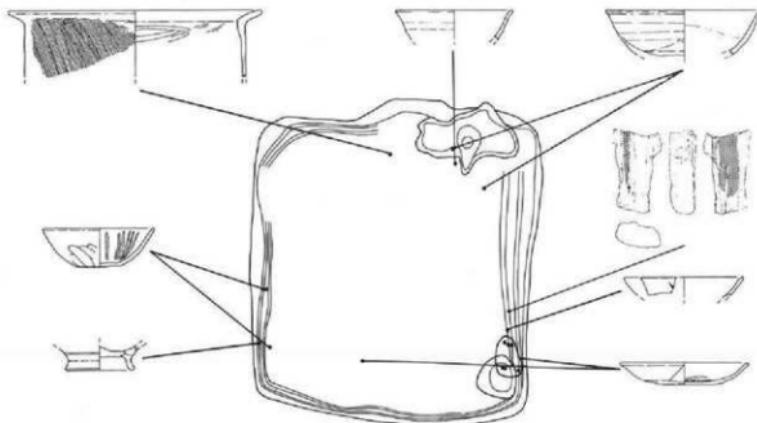
第62圖 1号住居 出土遺物 (1/2)

(遺構時期) 平安時代 9世紀後半 (甲斐型IX期～X期)
(調査所見) 床面積は約12.5m²で、小型の住居である。かまどに直立した縦長礫が2本検出されたが、かまどの骨組みとして原位置にあるかどうかは微妙である。調査区内では、他に同時期の住居は検出されておらず、周辺にも同時期の住居は確認されていない。



10

第63図 1号住居 出土遺物 (2/3)



第64図 1号住居 遺物分布図

第14表 1号住居遺物観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

団体番号	出土層位	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	技術・形態の特徴	色 調	地 土	備 考
第63回1	上層—床面	杯	11.2	4.3	4.0	口縁部、むずかに厚大 外面、斜面部 手持ちへラケズリ 底部凹弧状切り へラケズリ 内面、放射状突起	内・外面 2.5YR6/6	石英、長石、白色、 黑色、赤色粒子混在	
2	床面	皿	13.2	5.4	2.3	口縁部わずかに厚大 外面、凹版系 切口へラケズリ 内面、放射状突起	内・外側 7.5YR6/6	石英、長石、白色、 黑色粒子混在	斜面墨書き
3	床面	皿	(12.0)	—	2.0	内・外面 ロクロナデ	外側 5 YR6/6 内面 5 YR6/5	石英、長石、白色、 黑色、赤色粒子混在	斜片、斜面墨書き
4	上層	高台付杯	—	7.1	2.6	外側 竹点内	外側 7.5YR6/4 内面 7.5YR7/4	石英、長石、白色、 黑色粒子混在	
5	上層	甌	(26.2)	—	(6.9)	外側 磨擦ハケ目 内面 磨擦ハケ目 へラケズリ	外側 7.5YR3/1 内面 7.5YR5/3	今型印多子、青石少 量、黑色粒子混在	
6	—	甌	(17.4)	—	(3.5)	内・外側 ロクロナデ	外側 7.5YR6/3 内面 10YR8/3	白色、黑色粒子混在	
7	—	甌	(10.8)	—	(3.8)	外側 ロクロナデ 内面 口縁部微凹ハケ目へ横ナデ	外側 7.5YR7/6 内面 10YR7/4	石英、長石、白色、 黑色粒子混在	
8	上層	甌	(26.2)	—	(4.1)	内・外側 滅済付横溝	内・外側 10YR8/1	白色粒子混在	
9	中層	甌	(12.0)	—	(3.1)	内・外側 次地付横溝	内・外側 10YR8/2	白色粒子混在	
団体番号	出土層位	器種	蓋輪(cm)	地輪(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	技術・形態の特徴	石 貨	備 考
第63回10	通石	10.4	5.9	3.2	—	249	表面に墨状細紋 裏面に平凸溝	塊晶片岩	

第6章 その他の構造・遺物

(1) 遺構

土坑一基が検出された。

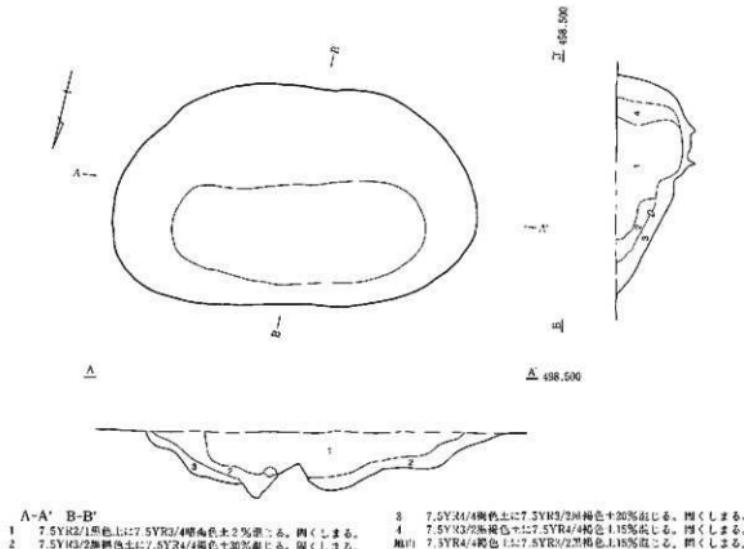
1号土坑 (第65図、写真図版21)

(形状・規模) 遺跡の中央部西寄り、6号方形周溝墓の東に位置する。平面プランは橢円形で、長軸2.8m、短軸1.7m、深さ0.8mである。

(出土遺物) なし

(遺構時期) 不明

(調査所見) 方形周溝墓内から検出された土坑と同様に、遺物が全く出土しないことから、方形周溝墓の埋葬施設と想定して周辺を精査してみたが、周溝は検出されなかった。方形周溝墓に付随する溝外追葬とも考えられるが、埋葬の痕跡は確認されなかったので、詳細は不明である。



第65図 1号土坑 (1/40)

(2) 繩文時代の遺物

繩文時代の遺物は、土器61点、石器47点が出土した。全て遺構外からの出土である。

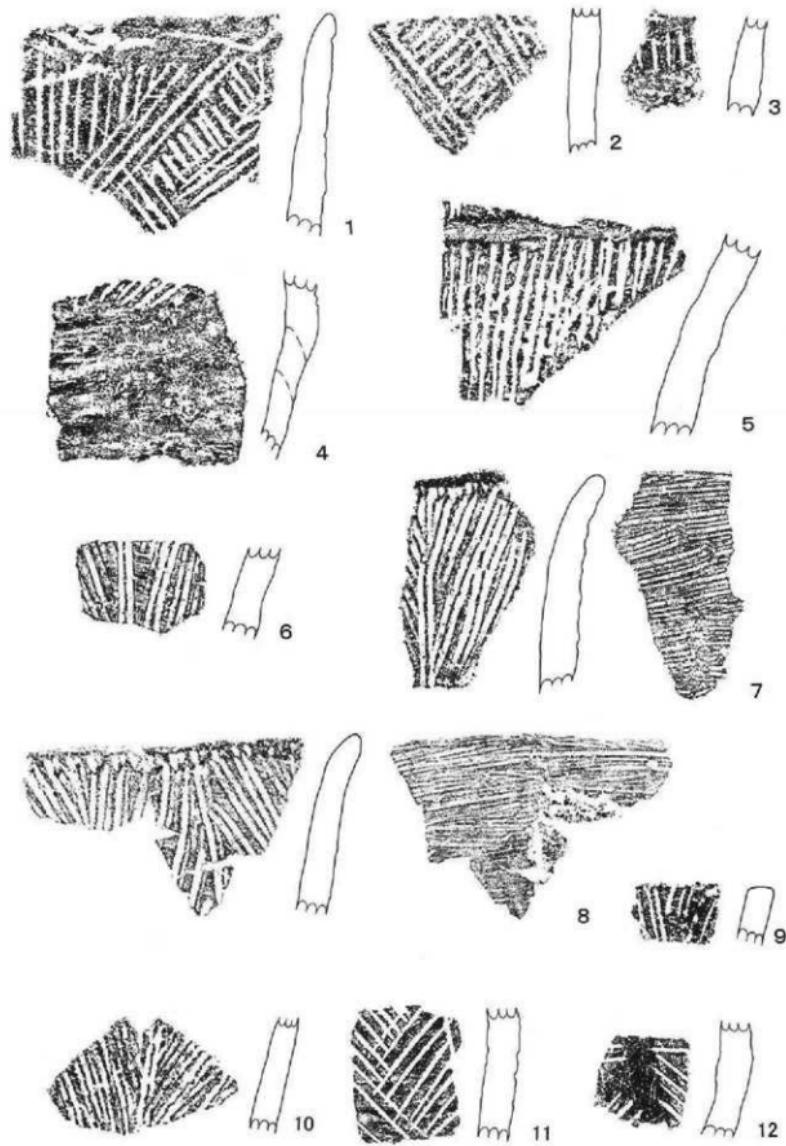
土器 (第66~68図、写真図版29)

早期後半の土器20点、早期末~前期初頭の土器17点、前期後半の土器8点、中期の土器5点、後期の土器1点、晚期終末の土器9点の計61点を図化した。いずれも破片である。1~5は早期後半野島式に併行する土器と思われ、胎土に纖維を含む。6~8は早期後半の土器である。外面に羽状沈線、内面に条痕文を施す。胎土に纖維を含む。9~12は早期後半の土器である。外面に羽状沈線を施す。胎土に纖維を含む。13~17は早期後半条痕文系土器である。胎土に纖維を含む。18は早期後半の土器である。外面に格子目状沈線、内面に条痕文を施す。胎土に纖維を含む。19~20は早期後半鶴ヶ島台式土器である。外面に条痕文を施す。21~26は早期後半から前期初頭の土器と思われる。21~23・25~26は胎土に纖維を含む。27~29は前期初頭の東海系土器である。胎土に纖維を含む。30~32は前期初頭の土器と思われる。胎土に纖維を含む。33は前期初頭神ノ木台式土器と思われる。胎土に纖維を含む。34~37は前期初頭の土器である。外面に捺文を施す。胎土に纖維を含む。38は前期の土器と思われるが、詳細は不明である。39~46は前期後半諸種式土器である。47~49は中期中葉落沢式土器である。50~51は中期後半曾利式土器である。52は後期前半堀之内式土器である。53~61は晚期終末水式土器である。

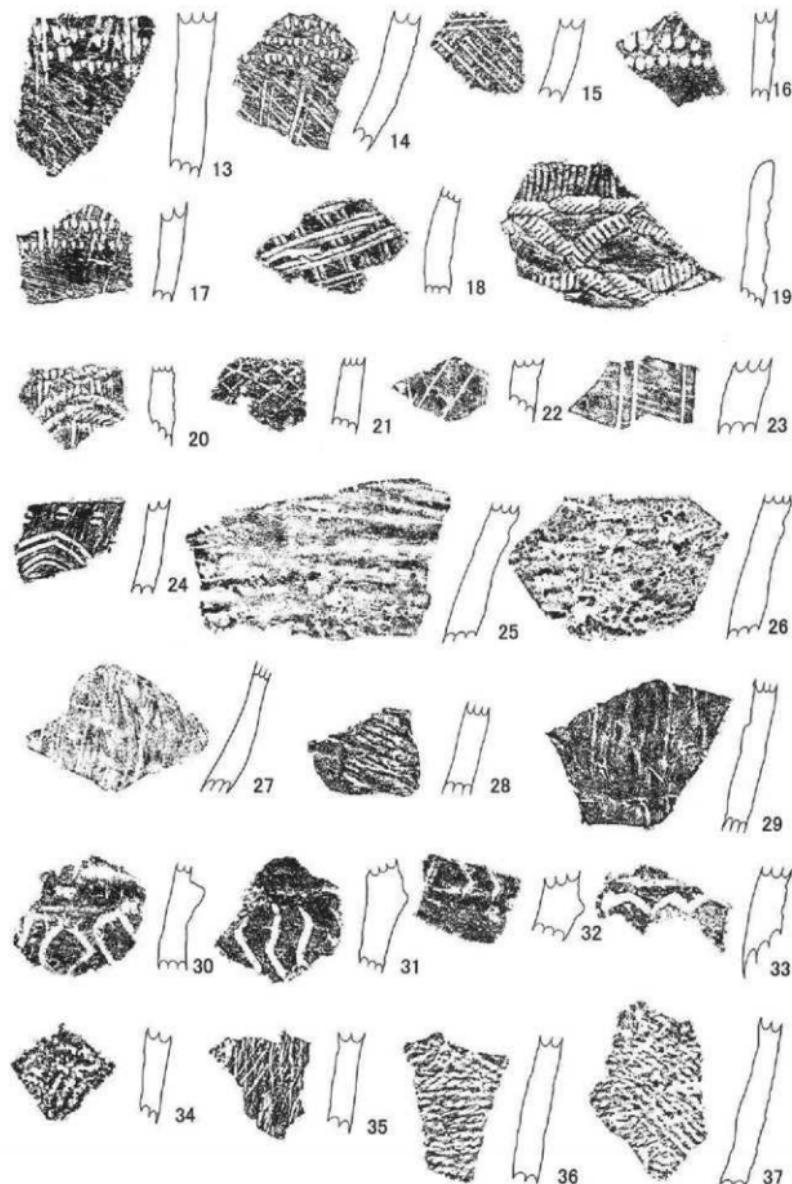
第15表 繩文土器觀察表

遺構番号	出土位置	色 調	附 記	觀 察 情 況
第66回1	遺構外	外面 10YR5/2 内面 10YRA4/2	灰石中量、金雲母白色粒子微量混入	早期後半 野島式平行 繊維混入
2	10号方形彌溝窓	外側 10YR6/6 外附 7.5YR4/3	金雲母少量、灰石多量混入	早期後半 野島式平行 繊維混入
3	10号方形彌溝窓	外側 10YR6/4 内側 5 YR5/3	灰石、赤褐色少量、白色粒子少量	早期後半 野島式平行 繊維混入
4	2号方形彌溝窓	内面 7.5YR5/3 外側 7.5YR4/3	金雲母少量、長石微量混入	早期後半 野島式平行 繊維混入
5	遺構外	外側 10YR5/4 内面 10YR5/2	長石中量、金雲母少量混入	早期後半 野島式平行 繊維混入
6	2号方形彌溝窓	外側 10YR4/2 内面 10YR6/3	白色粒、灰石、長石など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 内面条痕文 繊維混入
7	遺構外	外側 10YR5/4 内面 7.5YR6/3	白色粒、石英、長石など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 内面条痕文 繊維混入
8	2号方形彌溝窓	内面 10YR5/2 外側 7.5YR5/6	白色、赤褐色、石英、長石など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 内面条痕文 繊維混入
9	遺構外	外側 7.5YR6/4 内面 7.5YR6/4	白色粒、石英、長石など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 繊維混入
10	2号方形彌溝窓	内外側 7.5YR6/6	白色粒、石英、長石など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 繊維混入
11	遺構外	外側 7.5YR6/6 内面 7.5YR4/4	白色粒、金雲母、石英など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 繊維混入
12	遺構外	外側 7.5YR5/4 内面 10YR4/2	石英、長石、金雲母など微粒多量混入	早期後半 羽状沈線文 繊維混入
第67回13	2号方形彌溝窓	外側 5YR6/3 内面 10YR6/4	長石、白色、黑色粒子微量混入	早期後半 金雲母文系 繊維混入
14	10号方形彌溝窓	外側 5YR6/6 内面 7.5YR5/1	長石少量、白色、赤褐色粒子微量混入	早期後半 条痕文系 繊維混入
15	遺構外	外側 5YR6/4 内面 5 YR4/1	白色粒少量、長石微量混入	早期後半 条痕文系 繊維混入
16	遺構外	外側 5 YR4/4 内面 5 YR4/3	金雲母、長石少量混入	早期後半 条痕文系 繊維混入
17	遺構外	外側 5 YR4/4 内面 5 YR4/3	長石、白色粒子少量、赤褐色粒子微量混入	早期後半 条痕文系 繊維混入
18	10号方形彌溝窓	外側 5 YR5/4 内面 5 YR5/8	白色粒、赤褐色、石英、長石など微粒 多量混入	早期後半 簇子目状沈線文 内面条痕文 繊維混入
19	4号方形彌溝窓	外側 5 YR5/4 内面 7.5YR6/9	石英、金雲母、白色粒子微量	早期後半 条痕文 鶴ヶ島台式
20	4号方形彌溝窓	外側 5 YR6/6 内面 5 YR6/6	石英、黑色粒子微量	早期後半 条痕文 鶴ヶ島台式

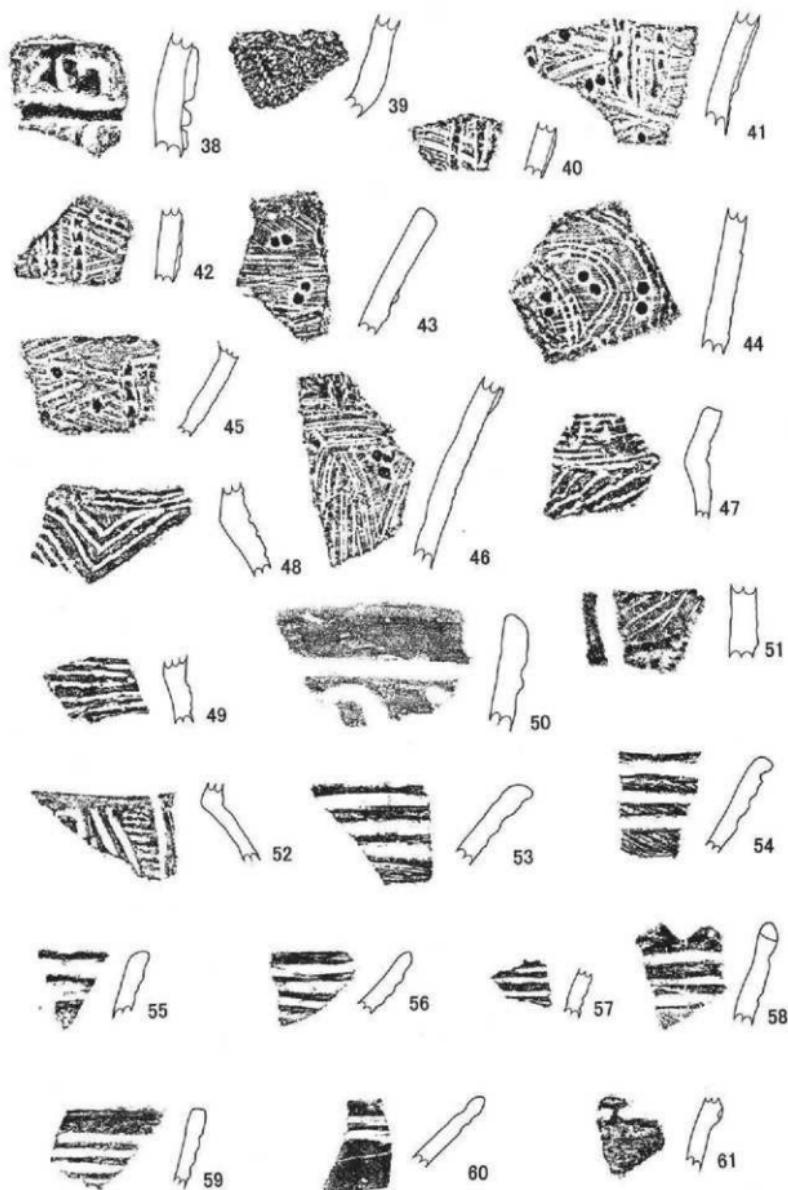
出土地番号	出土位置	色調	胎土	器形所見
6号(142)	6号方形周溝基	外面7.5YR6/6 内面7.5YR6/5	白色粘、灰黄、金黄色など微粒多量混入 白色粘、石英、金黄色など微粒多量混入特に金黄色多量 含む	早期後半～西周初頭 織維混入
22	遺構外	外面10YR5/3 内面10YR5/4		早期後半～西周初頭
23	遺構外	外面10YR6/4 内面7.5YR5/3	全表面中量、長石、白色粒子微量	早期後半～西周初頭 織維混入
24	10号方形周溝基	外面7.5YR5/4 内面10YR6/2	長石、白色粒子少量混入	早期後半～西周初頭
25	遺構外	外面7.5YR4/9 内面2.5YR5/6	金黃色、長石、中量織維混入	早期後半～西周初頭 織維混入
26	遺構外	外面7.5YR4/3 内面7.5YR5/6	金黃色、長石、中量黑色粒子微量	早期後半～西周初頭 織維混入
27	6号方形周溝基	外面10YR7/4 内面10YR5/2	赤色、白色粘など微粒多量入石英、長石微粒、金黃色 含む	西周初頭 東海系 織維混入
28	6号方形周溝基	外面10YR7/4 内面7.5YR5/1	白色、赤色粘など微粒多量入石英、長石含む	西周初頭 東海系 織維混入
29	6号方形周溝基	外面10YR7/4 内面10YR6/1	石英、灰石、白色粘など微粒多量混入金黃色含む	西周初頭 東海系 織維混入
30	10号方形周溝基	外面7.5YR5/6 内面7.5YR5/4	石英、灰石、白色粘、金黃色、角石など微粒多量混入	西周初頭 織維混入
31	遺構外	内面7.5YR5/6	石英、灰石、金黃色など微粒多量混入 石英、灰石、白色粘、金黃色など微粒多量混入	西周初頭 織維混入 西周初頭 織維混入
32	遺構外	外面7.5YR5/3 内面7.5YR3/1	石英、灰石、白色粘など微粒多量混入	西周初頭 織維混入
33	遺構外	外面7.5YR5/1 内面7.5YR5/6	少凹凸中量、長石少量、赤色粒子微量混入	西周初頭 神之木古式 織維混入
34	2号方形周溝基	外面2.5YR6/6 内面5YR6/5	白色粒子、石英など微粒混入	西周初頭 織維混入
35	4号方形周溝基	外面10YR7/3 内面10YR7/2	石英、白色粒子など微粒混入	西周初頭 織維混入
36	4号方形周溝基	外面10YR6/4 内面10YR6/3	白色、赤色粒子、石英微量	西周初頭 織維混入
37	10号方形周溝基	外面7.5YR6/3 内面7.5YR5/2	石英、灰石、白色、赤色粘微量混入	西周初頭 織維混入
群60526	遺構外	外面10YR6/4 内面7.5YR5/3	長石、石英、白色赤色粒子微量混入	西周？
39	2号方形周溝基	外面7.5YR3/3 内面5YR5/4	白色粒子少量、長石、石英微量	織穀C式
40	4号方形周溝基	外面7.5YR5/1 内面5YR5/4	長石少量、石英、白色粒子微量混入	織穀C式
41	6号方形周溝基	外面7.5YR4/2 内面5YR5/4	長石少量、白色、白色粒子、金黃色微量混入	織穀C式
42	6号方形周溝基	外面7.5YR5/4 内面7.5YR5/3	金黃色、灰石少量、白色、黑色粒子微量混入	織穀C式
43	6号方形周溝基	外面7.5YR4/2 内面7.5YR5/3	石英、白色粒子、長石、微量混入	織穀C式
44	6号方形周溝基	外面7.5YR3/1 内面2.5YR4/4	石英、白色粒子少量、長石、黑色粒子微量混入	織穀C式
45	6号方形周溝基	外面10YR3/2 内面5YR4/6	長石少量、金黃色、白色粒子微量混入	織穀C式
46	6号方形周溝基	外面7.5YR6/4 内面5YR5/4	長石少量、金黃色微量混入	織穀C式
47	6号方形周溝基	外面7.5YR5/6 内面7.5YR7/4	白色、黑色粒子少量、長石微量混入	織穀式
48	6号方形周溝基	外面7.5YR5/6 内面7.5YR6/1	白色、黑色粒子少量、長石微量混入	織穀式
49	6号方形周溝基	外面5YR3/4 内面7.5YR6/4	白色粒子少量、灰石微量混入	織穀式
50	遺構外	外面7.5YR6/6 内面7.5YR6/6	長石、白色粒子微量	曾利式
51	遺構外	外面5YR1/6 内面5YR6/1	白色、黑色粒子、灰石微量混入	曾利式
52	7号方形周溝基	外面10YR3/1 内面10YR4/2	金黃色、白色粒子微量混入	織之内式
53	6号方形周溝基	外面10YR3/2 内面10YR3/3	長石、石英、白色粒子微量	永II式？
64	6号方形周溝基	外面10YR4/1 内面10YR4/2	白色粒子少量、灰石微量混入	永II式？
55	6号方形周溝基	外面10YR6/2 内面10YR5/4	石英、長石微量混入	永式？
66	6号方形周溝基	外面10YR5/3 内面10YR5/2	石英、白色、黑色粒子微量混入	永式
57	6号方形周溝基	外面10YR5/3 内面10YR5/2	金黃色、白色、白色粒子微量混入	永式
58	10号方形周溝基	外面7.5YR6/4 内面10YR6/7	白色粒子少量、石英、黑色粒子微量混入	永式
59	10号方形周溝基	外面10YR6/5 内面10YR7/2	白色、黑色粒子、金黃色微量	永式
60	遺構外	外面10YR4/1 内面10YR6/4	白色粒子少量、石英、金黃色微量	永式
61	遺構外	外面10YR4/1 内面10YR6/4	白色粒子少量、石英、金黃色微量	永式



第66圖 遺構外出土遺物（網文土器 1/2）



第67図 遺構外出土遺物（縄文土器 1/2）



第66図 遺構外出土遺物（縄文土器 1/2）

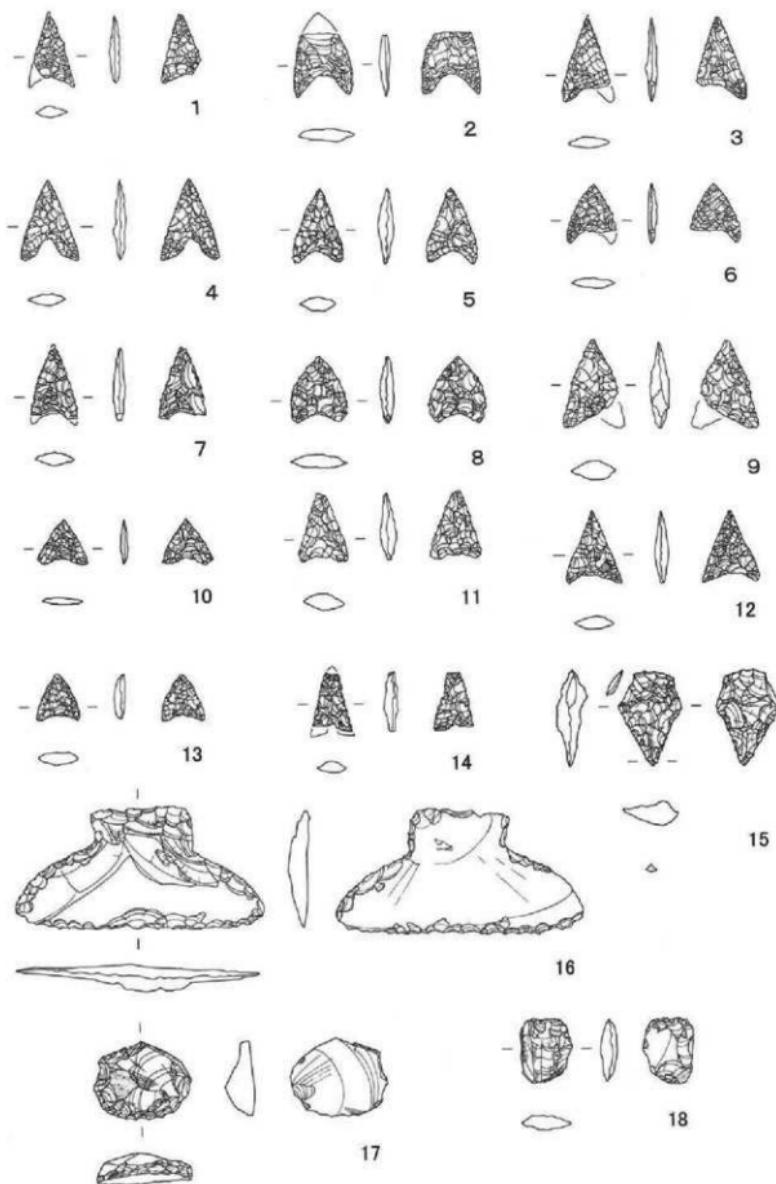
石器 (第69~75図、写真図版24・25)

1~14は石鎌である。石材は11がチャートで、それ以外はすべて黒曜石である。15は石鎌で、石材はチャートである。16は石匙で、板状剥離がみられる。石材は頁岩である。17はラウンド・スクレイバーである。18は楔形石器である。1対の両側剥離をもつ。黒曜石である。19は横刃形石器である。石材は頁岩で、節理が著しい。20は石核である。左側縁に正面側から調整が施されている。剥離作業面と調整剥離の前後関係は不明である。21~24は石鍛木製品と思われる。石材はすべて黒曜石である。25は石匙未製品と思われる。石材は黒曜石である。26は二次加工のある剥片である。下縁に腹面側から調整が施されている。石材はチャートである。27は二次加工のある剥片である。左側縁全体に背面・腹面両方向から剥離が行われている。石材は安山岩である。28は二次加工のある剥片である。左側縁は背面・腹面両方向から調整が施されている。右側縁には腹面側から調整が施されている。石材は黒曜石である。29は二次加工のある剥片で、左側縁と下縁に腹面側から小さな剥離が行われている。石材は黒曜石である。30は二次加工のある剥片である。右側縁に両面剥離が行われている。石材は黒曜石である。31は使用痕のある剥片である。右側縁に微細剥離をもつ。石材は黒曜石である。32は使用痕のある剥片である。左側縁に使用によって生じた光沢がみられる。石材はチャートである。33は使用痕のある剥片である。右側縁に微細剥離をもつ。石材は黒曜石である。34は使用痕のある剥片である。右側縁に微細剥離をもつ。石材は黒曜石である。35は使用痕のある剥片である。右側縁上半に微細剥離をもつ。内部に被熱によって生じたひびがみられる。石材は黒曜石である。36は使用痕のある剥片である。下縁と右側縁に微細剥離をもつ。石材は黒曜石である。37は石核である。下縁に微細剥離をもつ。石核を軸用し下縁を刃部として用いている。石材は黒曜石である。38は使用痕のある剥片である。右側縁に微細剥離をもつ。石材は黒曜石である。39は磨製石斧である。上部には装着痕と思われる光沢が、下部には使用によって生じたと思われる光沢がみられる。刃部には微細剥離がみられる。石材は蛇紋岩である。40は砾器である。上下に刃部を持ち、上刃は両面剥離で、下刃は片面剥離によって作り出されている。頁岩である。41は磨石である。表面と側面に磨底がある。石材は砂岩である。42は磨石である。表面に磨痕がある。石材は安山岩である。43は磨石である。表裏両面に磨面をもつ。石材は安山岩である。44は凹石である。表裏両面に磨面をもつ。磨面中央には直径6mm前後の凹みがまとまってある。石材は安山岩である。45は凹石である。表面から右側面・裏面にかけて磨面をもつ。磨面中央には直径6mm前後の凹みがいくつもまとまってある。石材は安山岩である。46は敲石である。側面下側に敲打痕があり、敲打によって剥離面が生じている。表面と左側面は磨られている。右側面と裏面は打ち欠かれている。石材は安山岩である。47は石皿である。表面は磨られ凹んでいる。石材は安山岩である。

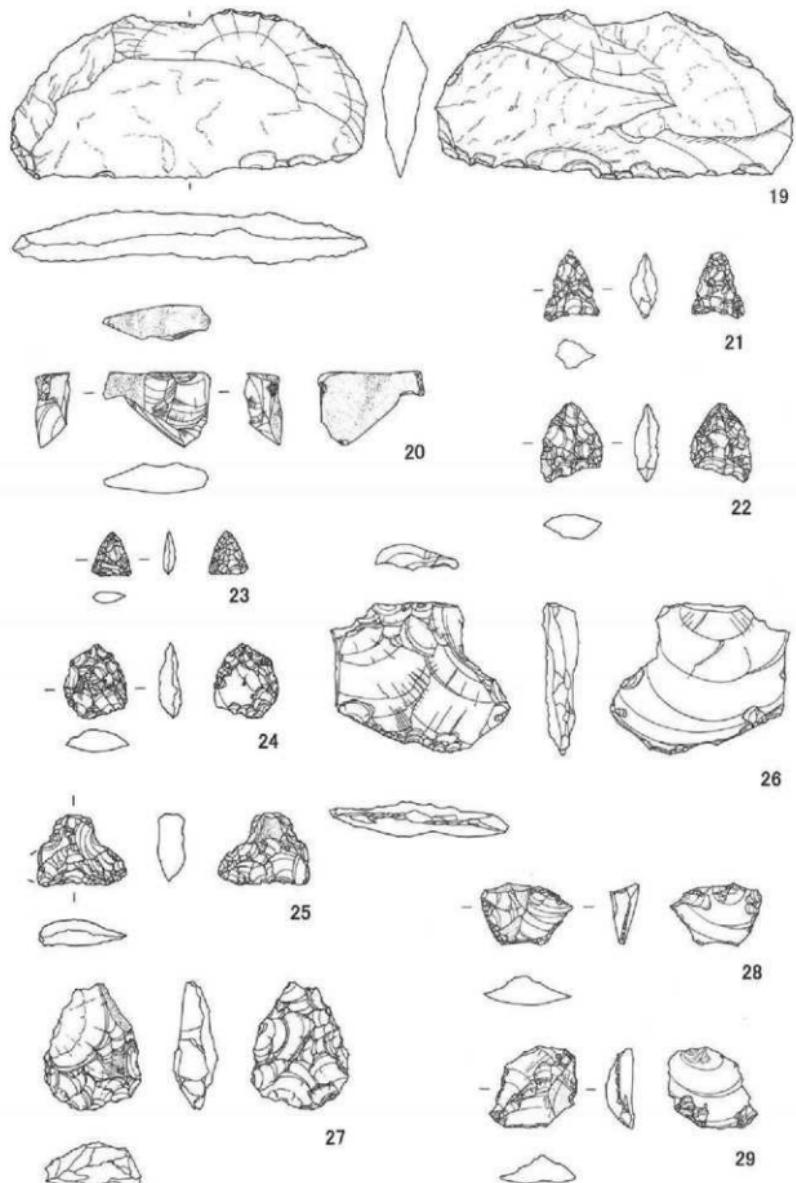
第16表 繩文石器観察表

() は推定値、〔 〕は遺存値を示す

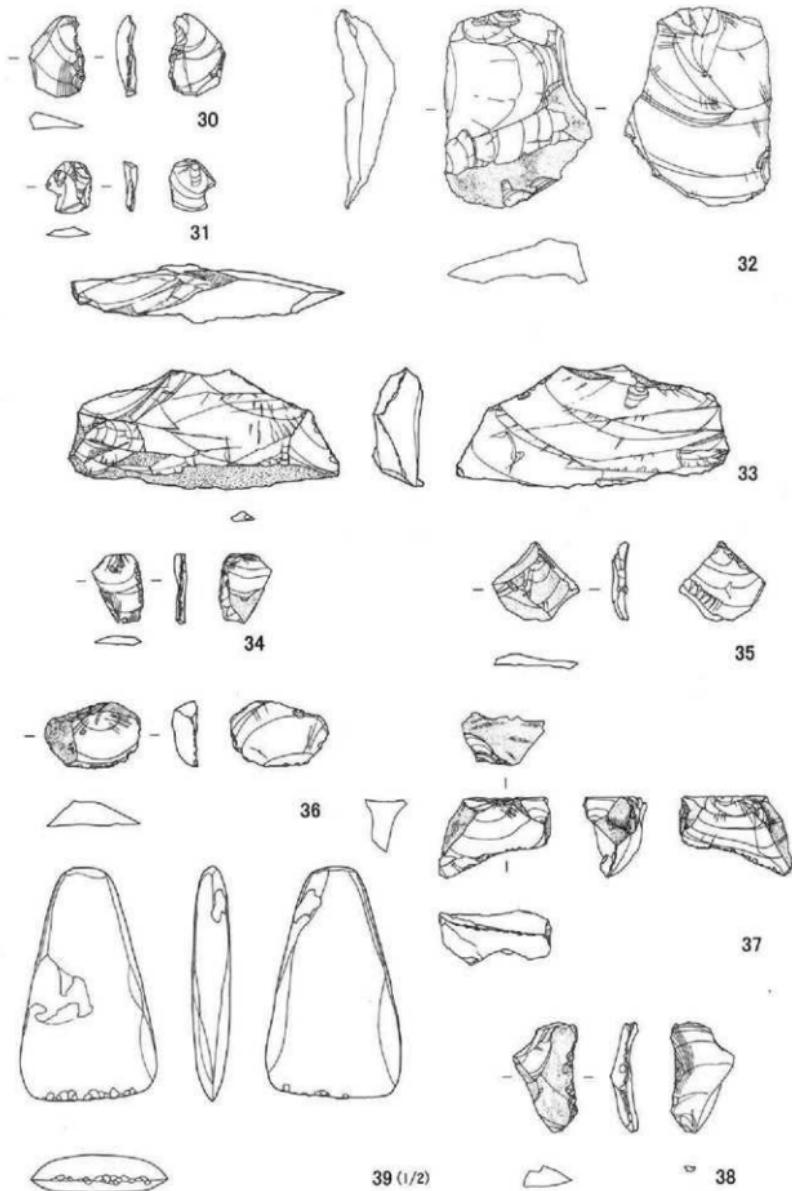
図版番号	出土遺構	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第69図1	5号方形周溝基	石鎌	黒曜石	21	10	4	1	先端・左側部欠損
2	6号方形周溝基	石鎌	黒曜石	(19.5)	17	3.5	1	先端部欠損
3	6号方形周溝基	石鎌	黒曜石	26	13	3	1	右側部欠損
4	7号方形周溝基	石鎌	黒曜石	25	12	3.5	1	
5	7号方形周溝基	石鎌	黒曜石	23.5	16	4.5	1	
6	10号方形周溝基	石鎌	黒曜石	18.5	13	2.5	1	
7	10号方形周溝基	石鎌	黒曜石	(22.0)	12	4	1	右側部欠損
8	11号方形周溝基	石鎌	黒曜石	20.5	18	4	1	先端部・両側部欠損
9	遺核外	石鎌	黒曜石	27	(12.5)	6	2	
10	遺核外	石鎌	黒曜石	14	(15.5)	2	1	右側部・欠損
11	遺核外	石鎌	チャート	21	15	5	1	左側部・欠損
12	遺核外	石鎌	黒曜石	25	17.5	4	1	先端・右側部・下部欠損
13	遺核外	石鎌	黒曜石	14	12	4	1	右側部・欠損
14	2号方形周溝基	石鎌	黒曜石	(17)	12	4	1	先端・右側部・欠損
15	遺核外	石鎌	チャート	29.5	19	9.5	3	石核未製品の転用か?
16	4号方形周溝基	石匙	頁岩	38	78.5	8	14	
17	11号方形周溝基	ラウンド・スクレイバー	黒曜石	23	29	9	6	



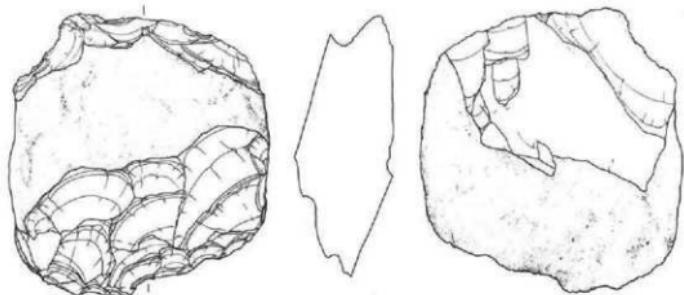
第69圖 遺構外出土遺物（縄文石器 2/3）



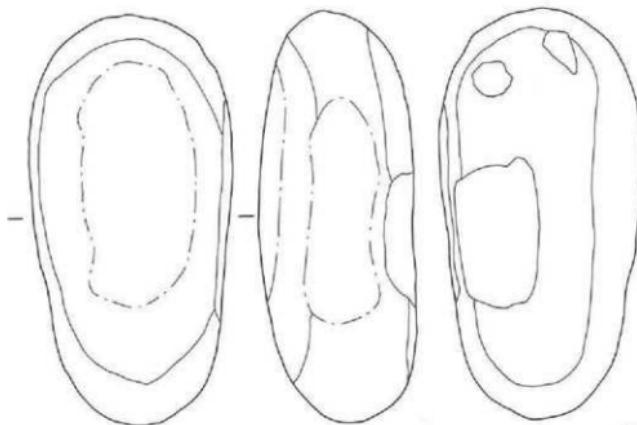
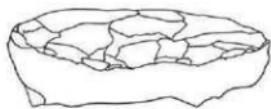
第70図 遺構外出土遺物（縄文石器 2/3）



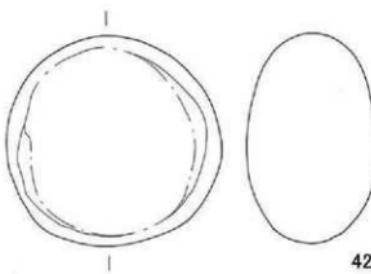
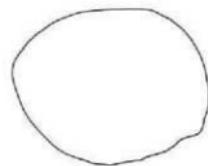
第71図 遺構外出土遺物（縄文石器 2/3）



40

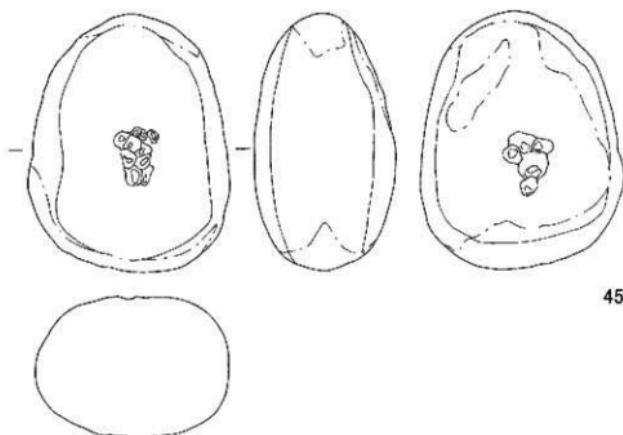
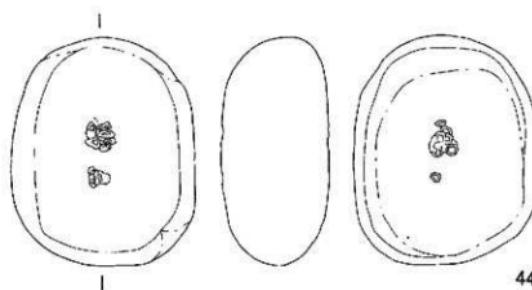
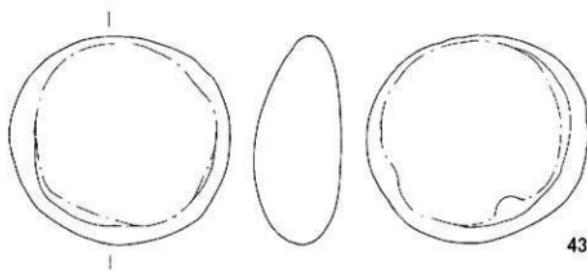


41

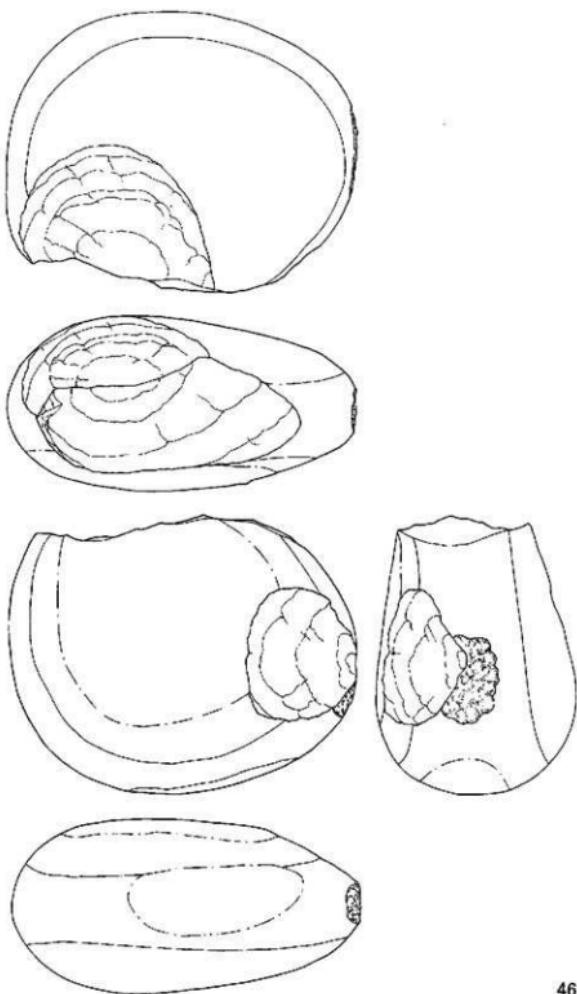


42

第72圖 遺構外出土遺物（綱文石器 1/2）

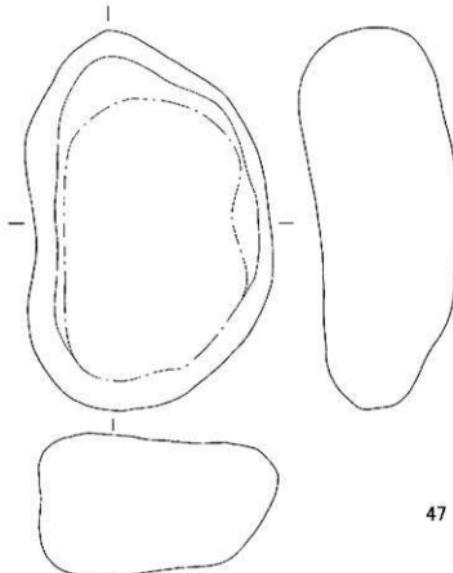


第73図 邊構外出土遺物（縄文石器 1/2）



46

第74圖 遺構外出土遺物（編文石器 .1/2）

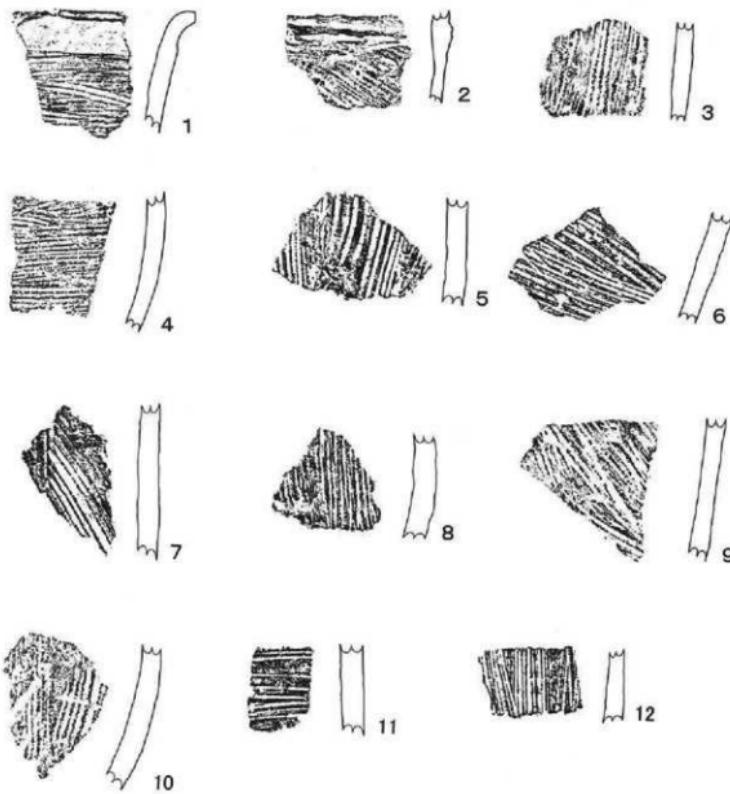


第75図 遷拂外出土遺物（銘文石器 1/2）

回収番号	出土遺物	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	備考
第69回18	遷拂外	磨形石器	黒曜石	23	16	6	1	一刃の両面削成
第70回19	11号方形器皿	穂刀型石器	真岩	109	51	15	84	
20	遷拂外	石核	黒曜石	23	36	11	7	左側縁に二次加工
21	炎拂外	石核未製品	黒曜石	20	17	9	2	
22	遷拂外	石核未製品	黒曜石	24	18	7.5	2	
23	遷拂外	石核未製品	黒曜石	13	12	3.5	1	
24	遷拂外	石核未製品	黒曜石	23	15	7	2	
25	炎拂外	石核未製品	黒曜石	21	27	10	4	
26	11号方形器皿	二次加工のある剥片	イート	47	55	11	23	下縁と右側縁に二次加工
27	11号方形器皿	二次加工のある剥片	安山岩	39	29	14	12	何かの本製品?
28	遷拂外	二次加工のある剥片	黒曜石	19	28	9	3	既削成に二次加工?
29	炎拂外	二次加工のある剥片	黒曜石	25	26	9	2	下縁と両側縁に二次加工
第71回60	遷拂外	二次加工のある剥片	黒曜石	25	12	5	4	右側縁に両面削成
31	遷拂外	使用痕のある剥片	黒曜石	16	14	4	1	右側縁に微細削成
32	遷拂外	使用痕のある剥片	チャート	61	42	14	46	左側縁に光沢質
33	遷拂外	使用痕のある剥片	チャート	37	73	15	39	右側縁に微細削成
34	炎拂外	使用痕のある剥片	黒曜石	22	16	3	1	右側縁に微細削成
35	遷拂外	使用痕のある剥片	黒曜石	25	25	4	2	右側縁上半に微細削成
36	遷拂外	使用痕のある剥片	黒曜石	20	23.5	7.5	4	右側縁と下縁に微細削成
37	遷拂外	石核	黒曜石	24	34	19	9	下縁に微細削成
38	炎拂外	使用痕のある34片	黒曜石	34	19	7	3	右側縁に微細削成
39	遷拂外	磨製石斧	角致石	72.5	42	12	58	刃部に微細削成
第72回40	遷拂外	磨器	安山岩	117	107	47	569	上縁は両面削成、下縁は片面削成
41	遷拂外	磨石	砂岩	109	83	64	1409	表面・側面に擦痕
42	炎拂外	磨石	安山岩	87	86	53	665	表面に擦痕
第73回43	11号方形器皿	石器	安山岩	86	99	35	443	
44	11号方形器皿	石器	安山岩	94	44	75	501	表裏面、一背面に磨痕。両面に門み
45	11号方形器皿	磨石	安山岩	106	83	58	630	表面に粗粒の凹み
第74回45	11号方形器皿	磨石	安山岩	142	115	72	1736	一表面に研き痕。表面・側面に擦り痕
第75回47	11号方形器皿	石器	安山岩	156	101	66	1409	表面が擦りによってくぼむ

(3) 弥生時代の遺物 (第76図、写真図版25)

前期の土器12点が出土した。すべて遺構外からの出土である。1~12は外面に条痕文を施す。



第76図 遺構外出土遺物（弥生土器）

第17表 弥生土器観察表

試験番号	出土位置	色 調	地 土	鉱物所見
第76図 1	4号方形圓溝墓 遺構外	外面 10YR4/5 内面 10YR3/6	石英・長石・金雲母・黑雲母少量	口縫部片、器面上に条痕文
2	遺構外	外面 7.5VR3/5 内面 N0/1.5	石英微量、長石少量、金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
3	4号方形圓溝墓	外面 7.5VR2/6 内面 10YR6/4	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
4	6号方形圓溝墓	外面 7.5VR7/6 内面 7.5VR6/4	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
5	6号方形圓溝墓	外面 10YR6/4 内面 7.5VR7/4	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
6	6号方形圓溝墓	外面 10YR7/4 内面 7.5VR6/4	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
7	6号方形圓溝墓	外面 7.5VR6/3 内面 7.5VR6/3	石英少量・長石・黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
8	6号方形圓溝墓	外面 10YR6/4 内面 10YR6/2	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
9	6号方形圓溝墓	外面 10YR6/4 内面 10YR7/4	石英少量、長石・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
10	6号方形圓溝墓	外面 7.5VR2/4 内面 7.5VR7/4	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
11	遺構外	外面 10YR6/2 内面 7.5VR4/2	石英・長石少量、黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文
12	遺構外	外面 10YR6/2 内面 10YR6/3	石英中量・長石・黑雲母・金雲母微量	側部片、器面上に条痕文

第7章 自然科学分析

大日川原遺跡における周溝内埋設土器の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

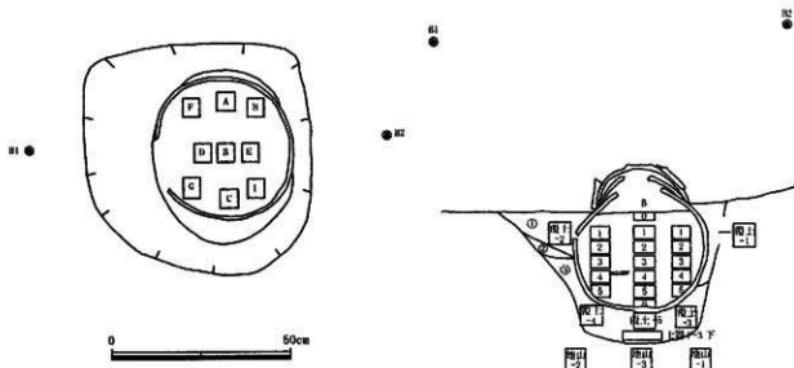
本遺跡（山梨県北巨摩郡明野村御領平に所在）は、富士川支流の塩川左岸の河岸段丘上に位置し、古墳時代前期の方形周溝墓12基と竪穴住居1軒、平安時代の竪穴住居1軒が検出されている。このうち、4号方形周溝墓では周溝から直径70cmの土坑が検出され、その土坑から3重に蓋をした壺が検出された。この周溝内埋設土器（壺棺）は、これまでの近県における類似例から追葬された再葬墓と考えられている。

今回は、周溝内埋設土器の内部に遺体が埋納されていたか検証するために、土壤理化学分析を実施する。

1. 試 料

試料は、現水田耕作土直下の床土から1点、周溝内埋設土器が検出された土坑下位の地山から3点、土坑覆土から5点、土坑覆土最下部から1点、周溝内埋設土器から3次元的に45点、合計55点が採取された。これら全点について、分析を実施する。

分析試料は、現水田耕作土直下床土がシルト・粘土分の多い重埴土からなるが、その他の試料は砂分の多い砂壤土～壤質砂土からなる。なお、試料の詳細は結果とともに表示し、土坑および周溝内埋設土器の試料採取位置は第77図に示す。



第77図 周溝内埋設土器における試料採取位置

2. 分析方法

今回の土器内容物としてヒトの遺体が想定されるので、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量を測定した。リン酸は骨に多量に含まれ、土壤中に固定されやすい特徴がある。よって、遺体が埋葬されると土壤中にはリンの局的な濃集が顕著に認められ、その濃集状態から遺体あるいは遺骨の痕跡を定性的に推定することができる。また、土壤中におけるリン酸の供給源としては、植物体も挙げられる。土壤中に植物体由来のリン酸成分が供給された場合、植物体中に炭素が多量に含まれることから、リン酸含量とともに炭素含量が増加する。そこで、植物体の影響を調べるために、炭素（腐植含量）も測定した。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解ーバナドモリブデン酸比色法、腐植はチューイン法でそれぞれ行った（土壤養分測定法委員会、1981）。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を、加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。また、風乾細土試料の一部を粉碎し、0.5mmのふるいを全通させる（微粉碎試料）。

リン分析は、風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸約5mLを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸約10mLを加えて再び加热分解を行う。分解終了後、水で100mLに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾上あたりのリン酸含量（ $P_2O_5\text{mg/g}$ ）を求める。

腐植含量の測定は、微粉碎試料0.100～0.500gを100mL三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mLを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第1鉄アノニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾上あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（%）を算出する。

3. 結 果

結果を第18表に示す。全試料を通じてみると、腐植含量が0.10～1.98%（平均0.57%）、リン酸含量が0.37～2.74 $P_2O_5\text{mg/g}$ （平均0.90 $P_2O_5\text{mg/g}$ ）である。腐植含量、リン酸含量とともに耕作土である試料番号1で最も高い。地山、土坑覆土、周溝内埋設土器のそれぞれを比較すると、次の通りである。土坑覆土では、下部で両成分ともに地山と同じ程度の測定値を示し、上部に向かい僅かに増加する。土坑覆土と地山を含めると、腐植含量が0.10～0.71%（平均0.25%）、リン酸含量が0.37～0.90 $P_2O_5\text{mg/g}$ （平均0.53 $P_2O_5\text{mg/g}$ ）である。一方、周溝内埋設土器は、腐植含量が0.32～0.83%（平均0.61%）、リン酸含量が0.65～1.23 $P_2O_5\text{mg/g}$ （平均0.94 $P_2O_5\text{mg/g}$ ）であり、地山および土坑覆土よりも高い値を示す。

4. 考 察

土坑覆土および埋設土器内土壤は理化的成分を吸着・保持しにくい砂分が多く、潜在的な成分保持能力が低いといえる。また、土坑覆土では、上位に向かい腐植含量・リン酸含量とも増加する。これは、上位の現水田耕作土における成分含量を考えると、覆土上位まで後代の人の為的な影響を及んでいることを示している。

ところで、土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例がある

第18表 土壤理化分析結果

番号	遺構名	採取場所	土性	土色	腐植含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)
1	HB-4 3号土器	耕作土	HC	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	1.98	2.74
2	HB-4 3号土器	地山-1	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.14	0.42
3	IIB-4 3号土器	地山-2	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.11	0.37
4	HB-4 3号土器	地山-3	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.10	0.40
5	HB-4 3号土器	覆土-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.71	0.90
6	HB-4 3号土器	覆土-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.35	0.64
7	HB-4 3号土器	覆土-3	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.29	0.57
8	HB-4 3号土器	覆土-4	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.22	0.56
9	HB-4 3号土器	覆土-5	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.22	0.49
10	IIB-4 3号土器	土器P-3下	LS	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.13	0.44
11	HB-4 3号土器	A-1	SL	2.5Y3/2 黒褐色	0.83	0.99
12	HB-4 3号土器	A-2	SL	2.5Y3/2 黒褐色	0.73	0.97
13	HB-4 3号土器	A-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.60	1.13
14	IIB-4 3号土器	A-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.61	0.91
15	HB-4 3号土器	A-5	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.57	0.96
16	HB-4 3号土器	B-0	SL	2.5Y3/2 黑褐色	0.74	1.05
17	HB-4 3号土器	B-1	SL	2.5Y3/2 黑褐色	0.74	1.01
18	IIB-4 3号土器	B-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.76	0.89
19	HB-4 3号土器	B-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.70	0.95
20	HB-4 3号土器	B-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.56	0.85
21	HB-4 3号土器	B-5	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.50	0.78
22	HB-4 3号土器	B-6	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.44	0.87
23	HB-4 3号土器	B-7	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.59	0.99
24	HB-4 3号土器	B-8	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.32	0.65
25	HB-4 3号土器	C-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.71	1.00
26	IIB-4 3号土器	C-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.58	0.85
27	HB-4 3号土器	C-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.57	0.90
28	HB-4 3号土器	C-4	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.44	0.79
29	HB-4 3号土器	C-5	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.46	0.91
30	HB-4 3号土器	D-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.69	1.00
31	HB-4 3号土器	D-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.56	0.84
32	IIB-4 3号土器	D-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.61	0.93
33	HB-4 3号土器	D-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.66	0.96
34	HB-4 3号土器	D-5	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.41	0.90
35	HB-4 3号土器	E-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.73	1.03
36	HB-4 3号土器	E-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.67	1.06
37	IIB-4 3号土器	E-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.63	1.07
38	HB-4 3号土器	E-4	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.34	0.73
39	HB-4 3号土器	E-5	SL	2.5Y4/3 オリーブ褐色	0.40	0.84
40	HB-4 3号土器	F-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.70	0.75
41	IIB-4 3号土器	F-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.69	0.95
42	HB-4 3号土器	F-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.56	0.90
43	HB-4 3号土器	F-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.63	1.05
44	HB-4 3号土器	G-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.44	0.81
45	IIB-4 3号土器	G-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.66	0.88
46	HB-4 3号土器	G-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.69	1.06
47	HB-4 3号土器	G-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.61	0.72
48	HB-4 3号土器	H-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.82	1.10
49	IIB-4 3号土器	H-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.69	1.23
50	HB-4 3号土器	H-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.67	1.09
51	HB-4 3号土器	H-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.69	1.09
52	IIB-4 3号土器	I-1	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.66	1.03
53	HB-4 3号土器	I-2	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.65	1.00
54	HB-4 3号土器	I-3	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.57	0.89
55	HB-4 3号土器	I-4	SL	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	0.46	0.85
				最小値	0.10	0.37
				最大値	1.98	2.74
				平均値	0.57	0.90

注1) 土色: マンセル色序系に準じた新版標準土色図(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

注2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。

SL…砂質土 (粘土0~15%、シルト0~35%、砂65~85%)

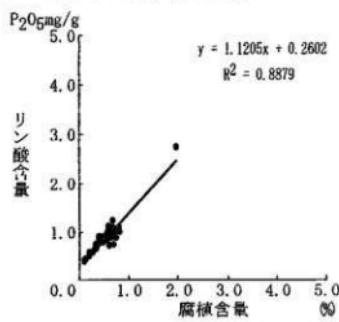
LS…壤質砂土 (粘土0~15%、シルト0~15%、砂65~95%)

HC…重粘土 (粘土45~100%、シルト0~55%、砂0~85%)

(Bowen, 1983; Bolt & Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991)。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.0P₂O₅mg/g程度と考えられる。また、化学肥料の施肥など人为的な影響を受けた黒ボクタの既耕地では、5.5P₂O₅mg/g (川崎ほか, 1991)という報告例もある。さらに当社がこれまでの分析調査事例で、骨片などの痕跡が認められる土壤では、6.0P₂O₅mg/gを越える場合も多い。なお、各調査例の記載単位が事なるため、ここではすべてP₂O₅mg/gで統一した。これらの値を著しく越える場合、外的要因(おそらく人为的影響によるもの)によるリン酸成分の富化が指摘できる。土坑覆土および周溝内埋設土器内のリン酸含量は、1.23 P₂O₅mg/gであり、天然賦存量の範囲内にある。しかし、基本的に理化学成分を吸着・保持しにくい砂分が多い試料であるにも関わらず、埋設土器における成分含量は、地山および土坑覆土よりも高い値である。

ところで、自然状態では、土壤中の各種成分は安定化するために均質になろうとする。ところが、遺体埋納が行われた場合、その部分のみが周辺とは違う特異な組成になるとを考えられる。しかし、周溝内埋設土器におけるリン酸成分は、ばらつきが少ない。また、リン酸含量と腐植含量の相関を見る(第78図)、回帰直線上に集中し、しかも強い正の相関関係があることがわかる。このことから、リン酸成分は、そのほとんどが土壤中の腐植由来すると考えられる。

以上のことから、今回測定したリン酸および腐植含量から推定すると、周溝内埋設土器の内部に遺体が埋納されていた可能性は低いと判断される。動物質の遺体を納める以外の用途に使用されたことも想定されるとすれば、今後脂質分析や微生物の洗い出し分析などをていきたい。



第78図 リン酸含量と腐植含量の相関

引用文献

- 天野洋司・太田 健・草場 敏・中井 信 (1991) 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H.J.M. (1983) 「環境無機化学—元素の循環と生化学」。浅野輝男・茅野充男訳, 297p., 博友社
- [Bowen, H.J.M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M. (1980) 「土壤の化学」。岩田進午・三輪齊太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G.H. and Bruggenwert, M.G.M. (1976) SOIL CHEMISTRY], p.235-236.
- 土壤養分調定法委員会編 (1981) 「土壤養分分析法」, 440p., 著者堂。
- 川崎 弘・吉田 錠・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省 農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.23-27.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖。
- ペドロジスト懇談会編 (1984) 「土壤調査ハンドブック」, 156p., 博友社。

第8章 考察

大日川原遺跡は調査の結果12基の周溝墓が確認され、古墳時代前期の墓域であることが明らかになった。茅ヶ岳山麓での古墳時代前期墓域の検出例としては初めてであり、それだけでも特筆されるが、周溝墓の中には特異な形状の三口台付窓が出土したり、方台部法面に石を貼ったものがあり、これらは山梨県内でも初めての事例である。

この章では大日川原・神取遺跡のセット関係や三口台付窓、貼り石を有する周溝墓について検討する。そして最後に北巨摩地域の古墳時代前期遺跡を概観し、古墳時代前期における大日川原・神取遺跡の位置づけを行いたい。

第1節 大日川原遺跡と神取遺跡の年代的位置とその関係

1. 方法

両遺跡から出土したS字状口縁台付窓（以下S字窓とする）の年代的定位づけを行い、両遺跡が年代的に一致するか確認する。分析資料は原則として道構出土の遺物を用いたが、神取遺跡は道構の残りが悪かったため道構出土資料が少なく、道構外出土資料も用いた。S字窓の分類・年代的位置づけは小林健二氏の古墳時代前期平野編年（小林1999）に基づき、以下の基準にて行う。

I期：赤坂分類A類（口縁部外面に押引刺突文を施すもの）

II期：赤坂分類B類（A類の押引刺突文を省略したもの）

III期（古）：赤坂分類B類新段落～C類

III期（新）：在地化し独自の変化が進んだ、口縁部が立ち気味で屈曲の無いもの。肩部の横ハケあり

IV期：前段落の在地化したS字窓の、肩部外面の横ハケを省略し体部が長削化したもの。（赤坂分類D類併行）

2. 大日川原遺跡出土のS字窓

大日川原遺跡では、S字状口縁台付窓が3号方形周溝墓から1点、4号方形周溝墓から1点、6号方形周溝墓から2点、11号方形周溝墓では口縁部破片が6点、肩部と台部の付け根の破片1点、肩部上半が失われた個体1点の8点、2号住居から口縁部片1点の合計13点出土している（第79図）。このうち、11号方形周溝墓出土の12～14は、船上、大きさ、整形技法が共通するため、同一個体の可能性がある。そのため、この3つの土器を一括して扱う。

最も年代が古いのは11号方形周溝墓出土の1で、肩部に横ハケを施し頭部内面に横ハケを施さないため、III期のものと思われるが、口縁部の屈曲は鋭く古相の要素をもつため、III期新段落にさかのばる可能性がある。

次に古いのは11号方形周溝墓出土の2・3・4～6である。2は、口縁部の屈曲は緩やかで肩部外面に横ハケを施す。3は、頭部内面に横ハケを施さず、肩部喪失のため肩部の横ハケの有無はわからないが、口縁部の屈曲がやや鋭く古相の要素を持つ。4～6は、肩部に横ハケを施す。頭

部内面には横ハケを施さないが口縁部の屈曲は鋭く、口縁部に面取りとも思える半坦面があるため古相の要素を持つ。これらはIII期新段落に比定されよう。

最も新しいのは段丘生沿いに並ぶ3・4・6号方形周溝墓や2号住居出土のS字窓で、3号方形周溝墓出土の7は、肩部過半以上が失われているが、肩部に横ハケを施さない。4号方形周溝墓出土の8は肩部以上が失われているが、肩部に横ハケを施さず、台部の不連続斜めハケもみられない。6号方形周溝墓出土の9は、肩部に横ハケを施さない。これらはいずれも肩部に横ハケを施さないことから、IV期に比定されよう。

その他、2号住居出土の10は、口縁部が大きく外反し、屈曲も緩やかなため、III期新段落以降のものであろう。また、11号方形周溝墓出土の11は脚台部外面に不連続斜めハケをほどこして施さないため、時期の特定はできないが新相のものであろう。

11号方形周溝墓出土の12と6号方形周溝墓出土の13は年代不明である。

分析の結果を総合すると、大日川原遺跡出土のS字窓はほとんどがIV期が主体で、11号方形周溝墓出土S字窓はIII期新段落のものがある。その中でも11号方形周溝墓出土の1は古相の要素をもち、年代がIII期古段階にさかのばる可能性がある。

3. 神取遺跡出土のS字窓

神取遺跡からは、7号住居から2点、4号土坑群から1点、道構外から3点の計6点が出土している（第80図）。

神取遺跡で最も古いS字窓は道構外出土の1で、肩部に横ハケを施すが口縁部は立ち気味で屈曲も緩やかなためIII期新段落であろう。

また、7号住居出土の2・3は、両者とも肩部に横ハケを施さない。4号土坑群出土の4は、台部は失われているが肩部に横ハケを施さない。道構外出土の5は口縁部から肩部にかけての破片で、肩部に横ハケを施さない。これらはいずれも肩部に横ハケを施さないためIV期に比定されよう。

そのほか、道構外出土の6は台部以下と肩部以上を失っ

ており、時期は特定できないが、内面にハケ目を施すため古墳の要素を持つ。

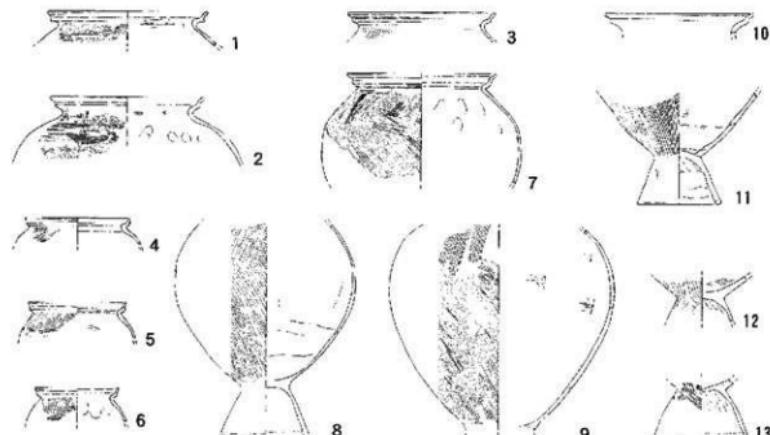
分析結果を総合すると、神取遺跡出土のS字甕はほとんどがIV期に属し、遺構外出土の5の個体のみIII期新段階に属する。

4.まとめ

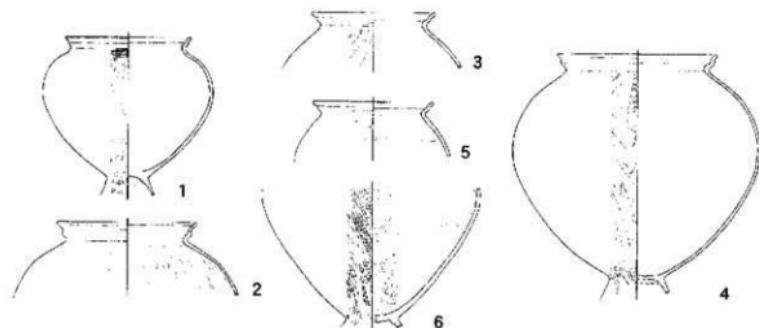
引用・参考文献

- 小林健二 1999 「甲斐のS字甕を考える」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム発表要旨
第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

- 佐野 隆 1994 『神取』 明野村教育委員会



第79図 大日川原遺跡出土のS字状口縁台付甕



第80図 神取遺跡出土のS字状口縁台付甕

第2節 三口台付壺について

1.はじめに

12号方形周溝壺の周溝内から出土した3つの口を持つ台付壺（以下三口台付壺）は、山梨県内では初例でありその系譜は全く不明である。そこで、山梨県外で特殊な形状をもつ土器の出土例を探したところ、わずかだが類例があることがわかった。ここでは類例と比較しながら三口台付壺の系譜を探ってみる。

2.三口台付壺について

三口台付壺は一つの胴部・台部に3つの口をもつ。口は胴部上面で三角を為すように配され、胴部中心に焼成前の穿孔を施す。口は全て胴部と通じている。外面と口縁部内面は細かいハケメを施した後、ほぼ全面にミガキを施している。胴部内面は輪積み底がそのまま残り、脚部内面はハケメのみ施す。また、外面全体と口縁の内側に赤彩を施す。胴部底にも焼成前の穿孔を施しており、非実用的機能を意図して造られていることはあきらかである。

三口台付壺の出土した12号方形周溝壺の造営時期は、近接する他の周溝壺の年代から古墳時代前期甲斐編年（小林1999）IV期、すなわち4世紀後半から5世紀初頭であり、さかのぼっても甲斐編年Ⅲ期新段階、すなわち4世紀中葉初頭と考えられる。そのため三口台付壺の年代も、12号方形周溝壺の造営時期の範囲にさまると思われる。加えて三口台付壺は、表土剥ぎ寸で確認面でのその姿が見えていたこともあって出土層位はかなり上位であり、周溝の底からかなり高いところに位置していた。こうした事実もふくめると、三口台付壺の製作年代は甲斐編年IV期頃、すなわち4世紀後半から5世紀初頭頃としたい。次節からはこの年代案の検証を含め、類例を紹介する。

3.装飾付須恵器との比較

まず、三口台付壺に類似する特殊な形態の土器として、装飾付須恵器が思い起される（第81図）。その起源は4世紀頃、朝鮮半島南部の伽耶地方や百濟・新羅の陶質土器に求められ、朝鮮半島南部では4世紀から6世紀にかけて器物を連接させたもの、動物を容器にしたもの、これに人物を貼り付けたものなどが作られた。日本では5世紀中葉以後小形漆を肩部に数個あわせたり、筒形の脚部に鳥・龜・大・蛇などの動物を飾った装飾器台が出現し、6世紀になると東海地方以西の各地に日本化された各種の装飾付須恵器が出現する（柴垣1995）。出土の大半は古墳からで、被葬者の副葬品もしくは墓前祭の祭器あるいは儀器として使用されていた。器種は大きく分けて①手持ち装飾台付壺、②手持ち装飾器台・連接器、③子持塗籠／鳥絆蓋、④子持ち瓦瓶／平瓶、装飾豆杯の4つがある。この4器種の中では、①の手持ち装飾台付壺が圧倒的に多く、ついで④の高杯形

（子持）器台が多い。

分布は東海地方以西の各地、しかも特定の地域に偏る。その地域は、出雲（島根・鳥取）、近畿中部（大阪、奈良、和歌山）、瀬戸内北部（兵庫・岡山）、瀬戸内南部（他島、愛媛、香川）、北部九州、北陸の計7地域である。山梨県内では装飾付須恵器は確認されていない（注1）。

以上のことを念頭に置き装飾付須恵器との関係を検討すると、三口台付壺は装飾付須恵器と造形の発想において類似点を指摘できる。三口台付壺は口は3つだが頭部はひとつである。頭部の中心に口ではなく、3つの口が胴部上で三角を為すように配されており、口縁部の大きさはいずれも同等である。そのため三口台付壺の造形の根柢には、三点の同等の壺を連接する意図があり、頭部を一つに省略したと考えられる。三口台付壺にみられる同等の器を連続する発想は、連接器をみても明らかのように、装飾付須恵器と共通する。また装飾付須恵器の分布も、東限は東海地方の愛知・岐阜県や、山梨と隣接する静岡県にまで及んでいる（第81図）。

ただし装飾付須恵器は、最古のものでも推定される三口台付壺の年代より新しい。東海地方で連接器が盛行るのは6世紀から7世紀前半で、5世紀代のものもあるが、それは5世紀のいつ頃なのか明確ではない。この実年代のギャップが解決されない限り、三口台付壺は単純に装飾付須恵器との系譜に位置づけることはできない。

4.各地から出土した異形土器

装飾付須恵器は三口台付壺と年代にギャップがあるため、三口台付壺と同時期の類似の土器が出土していないか調べたところ、静岡県と神奈川県で「異形」な土器の出土例があった。以下、紹介する（第82図）。

まず静岡県清水市長崎遺跡で、土器の肩部に子壺をいくつも付けた「多口壺」が出土している。多口壺は壺の中心から出土した。この溝からは多口壺の他に寄50点、妻2点、高杯1点のほか、ト骨も出土している。報告者は、多口壺は弥生後期に畿東地方でよく見られる折り返し口縁帯をベースに、肩部に小さな注口部を6つ配置するとしている。だが、注口部とされた部品は、下半がふくらみ、上部でややくびれた後、先端部で外反する。この形から単なる注口ではなく、ひとつひとつが小壺を表現していると考えることも可能であろう。従って、肩部に6つの小壺を喰せたと考えたい。表面には丹墨り痕があり、赤彩を施していたようである。報告者によると多口壺の年代は弥生時代後期中期とのことである。多口壺の造りを見る限り、上なる器に從属的な器を載せ結合させる造形の発想を看取できる。

また、神奈川県横浜市港北区の藤岡打越遺跡では、壺の肩部に双口をもつ「異形壺」が出土している。藤岡打越遺

部は鶴見川右岸の北向きの丘陵上に立地し、弥生時代後期の堅穴住居が2軒検出されている。異形壺はそのうちの1軒から出土した。この住居からは、異形壺の他に内部東海系山中式系窓環4点・刻み目口縁台付壺4点が出土している。異形壺は住居のほか中央で立位で出土し、他の土器は住居南西部からまとめて出土した。異形壺は壺の肩部に本米の口縁部より一回り小さい凹口を追加した形態をしている。肩部凹口は胴部と貫通している。器面は丹念なヘラナアで、双口部にはヘラミガキが施される。その年代は共伴する土器の年代から、弥生時代後期と思われる。

異形壺は中心となるやや大きいに、從属的に見える小さめの口2ヶ付属する。しかし3ヶの口の大きさには長崎道跡の多口壺はどの違いはない。従って、三口台付壺と同様、同等の器3点を連携させる発想があると思われる。

そのほか、神奈川県平塚市御所ヶ谷戸遺跡・静岡県富士宮市野中向原遺跡からは、S字状口縁台付壺を3つ連携した「三連S字壺」が出土している。野中向原遺跡では表面採集資料だが(第82図1)、御所ヶ谷戸遺跡では円形周溝窓の周溝内から出土した(第82図2)。

この三連S字壺は、3点の全く同じ大きさのS字状口縁台付壺を三角を成すように並べ、互いに胴部が接する部分で孔をあけ、粘土帯で結合させている。そのため、3つのS字状口縁台付壺は互いに胴部が貫通している。ひとつひとつS字状口縁台付壺は、胴部が上下に詰まった形状をしており、胴部は胴部と比較して高く大きい。また、口縁部の肩幅はさほど強くない。また、肩部の横ハケは施されるものと省略されるものがあり、御所ヶ谷戸遺跡出土のものは肩部に横ハケを施すが、野中向原遺跡出土のものは省略されている。また、通常のS字状口縁台付壺と比較して、器高が野中向原遺跡のものか7.9cm・御所ヶ谷戸遺跡のものが胴幅のみで6.3cmであり、非常に小さい。大きさからも煮沸具として考えづらく、S字壺の三連形態という点も含め、非実用的機能を意識して造られたのであろう。

年代は、三連S字壺の個々のS字状口縁型を取り上げて通常のS字状口縁台付壺と対比ができると仮定した場合、口縁部の肩幅が弱いこと、肩部横ハケを施さないものがあることなどから、古墳時代前期、4世紀後半代と思われる。三口台付壺とは、年代がほぼ併行すると見てよかろう。

註

(註1) 装飾付須恵器の説明に関しては、「装飾付須恵器展」展示図録(愛知県陶磁資料館)内の柴垣勇夫氏の解説によった。

引用・参考文献

- 加納後介 1990 「S字壺とS字壺もどき 一土器分類論考(2)ー」『マジナル』No10 愛知考古学研究会
後藤茂樹 1979 『世界陶磁全集 17 韓國古代』 小学館
小林健二 1999 「甲斐のS字壺を考える」「S字壺を考える」第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
呉山・徐恩民・陸輝 1994 『中國八千年器皿造形』 藝術圖書出版社
愛知県陶磁資料館 1995 『古代の造形美 装飾須恵器展』展示図録
(仮称)大倉山マンション建設用地内遺跡発掘調査団 1990 『横浜市港北区 藤岡打越遺跡』
足立順子・岸合高志 1995 『長崎遺跡IV』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第59集
田尾敏敏 1991 『足下に既る歴史 3・4世紀の西柏原』 展示図録 東海大学文学部・東海大学校地内遺跡調査团

このほか三連S字壺は、長野県松本市右行遺跡、滋賀県神崎郡大町斗西遺跡からも出土しており(加納1990)、人差指ではあるがその分布は南関東から東海地方の西端までに限られよう。

三連S字壺の造形の発想には、同等の3点の器を結合する意図があるのはあきらかである。この発想は三口台付壺と同様であり、三口台付壺は、造形の発想は三連S字壺と共に通しよう。

5.まとめ

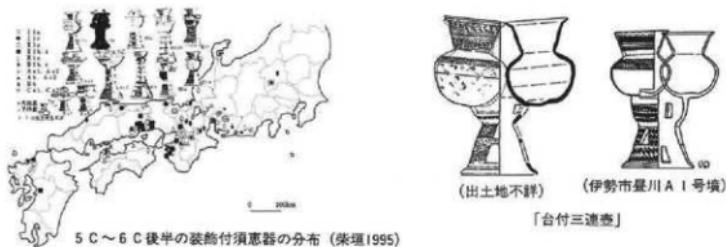
三口台付壺、多口壺、異形壺、三連S字壺は、いずれも複数の器を連携させることで共通するが、造形の根柢にある発想に違いがあることが推測される。それは、

①同等の器を複数連結する → 三口台付壺、異形壺、三連S字壺

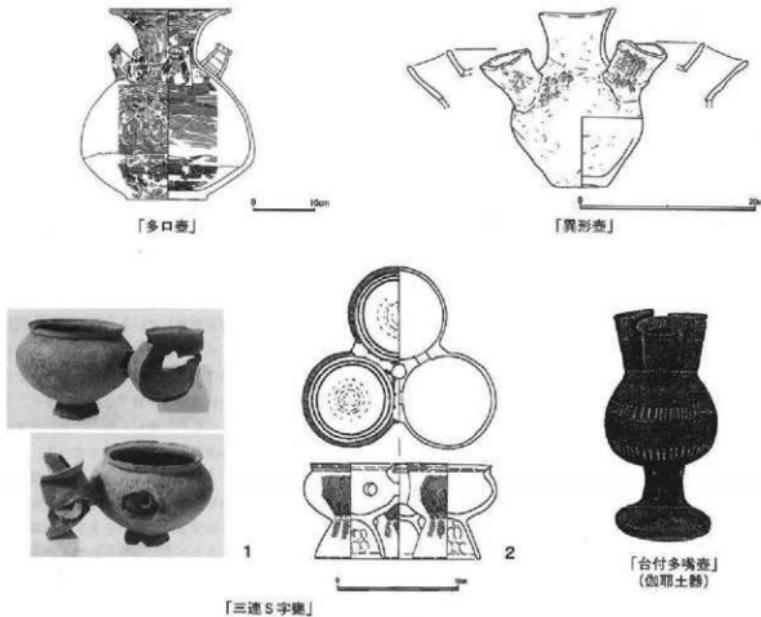
②主たる器に從属的な器を付随させる → 多口壺
という点で、この二通りの発想は、装飾付須恵器の造形にも共通する。三口台付壺などの「異形壺」群が、装飾付須恵器に系譜上継承されたのか、両者は全く無関係であったのか、拙論では明らかにし得なかった。しかし、異形土器群が東日本に広く影響を与えたS字状口縁台付壺に代表される東海地方の土器製作の文化に、その起源を有する可能性を指摘できる。

今回の三口台付壺の聚例調査の際、中国の漢代の土器や朝鮮半島の伽耶土器のなかに、やはり土器をいくつか組合した異形土器があった。伽耶土器の中には三口台付壺と瓜二つの土器もあった(『世界陶磁全集 17 韓國古代』、第82図)。しかし詳しい年代が確認できず中途半端なままでやむに以ってしまった。三口台付壺は日本独自の土器なのか、それとも中国や朝鮮に系譜が求められるのかの検討は、筆者の力量を大きく超えている。また、日本国内で出土した異形土器も東成編れがあろう。研究者の方々のご叱正・ご教示を賜りたい。

最後に、この論考を作成するにあたり、柴垣勇夫氏、米田俊幸氏、渡井英臣氏、西川修一氏、今福利恵氏、森原明廣氏、石浦孝子氏にはご教示をいただきました。記して感謝いたします。



第81図 装飾付須恵器とその分布



第82図 異形土器群と三口台付壺類似の伽耶土器

第3節 貼石を有する周溝墓について

1.はじめに

大日川原遺跡からは、方台部の法面に貼石を施す方形周溝墓が検出されている。山梨県内では初例であり、県内に對比できる類例がない。そこで他県で類例がないか調べてみたところ、長野県伊那谷南部の飯田市で、貼石を有する方形周溝墓がまとまって見つかりることが分かった。以下、類例紹介を兼ね、両者を比較する。

2. 大日川原遺跡の貼石を有する周溝墓

はじめに、大日川原遺跡から検出された貼石を有する周溝墓について概観しておく。

大日川原遺跡では合計12基の方形周溝墓が検出されているが、そのうち方台部法面に貼石を施すものは11号方形周溝墓1基のみである。11号方形周溝墓は遺跡の最北端にあり、規模も最大である。遺物の出土量も全12基中最大きい。貼石は方台部西側法面の南東隅から約3.5mにわたって施されている。貼石に用いられた磚は人頭大から抱えるくらいの大きさで、2段もしくは3段に積まれていた。貼石と周溝堤方との間には、周溝堤上とも地山とも違う層があり、周溝内壁に土を盛ってから石を貼ったと思われる。11号方形周溝墓で貼石が施されていたのはこの場所だけであり、ほかに貼石は施されていない。しかも周溝内から貼石に使えるような大きな磚の出土はない。そのため方台部法面の貼石がないところは、もともと貼石が施されていなかった可能性が高く、石の崩落によって貼石が失われた可能性は低い。

3. 長野県飯田市の貼石をもつ方形周溝墓

長野県飯田市では、天竜川右岸の河岸段丘上、とくに飯田市を横断する松川以南地域の遺跡から、貼石を有する方形周溝墓がいくつか見つかっている。この地域には天竜川の堆積作用による河岸段丘が何段も発達しており、段丘は大きく上下2段に分かれている。貼石をもつ周溝墓はすべての河岸段丘上の遺跡から発見されており、上位段丘では八幡原遺跡、下位段丘では寺所遺跡、城遺跡、田園遺跡、森田竜丘遺跡、森田上ノ堀遺跡の計6遺跡で見つかっている(第83図)。これらの遺跡で検出された貼石を有する方形周溝墓は合計8基である。以下各遺跡ごとに概観していく。

城遺跡(第84図)では、弥生時代後期後半の方形周溝墓2基・堅穴住居2軒が検出され、うち1基で貼石の痕跡が確認された。北東には寺所遺跡、南西には田園遺跡が存在する。2基の周溝墓は調査区北側で東西に並び、南東に40m離れたところには堅穴住居2軒が南北に並んでいる。貼石の痕跡が見つかったのは2基のうち東側の方形周溝墓1号で、この周溝墓の平面プランは隅丸方形で、周溝の一部は約10m、北西隅にブリッジを有する。方台部法面に貼石

は残っていないかったが、周溝内のはば全周で覆土中に大量の磚が検出された。調査報告には磚の大きさについての記述はないが、写真から推測するに10~40cm大の磚を用いているようである。方台部に盛土は残っていないかったが、中央で切妻造と思われる長方形の土塁が検出された。土坑内からは何も検出されなかった。遺物は西溝からまとめて出土し、弥生時代後期中島式の壺、壺、高杯、堆、台付甕などが出土した。そのため、造営年代は弥生時代後期後半ごろと思われる。

報告者は、周溝内から出土した磚は、遺跡の立地条件と西側の周溝墓の周溝内から全く磚が検出されないことなどから、河川の氾濫等による自然堆積とは考えられず、外部から持ち込まれ貼石に用いられたが崩落してしまった結果であろうと推測している。城遺跡の検出例は、飯田市周辺で見つかった貼石を有する周溝墓の中では最古の部類に属する。

田園遺跡(第84図)からは弥生時代後期の方形周溝墓1基、古墳時代前期の方形周溝墓2基が検出されている。遺跡は低位段丘上に立地し、北東には城遺跡、寺所遺跡が存在する。3基の周溝墓は調査区東端で三角をなすようにまとめて検出され、貼石は調査区東端南側の方形周溝墓1号から検出された。方形周溝墓1号の規模は約16m、周溝墓の東半分は調査区外のためアーリッジの有無は不明である。また西側の尾瀬墓と周溝を共有している。貼石は方台部法面のはば全周に施されていた。石は底面ほど幅広く積まれており、貼石表面の傾斜は、周溝の堰方よりも緩やかになっている。磚は10~30cm程度のやや扁平な円磚が多く、天竜川から運ばれたと考えられる。貼石と堰方の間に土を盛った痕跡はなく、方台部法面に直に石を貼っている。方台部に竪土・埋葬施設のいずれも検出されなかった。遺物は周溝内から土器師壺、高杯、鉢などが出土した。造営年代は古墳時代前期である。田園遺跡の貼石を有する周溝墓は、他の周溝墓と溝を共有するところが特徴としてあげられる。

八幡原遺跡(第84図)では、方形周溝墓24基、土塙墓3基からなる弥生時代後期終末から古墳時代中期にかけての墓域が検出され、うち1基から貼石が検出された。遺跡は高位段丘上に立地し、東の低位段丘上には上流から寺所遺跡、城遺跡、田園遺跡が存在する。検出された周溝墓群は、中心となる大型の周溝墓にいくつもの小型の周溝墓が溝を共有してブロックを形成しており、段丘崖沿いにブロックが數個並んで墓域を形成している。貼石は墓域のはば中央に位置する方形周溝墓7に施されていて、他の周溝墓とブロックを形成せず単独で存在している。

方形周溝墓7の規模はこの遺跡の周溝墓の中では平均的な大きさで、1辺が約12mである。アーリッジはない。貼石の造存状況は良く、方台部法面の全周で検出された。貼石

に用いられていた砾は、大きさにはばらつきがあるが最大で50mm以上である。砾石と周溝掘方の間に土が盛られた形跡はなく、周溝掘方の上に直接石を貼ったようである。調査者は周溝内に砾石とは別に大きな礫が検出されており、方台部に盛土の形跡がみられたこととあわせて、貼石は方台部の墳丘にまで施されていたとしている。方台部の盛土はわずかに確認されたが、埋葬施設は確認されなかった。遺物は小形壺のはか屈折脚高杯が出土しており、この周溝墓の造営年代は5世紀前半、古墳時代中期に比定されよう。八幡原遺跡の周溝墓群は、出土遺物から弥生時代前期と判明した方形周溝墓4、古墳時代前期の方形周溝墓3を除くほとんどの遺物が出土していないが、その多くは古墳時代中期に造営されたと考えられる(小林1992b)。短時間のうちにプロックが形成されたと考えられる。その中で貼り石を有する方形周溝墓7は、他の周溝墓と構を共有してプロックを形成することはなく、单独で存在している。

八幡原遺跡のように墓群の中で貼石を有する周溝墓のあり方がわかる例は他ではなく、特筆される事例といえよう。

寺所遺跡(第85図)では方形周溝墓2基、円形周溝墓2基、形態不明の周溝墓1基が検出され、このうち3基で貼石が検出された。遺跡は低位段丘上、松川との合流地点付近に立地し、南西には、城遺跡、田園遺跡が存在する。周溝墓5基はまとめて存在し、このうち貼石が施されているのはSM-01・03・04である。調査区中央に造営最大の円形周溝墓であるSM-04があり、北にはSM-05が切り合、東側には貼石をもつ小型の方形周溝墓であるSM-03があり、南西に円形周溝墓であるSM-02が接続する。また、南東に少し距離を置いて中型の方形周溝墓であるSM-01が存在する。これらの周溝墓は接続しているものの、SM-05を除き周溝を共有しない。

調査区中央のSM-04は、平面プランは円形で南西にアーチを一つもつ。規模は18.5mで、全5基中最大である。貼石は確実に確認できなかったが、周溝覆土中から10~40cm大の礫が大量に検出された。礫は周溝南東部で特に集中して確認された。礫は特定の高さに集中せずに、検出面下から底にかけて均等にみられた。調査者は、これらの礫は周溝内における出土量に偏りがあること、礫の絶対量が方台部法面の全てを覆うには少ないことから、この礫は貼石の軒落によるものとは考えられないとしている。だが、礫が集中する周溝南東部では石が人為的に並べられた形跡もあることから、これらの礫には何らかの人为的な意図があったともしている。写真を見る限りでは、部分的に貼石を施していたようである。方台部の盛土はわずかだが確認され、明治時代には墳丘の高まりがあったという地権者の証言もあり、方台部中央には盛土があったことは確実なようである。また、方台部中央に長方形の土坑1基、アーチの中央に石組構築1基が検出された。方台部中央の土坑は、内部から骨片が確認され、副葬品と思われる直刀2振、刀子1振も出土しているため、埋葬施設であろう。また、土坑底の両

端には細い溝状の掘り込みがあり、棺に用いられた木棺の小口痕と思われる。そのほか、周溝内からは土師器瓦泉、手づくね土器、須恵器盤、鉄斧、勾玉などが出土した。出土した土器から、SM-04の年代は古墳時代中期と考えられる。

SM-01では、ほぼ完全な形の貼石が検出された。この周溝墓は南東部のみの調査のため規模は不明だが、周溝幅が1.8~3mもあるSM-04と比較して、周溝の幅が0.9~1.5mしかなく、SM-04よりもふた回り以上小型の周溝墓と思われる。貼石について報告者は、周溝内に5~40cm大の礫が大量にあり周溝内の方台部法面側に多い傾向が認められるとながらも、原位置での貼石の検出はなく、この礫は方台部法面や墳丘に貼られた右が周溝内に転落したものとしている。しかし写真を見る限り、礫は原位置をとどめていると思われ、セクションの様子では周溝を掘った後周溝内壁に盛土をしてその上に石を貼っているようである。耕作による削平のため、方台部に墳丘や埋葬施設は確認できなかった。しかし、方台部中央で刀子1振と砥石1点、鉄鋸13点、赤彩された土偶の頭部が、それぞれ1m程度の間隔を置きながら1直線上に並んで出土した。このため、方台部で墳丘と埋葬施設があったものと思われる。また、周溝内からは土師器甕が出土している。出土遺物からこの方形周溝墓の年代は古墳時代中期である。

調査区南端のSM-03でも貼石が見つかっている。北東部のみの調査のため規模は不明だが、周溝幅が1.8~2.1mであり、おおよそSM-04と同程度かしくは一回り小型の周溝墓であろう。貼石については、報告者はSM-01と比べると遺存状態は良くなく、周溝内に5~40cm大の礫が大量にあり、周溝内の方台部法面側に多い傾向が認められるとながらも、原位置で貼石が検出されなかつたとし、これらの礫は方台部法面や墳丘に貼られた石が周溝内に転落したものとしている。しかし、写真を見る限り礫の一部は原位置をとどめていると思われ、セクションの様子では周溝を掘った後、方台部法面に盛土をしてその上に石を貼ったと考えられる。方台部で盛土、埋葬施設のいずれも確認されていない。周溝内部からは土師器甕2・甕2・杯3・高杯2点、須恵器長颈瓶2点が出土している。年代は屈折脚高杯や須恵器が出土していることから、古墳時代中期である。寺所遺跡では、大型の周溝墓だけではなく小型の周溝墓にも貼石が施されていること、貼石を有する周溝墓が群在していることが特徴としてあげられよう。

その他報告書未刊行だが、森出竪窓遺跡や森田上ノ坊遺跡からも貼石をもつ方形周溝墓が検出されている^(注1)。

以上の例から飯田市周辺の貼石を有する周溝墓についてまとめる。

1. 墓群の中での貼石を有する周溝墓のあり方は、周溝墓群の中で1基だけの場合が多いが、古墳時代中期には貼り石を有する周溝墓が複数まとめて存在する例もみられる(寺所遺跡)。

2. 貼石は、大型の周溝墓に施す場合もあるが(田園遺跡・寺所遺跡SM-04)、墓群中の平均的な大きさの周溝墓にもよくみられ(城遺跡・八幡原遺跡・寺所遺跡SM-01)、小型の周溝墓に施されることもある(寺所遺跡SM-03)。規模による傾向はなさそうである。
3. 他の周溝墓と溝を共有することもあるが(田園遺跡)、他の周溝墓と溝を共有せず単独で存在することが多い。ただし墓域から離れたところで単独で存在することはなく、他の周溝墓と群在する点は通常の周溝墓と同じである。
4. 平面プランでは、方形周溝墓に貼石を施す例が多いが、円形周溝墓にも貼石がみられた(寺所遺跡SM-04)。
5. 貼石は方台部法面を全周することが多いが、古墳時代中期には部分的に施す例も出現する(寺所遺跡SM-04)。
6. 石の貼り方には、方台部法面である周溝内壁に直接石を貼る場合が多いが、古墳時代中期には土を盛ってから石を貼る方法も出現する(寺所遺跡SM-01)。
7. 貼石に用いられる礫はばらつきが大きく、最小で5cm、最大のものでは40cm以上もあり、特定の大きさの石を選ぶ傾向はみられない。
8. 造営年代は弥生時代後期後半から古墳時代中期にわたり、織錦的に造営されたようである。特に盛んに造営された時期はなさそうである。
- その他、方台部には盛土をし中央に土坑を設け埋葬施設とすること、周溝内から祭祀に使用したと思われる遺物が出土することなど、基本的な性質は通常の周溝墓と変わりない。
- 総合すると、飯田市周辺では貼石を有する周溝墓が弥生時代後期から古墳時代中期まで継続して造営されていた。貼石を有する周溝墓は通常の周溝墓と比べ少希であり、特殊な性格の周溝墓であること考えられるが、周溝墓としての基本的な性質は通常の周溝墓となんら変わりはない。第19表に各遺跡から検出された貼石を有する周溝墓の属性を示す。

4. 考 察

ここでは、大日川原遺跡と伊那谷南部の飯田市で発見された、貼石を有する周溝墓について比較したい。

石の貼り方だが、大日川原遺跡の場合には周溝掘方に盛土をしてから石を貼る。飯田市の事例では周溝内壁に直接石を貼る場合が多いが、寺所遺跡SM-01・04のように周溝内壁に土を盛ってから貼る場合もあり、石の貼り方には状況によって2通りあった。

次に貼石が施された範囲では、大日川原遺跡は方台部西辺の南半部に限られるが、飯田市の事例では方形プランの場合貼石はほとんど全周し、方台部法面に貼石がなくとも崩落した礫が周溝内に残っていることが多い。だが、寺所

遺跡SM-04のように一部にしか貼石を施さない例もあり、貼石は一部にしか施されない場合もあるようである。

貼石に用いられた右の大きさは、大日川原遺跡では人頭大から人が抱える程度の大きさでまとまっており、大きさに対して選択をしているが、飯田市の事例では全ての検出例で5cm大から40cm大までとばらつきが大きく、右の大きさに対する選択は大日川原遺跡ほど顕著ではない。

墓域の中でのあり方は、大日川原遺跡から検出された全12基の周溝墓のなかで、貼石を有する周溝墓は11号方形周溝墓1基のみである。これは八幡原遺跡方形周溝墓7と共通する。しかも墓域が河岸段丘の段丘崖沿いに立地するところも類似する。

大日川原遺跡の貼石を有する11号方形周溝墓は全12基中最大である。遺物の出土量も他の周溝墓と比べ格段に多く、被葬者の違いを示唆する。そのため、大日川原遺跡11号方形周溝墓の例だけをみると、貼石は被葬者の特別な社会的地位を示すものと考えたくなる。しかし飯田市の事例では、寺所遺跡SM-04のように規模の大きな周溝墓に貼石を施す例もあるが、貼石は墓群中の大型周溝墓だけに限られるわけではない。城遺跡や田舎遺跡のように墓群中に平均的な大きさの周溝墓にもみられ、出土する遺物の量も他の周溝墓と比べとりて大きな差があるわけではない。また寺所遺跡SM-01のように小型の周溝墓に貼石を施す例もある。飯田市の事例からは、貼石は一概に被葬者の特別な社会的地位を示すとは考えられないよう思われる。

さらに東日本全域に目を転じると、貼石を有する周溝墓の検出例は、茅ヶ岳山麓の大日川原遺跡を除くと伊那谷南部の飯田市周辺以外には今のところ見られない。貼石に使われた礫の大きさの選択に相違があるものの、石の貼り方や石の貼る部位が共通することなどから、両者は同じ系統と考えたい。さらに飯田市周辺では貼石を有する周溝墓がまとまって検出されていること、その出現は大日川原遺跡よりも先行し、弥生時代後期からであることなどから、大日川原遺跡の貼石を有する周溝墓は伊那谷南部から伝播したものと考えたい。平塚盆地西端の中巨摩郡櫛町十五所遺跡では、弥生時代後期に伊那谷南部で特徴的な中島式土器が出土しており(第86図)、弥生時代後期から古墳時代初期にかけて甲府盆地は伊那谷南部と交流があったことは確実である。伊那谷南部の土器の流入ルートは、中間地域の様相から推測して源流湖ルートを考えたい。ただ、大日川原遺跡から伊那谷南部の土器は出土しておらず、八ヶ岳や茅ヶ岳山麓でも、これまでのところ伊那谷南部の土器の出土例はない。一方西日本でも、京都府守山市日野町守山遺跡から貼石を有する周溝墓が検出されており(野島1991)、大日川原遺跡例を伊那谷南部の影響と結論づけるには時期尚早かもしれない。今後の資料の増加に期待したい。

最後になりましたが、この論考を書くに当たって小林一春氏にはご教示・ご協力をいただきました。また、駒ヶ根市立博物館には資料収集にご協力いただきました。記して

感謝いたします。

註

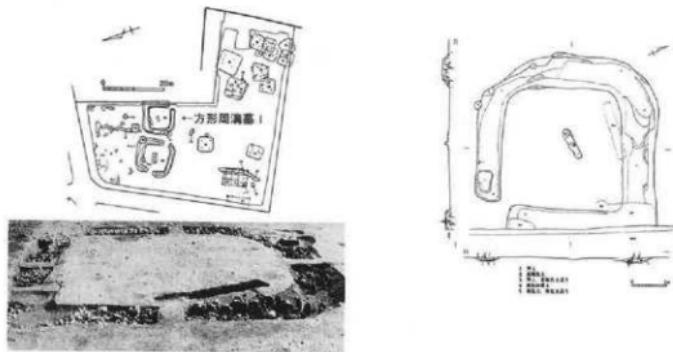
(註1) 飯田市教育委員会の小林一春氏のご教示による。

引用・参考文献

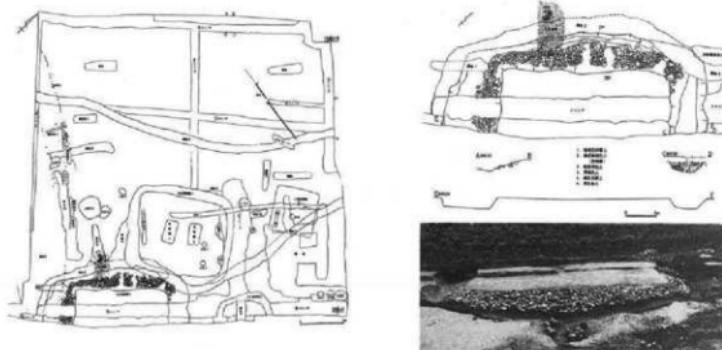
- 米田明訓ほか 1999 「十五所遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第158集 山梨県教育委員会
小林正春 1991 「城遺跡」 飯田市教育委員会
小林正春 1992 a 「八幡原遺跡 一事務所兼住宅建設に建設に先立つ埋蔵文化財発掘調査報告書一」
飯田市教育委員会
小林正春 1992 b 「八幡原遺跡 ——般国道135号飯田バイパス（3工区）用地内埋蔵文化財発掘調査報告書一」
飯田市教育委員会
馬場保之ほか 1993 「田園遺跡」 飯田市教育委員会
山下誠一 1999 「寺所遺跡」 飯田市教育委員会
下伊那教育会 1991 「下伊那史」 第1巻
野島 永 1991 「京都府北部の貼石墳丘墓について」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 關京都府埋蔵文化財センター



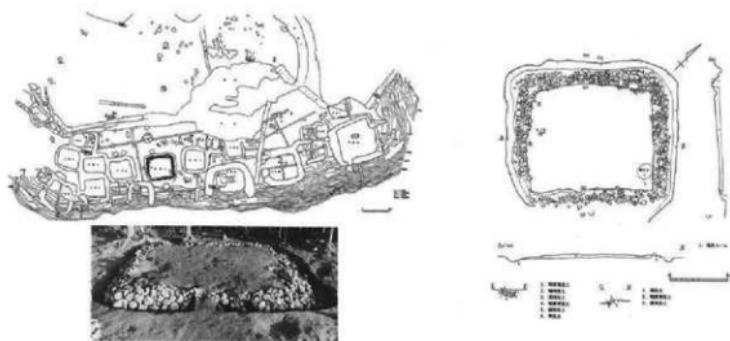
第83図 飯田市周辺の貼石を有する周溝墓が検出された遺跡



城遺跡 方形周溝墓！

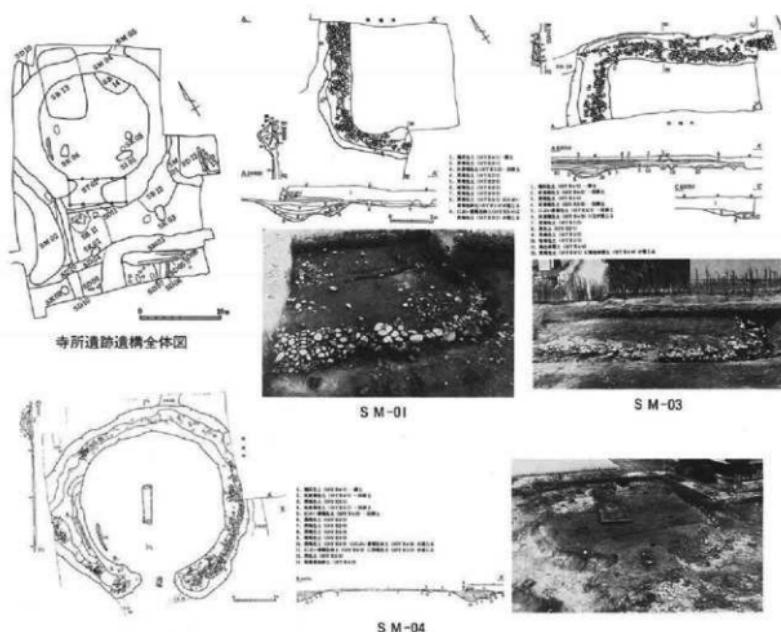


田園遺跡 方形周溝墓！

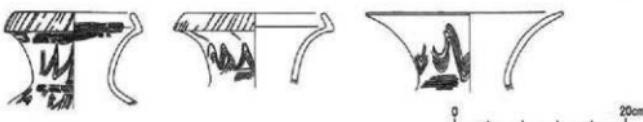


八幡原遺跡 方形周溝墓 7

第84図 飯田市周辺の貼石を有する周溝墓①



第86図 飯田市周辺の貼石を有する方形周溝墓②



第86図 山梨県内で出土した長野県伊那谷南部の弥生時代後期土器（中巨摩郡柳形町十五所遺跡）

第19表 飯田市周辺の貼石を有する周溝墓 属性表

遺跡名	城遺跡	田園遺跡	八幡原遺跡	寺所遺跡		
遺跡名	方形周溝墓1	方形周溝墓1	方形周溝墓7	SM-01	SM-03	SM-04
墓群内での在り方	1基のみ	1基のみ	1基のみ	複数群在	複数群在	複数群在
規模	平均	大型	平均	平均	小型	大型
溝の共有	なし	あり	なし	なし	なし	あり
平面プラン	方形	方形	方形	方形	方形	円形
石の貼り方	—	周溝内壁に直接	周溝内壁に直接	方台部方面に盛土様	—	(周溝内壁に直接?)
石の貼られる範囲	方台部法面のほぼ全周 (方台部法面を全周?)	方台部法面のほぼ全周 (方台部法面を全周?)	方台部法面を全周?	(方台部法面を全周?)	方台部法面の一部	
年代	弥生時代後期後半	古墳時代前期	古墳時代中期		古墳時代中期	

第4節 大日川原遺跡・神取遺跡の北巨摩地域古墳時代前期にどう位置づけるか

1.はじめに

大日川原・神取遺跡の古墳時代前期の北巨摩地域内における位置づけを行う前に、大日川原・神取遺跡と存続期間の長い坂井南遺跡の集落の変遷を確認しておく。

分析方法は遺構内から出土したS字状口縁合付甕を基準として住居址・方形周溝墓の時期ごとに分け、各時期ごとに遺構分布を調べることによってみていくことにする。

なお、年代に関しては小林健一氏が第7回東海考古学フォーラムにおいて発表した古墳時代前期甲斐編年（1999）に従うものとする。

2. 大日川原遺跡と神取遺跡の集落分析

まず、大日川原・神取遺跡の各遺構から出土したS字甕の出土数とその年代を示す（第21表）。表から各時期ごとの発掘総数を以下にまとめておく。

III期新段階：大日川原遺跡11号方形周溝墓

（1・5・8号方形周溝墓）

神取遺跡（6号住居）

合計：堅穴住居1軒、周溝墓4基

IV期：大日川原遺跡3・4・6・11号方形周溝墓

（7・8号方形周溝墓）

大日川原遺跡2号住居

神取遺跡7号住居（8号住居）

合計：堅穴住居3軒、周溝墓6基

*（ ）内は遺構の切り合いから推定

時期不明：大日川原遺跡 方形周溝墓3基

神取遺跡 住居5軒

1号方形周溝墓はIV期の住居である2号住居に切られてしまつていて、IV期以前、ここではIII期新段階とした。5・7・8号方形周溝墓は、年代の決め手となる遺物の出土がないため推測の域を出ないが、7号方形周溝墓が切り合いから3基中最も新しく、しかもIV期の4・6号方形周溝墓とはほぼ同規模で同じ列上に並んでいることから、3基はほぼ同時期と考えられる。そのため、7号方形周溝墓に切りされている5・8号方形周溝墓の造営開始期は、それ以前、III期新段階と考えておきたい。

集落地とみられる神取遺跡では、III期新段階に6号住居が營まれたのち、IV期になってその両隣に7・8号住居が營まれた。その1かの遺構は残りが悪く、年代決定の決め手となる土器の出土が乏しいため集落変遷の様子は分からぬ。墓域とみられる大日川原遺跡では、まずIII期新段階頃に墓域の北端で小型の1号方形周溝墓と最大規模の11号方形周溝墓が（場合によってはII期古段階から）、5・8号

方形周溝墓が山端で造営され始める。その後IV期になって、新たに3・4・6・7号方形周溝墓が段丘崖沿いに列を成して造営される。11号方形周溝墓はIII期新段階に引き続きIV期も造営され続け、8号方形周溝墓も造営され続けるようである。1号方形周溝墓は放棄され、その場所には堅穴住居も造られる。7号方形周溝墓は5号方形周溝墓の上に造られており、この時期には5号方形周溝墓も放棄された可能性が高い。

このように神取遺跡と大日川原遺跡のはIII期新段階から遺跡が營まれ初め、IV期には盛期を迎える。そしてIV期以降両遺跡は突然放棄されたようである。集落も墓域の変動から、同様の盛衰をとどめたと考えられよう。

3. 坂井南遺跡の集落分析

ここでは大日川原・神取遺跡と同様の手法を用い、坂井南遺跡の分析を行いたい。以下、各遺構から出土したS字甕の出土状況とその年代を示す（第21表）。

表から各時期ごとの遺構総数を以下にまとめておく。

弥生終末：第3次調査49住

4・5・6次調査1・2・8・11・22・23住

3号方形周溝墓

計：住居7軒、方形周溝墓1基

I期：第3次調査47・56・57住

4・5・6次調査12・19住

2・3・4号方形周溝墓

計：住居5軒、方形周溝墓3基

II期：3次調査7・19・27・28・33・37・47・48・55住

4・5・6次調査13住、2・4・6号方形周溝墓

（大原）1号方形周溝墓

計：住居10軒、方形周溝墓4基

III期古段階：1次調査5住

2次調査B区4住

3次調査1・4・6・7・9・17・20・26・

28・30・32・36・37住

計：住居15軒

IV期新段階：1次調査4・5住

2次調査B区4・5・6住

3次調査4・6・7・11・12・14・15・16・
20・21・22・28・29・32・35・37・
39・43・45住

計：住居24軒

V期：1次調査3・6住

2次調査B区4・8・9住、C区4住A

3次調査3・4・10・13・23・29・30・31・35・
41・44・50・55住

時期不明：住居24軒、方形周溝墓 7基

坂井南遺跡の盛衰は、弥生時代終末から古墳Ⅰ期までの発展期と、Ⅱ期からⅣ期新段階までの盛期の2段階に分かれる(第87図)。弥生時代終末に孤立丘の東側で始まった集落の経営は、Ⅱ期まで少しづつ住居数を増やしながら集落が西へ移動する。墓域は集落域の東側に方形周溝墓を中心して設置され、集落域の西側にあわせ築堤しながら少しづつ範囲を拡大する。そしてⅢ期以降になると住居軒数が急増し、竪穴住居は孤立丘のほぼ中央でおおよそ扇状にまとまるようになる。このⅡ期以後、集落が消滅するまでこの場所が集落の中心となり、集落は中心を維持したままⅢ期新段階まで西に拡大していく。墓域はⅡ期で造営数が最大になるが、Ⅲ期古段階以降は最大の4号方形周溝墓だけ造営し、他は放棄される。Ⅳ期になると周溝墓は全く見られなくなり、墓域の様相は全くわからなくなる。そしてⅣ期以降集落は突然廃絶する。

4. 北巨摩地域におけるその他の古墳時代前期遺跡

このほか、北巨摩地域の占墳時代前期集落は、富士川右岸の河岸段丘上や、七里ヶ岩台地・八ヶ岳山麓・茅ヶ岳山麓で発見されている。

富士川右岸では蘇市久保星敷遺跡で竪穴住居が2軒検出されている。これらはいずれもⅢ期古段階に比定される(小林1999)。

七里ヶ岩台地上では、坂井南遺跡の北3kmにある伊藤市伊藤塚第2遺跡で、竪穴住居2軒が検出されている。これらはⅣ期に比定される(伊藤1997-1998)。また、伊藤塚第2遺跡の北側に隣接する岩尻遺跡では、竪穴住居3軒が検出されており、いずれもⅣ期に比定される。両遺跡は極めて近接しており、同一集落の可能性があろう。

八ヶ岳山麓では長坂町北村遺跡で周溝墓6基が検出されている。これらはⅣ期新段階～Ⅳ期に比定される(伊藤1998)。

また現在調査中だが、高根町神の前遺跡で竪穴住居が10軒検出され、年代はすべてⅣ期ということである(伊藤2000)。

茅ヶ岳山麓では高台・中谷井遺跡と中原遺跡でそれぞれ土坑内からS字状口縁付甕が検出された。これらはいずれもⅣ期に比定され、土坑墓と考えられるため周辺に集落が存在すると手割されよう。

これら7遺跡を時期別に分けると、Ⅲ期古段階は富士川右岸に久保星敷遺跡が、Ⅲ期新段階には八ヶ岳山麓に北村遺跡がある。そしてⅣ期になると七里ヶ岩台地上に伊藤塚第2・岩尻遺跡、藤井平の立石遺跡、八ヶ岳山麓の北村遺跡・神の前遺跡が、茅ヶ岳山麓に高台・中谷井遺跡・中原遺跡があり、Ⅳ期における遺跡数の激増ぶりが窺えよう。

5. まとめ

遺跡の規模・継続性から坂井南遺跡は占墳時代前期を通じて北巨摩地域における中心的な集落であったと考えられる。その繁栄がピークを迎えるⅢ期新段階から、北巨摩地域では小集落が七里ヶ岩台地周辺に散在し始め、茅ヶ岳山麓では大日川原・神取遺跡が、八ヶ岳山麓では北村遺跡が出現する。次のⅣ期になると小集落はさらに数を増し、七里ヶ岩台地上の伊藤塚第2遺跡・岩尻遺跡や藤井平の立石遺跡、茅ヶ岳山麓では中原遺跡・高台・中谷井遺跡が、八ヶ岳山麓では高根町神の前遺跡で出現する(伊藤2000)。

弥生後期に藤井平で出現した小集落は、古墳前期初頭にいったん藤井平を離れ、七里ヶ岩台地上の坂井南遺跡へ集落を集結するという(伊藤1997)。その後そこで少しづつ住居軒数を増やして領域を拡大して行き、Ⅲ期新段階に至ると周辺の八ヶ岳山麓や茅ヶ岳山麓にまで集落が出現し、七里ヶ岩台地外へ集落が分散拡大する。そしてⅣ期に至って茅ヶ岳・八ヶ岳山麓の集落数はさらに数を増し、北巨摩地域は坂井南遺跡を中心に最も遺跡数が増加する。しかし、これらの集落はいずれも次の古墳時代中期初頭にまで継続していない。現在までに知られる古墳時代中期の遺跡は長坂町龍角遺跡・龍角西遺跡など限られるが、遺跡内の古墳時代前期の遺構とは年代的に断絶がみられる(伊藤1998)。古墳時代前期と中期との間に、遺跡の継続性からみると大きな断絶が認められよう(第20表)。その断絶の意味をここで論じることはできないが、大日川原遺跡・神取遺跡は坂井南遺跡の周辺で成立しその終焉を共にする、北巨摩地域の諸遺跡と同様に位置づけることができよう。

大日川原遺跡で検出された貼り石を有する方形周溝墓は、そうした遺跡の継続性においてどのような意味を有するのか。同時期の坂井南遺跡の墓域の調査が実現した時点で改めて検討を加えてみたい。

最後に、この論考を書くに当たり、雨宮正樹氏・村松佳幸氏・山下孝司氏からご教示・ご協力を得ました。記して感謝いたします。

註

(註1) 小林健二氏(山梨県教育委員会)・村松佳幸氏(長坂町教育委員会)のご教示による。

(註2) 雨宮正樹氏(高根町教育委員会)のご教示による。

(註3) 久保星敷遺跡はS字型C類の忠実品が出土していることから、小林健二氏はⅢ期古段階における東海系土器の第2次拡散を示すものとし、東海地方からの人の動きを想定している(小林1998)。久保星敷遺跡は竪穴住居が次期に継続せず短期間で消滅するうえ、現時点では北巨摩地域の富士川右岸部で他に古墳時代前期の遺跡は発見されておらず、それ以後も小集落拡散の動きはみられないことから、ここでは北巨摩地域の古墳時代前期集落

の大きな動きとは別の流れととらえたい。

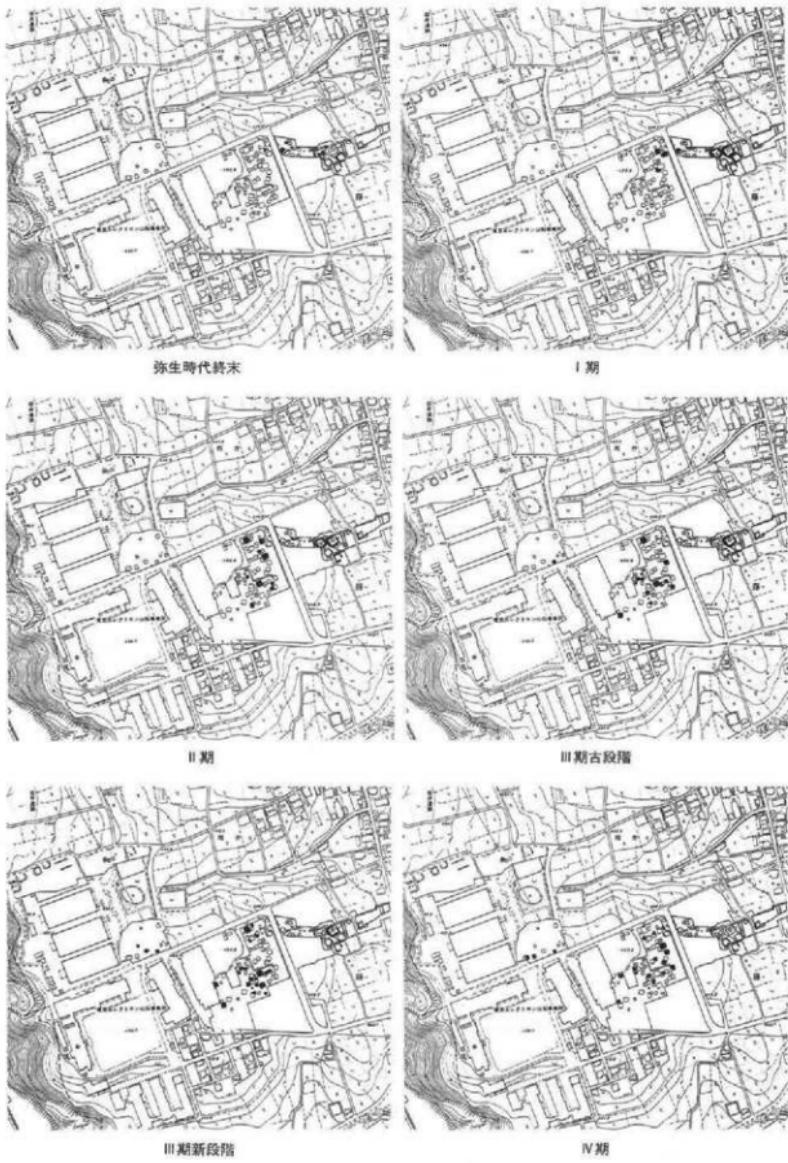
(註4) 村松佳幸氏(長坂町教育委員会)のご教示による。

引用・参考文献

- 山梨県教育委員会 1999 「山梨県史」資料編2 原始・古代2 考古(遺跡)
伊藤正彦 1996 「坂井南(大原)遺跡」韮崎市教育委員会
小宮山隆 1996 「北村遺跡」長坂町教育委員会
佐野 駿 1995 「村之内II・III遺跡 高台・中谷井遺跡」明野村教育委員会
中山誠二 1993 「宿民遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第81集 山梨県教育委員会
山下孝司 1984 「坂井南遺跡」韮崎市教育委員会
山下孝司 1988 「坂井南」韮崎市教育委員会
山下孝司 1994 「立石遺跡」韮崎市教育委員会
山下孝司・伊藤正彦 1997 「坂井南遺跡(第4・5・6次調査)」韮崎市教育委員会
山下孝司ほか 1998 「坂井遺跡」韮崎市教育委員会
米田明訓 1984 「久保屋敷遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第1集 山梨県教育委員会
伊藤正彦 1997 第V章 第2節「坂井南遺跡東落一藤井平から韮崎台地へ—」
『坂井南遺跡(第4・5・6次調査)』 韮崎市教育委員会
伊藤正彦 1998 「韮崎市の弥生時代後期から古墳時代前期の様相 一坂井南遺跡を中心として—」
『山梨県考古学協会誌』第8号 山梨県考古学協会
小林健二 1997 第V章 第1節「坂井南遺跡出土土器について」『坂井南遺跡(第4・5・6次調査)』
韮崎市教育委員会
小林健二 1998 「山梨県出土の東海系土器 一波及と定着と変容—」『山梨県考古学協会誌第9号』
山梨県考古学協会
小林健二 1999 「甲斐のS字甕を考える」「S字甕を考える」第7回東海考古学フォーラム発表要旨
第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

第20表 北巨摩地域における古墳時代前期の主な遺跡の年代

遺跡名	弥生時代終末	I期	II期	III期(古)	III期(新)	IV期	古墳時代中期
坂井南遺跡							
後田遺跡							
久保屋敷遺跡							
北村遺跡							
大日川原・神取遺跡							
中原遺跡							
高台・中谷井遺跡							
伊藤莊第2・宿戸遺跡							
立石遺跡							
神の前遺跡							
龍角・龍角西遺跡							



第87図 板井南遺跡 遺構変遷図

写 真 図 版



免振作業参加者一同



南から大日川原遺跡を望む（△真下が大日川原遺跡、手前は神取遺跡）



大日川原遺跡 全景



1号方形周溝墓



2号方形周溝墓



2号方形周溝墓 方台部内土坑



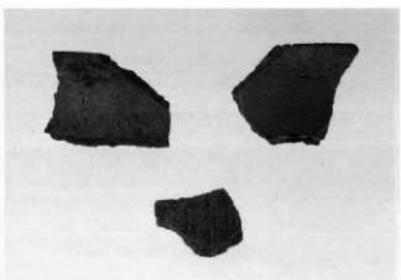
2号方形周溝墓 南溝西部 遺物出土状況



2号方形周溝墓 南溝東部 遺物出土状況



2号方形周溝墓 北溝西部 遺物出土状況



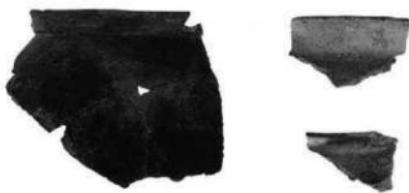
2号方形周溝墓 出土遺物



3号方形周溝墓



3号方形周溝墓 南溝 遺物出土状況



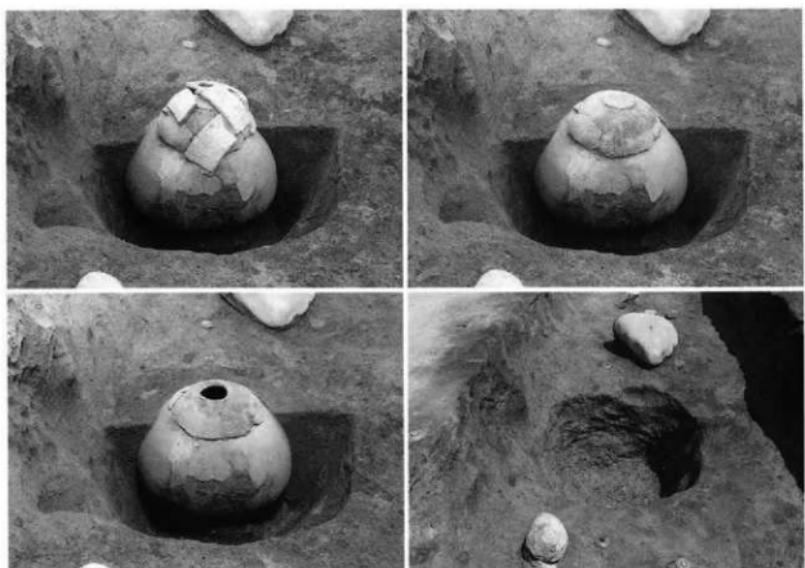
3号方形周溝墓 出土遺物



4号方形周溝墓



4号方形周溝墓 東溝 遺物・埋設土器出土状況



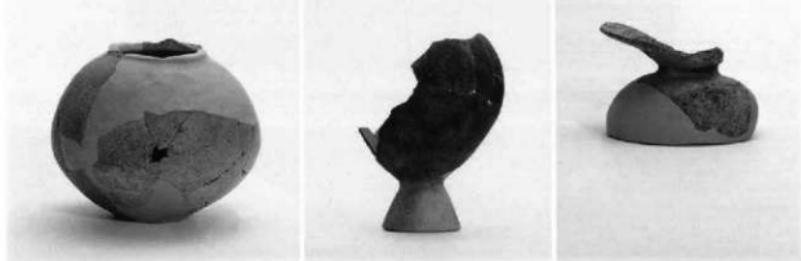
4号方形周溝墓 周溝内埋設土器



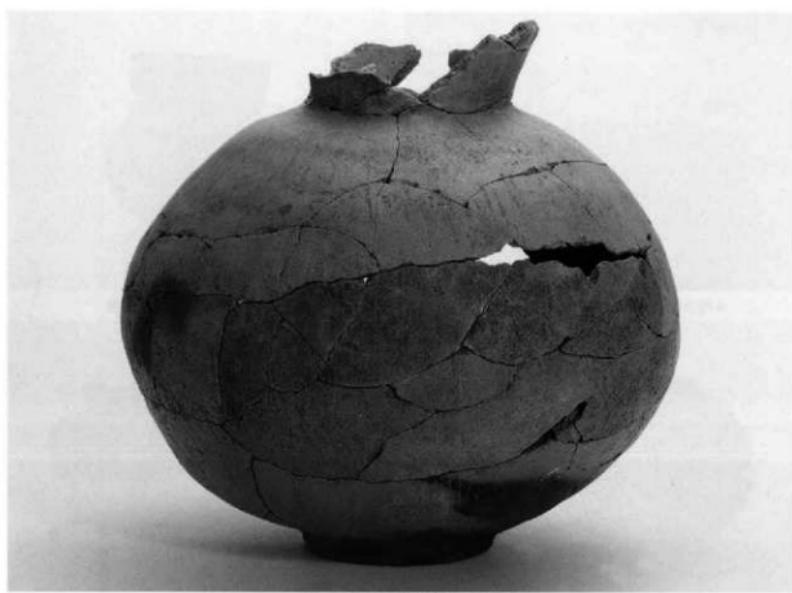
4号方形周溝墓 北溝 遺物出土状況



4号方形周溝墓 出土遺物



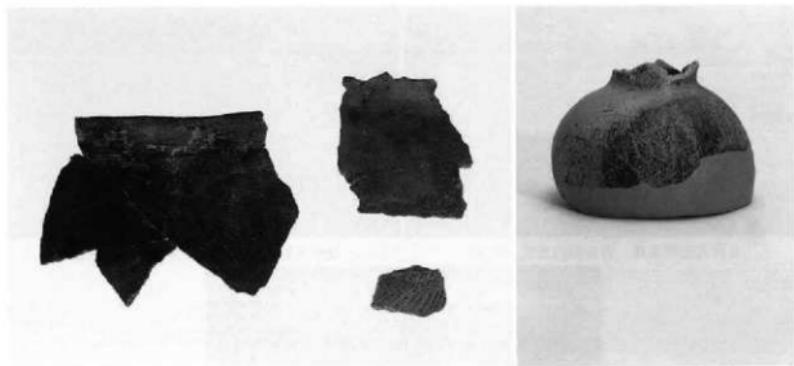
4号方形周溝墓 出土遺物



4号方形周溝墓 出土遺物



5号方形周溝基



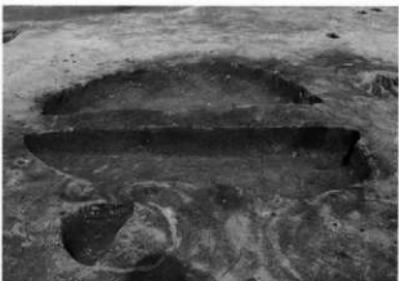
5号方形周溝基 出土遺物



6号方形周溝墓



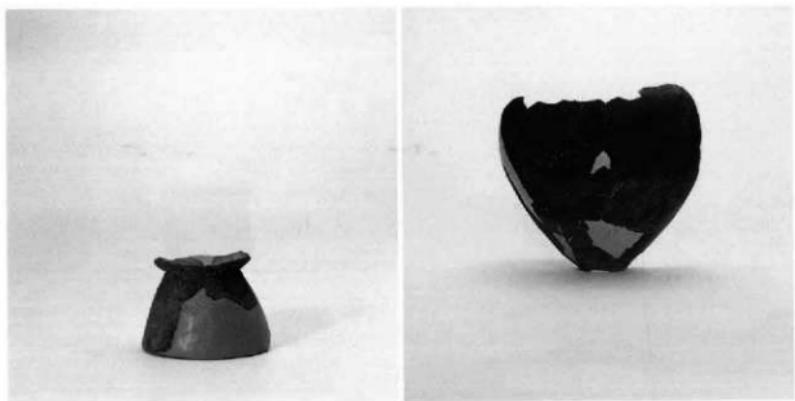
6号方形周溝墓 方台部内土坑（北側）



6号方形周溝墓 方台部内土坑（南側）



6号方形周溝墓 北東隅 遺物出土状況



6号方形周溝墓 出土遺物



7号方形周溝墓



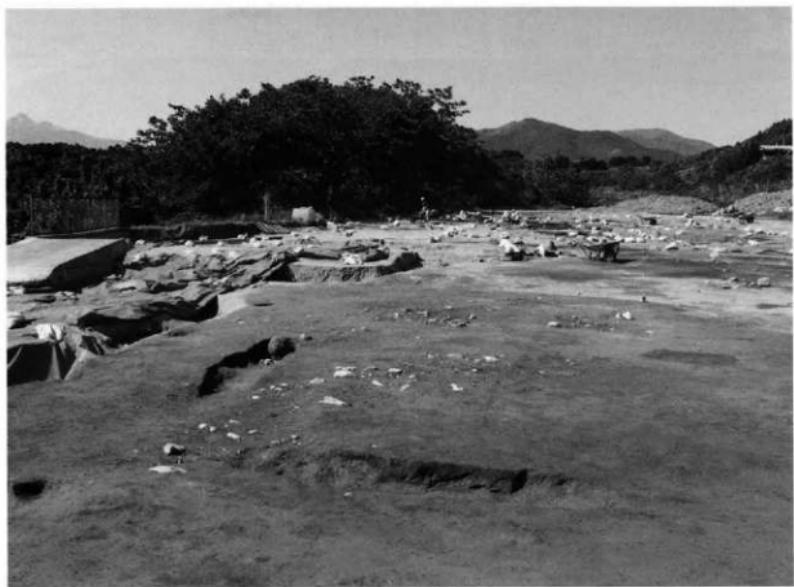
7号方形周溝墓 出土遺物



8号方形周溝墓 出土遺物



8号方形周溝墓



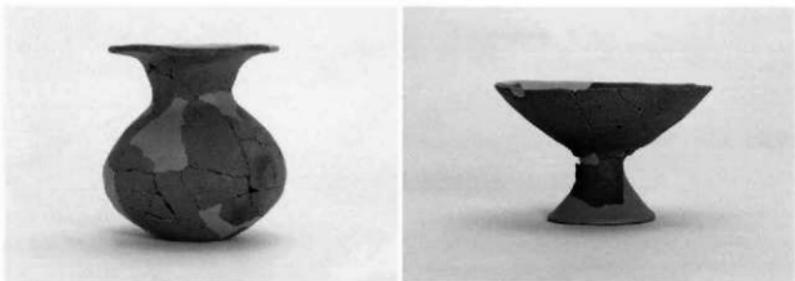
9号方形周溝墓



10号方形周溝墓



10号方形周溝墓 遺物出土状況



10号方形周溝墓 出土遺物



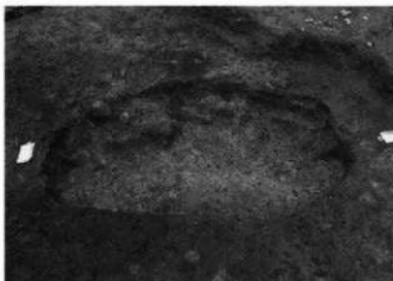
11号方形周溝墓



11号方形周溝墓 贴石



11号方形周溝墓 南溝 遺物出土状況



11号方形周溝墓 方台部内土坑



11号方形周溝墓 南西隅 遺物出土状況



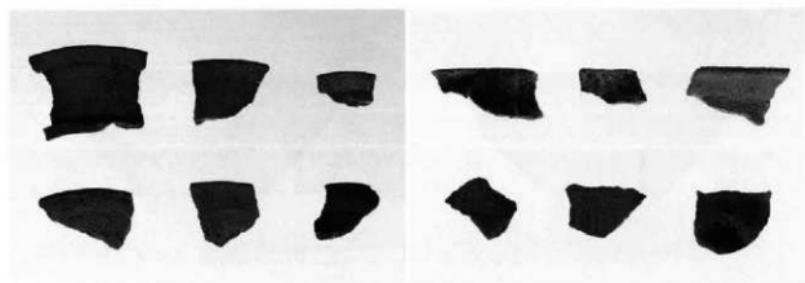
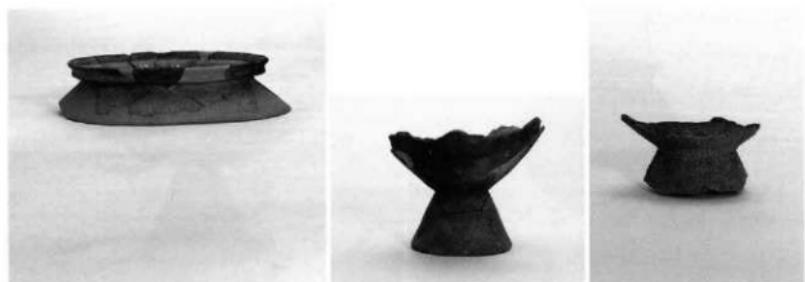
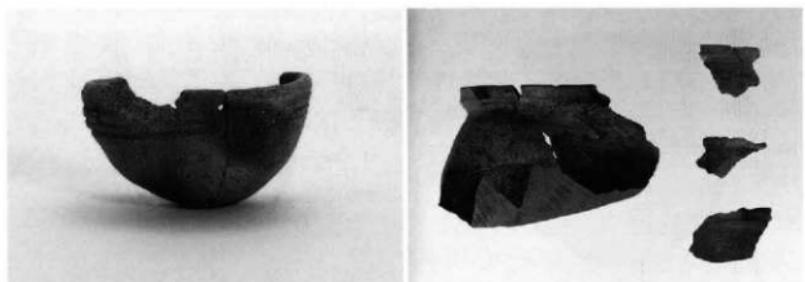
11号方形周溝墓 西溝 遺物出土状況



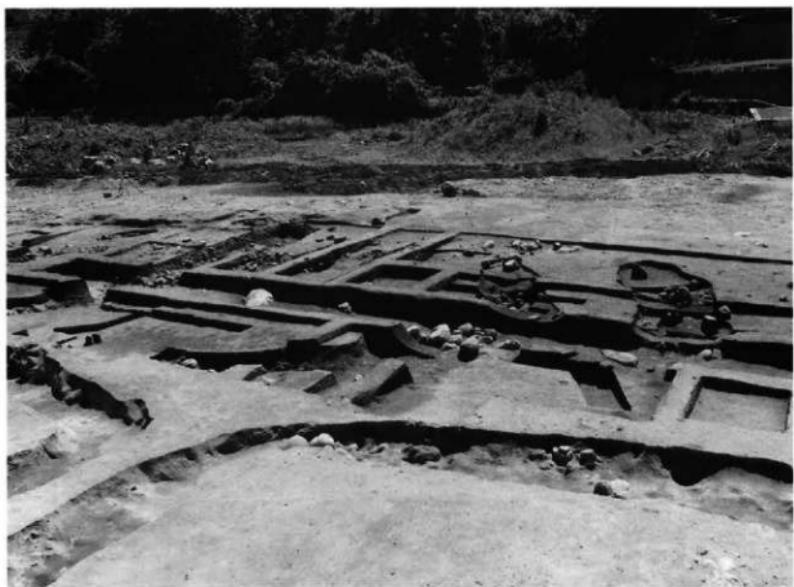
11号方形周溝墓 北西隅 遺物出土状況



11号方形周溝墓 出土遺物



11号方形周溝墓 出土遺物



12号方形周溝墓



12号方形周溝墓 三口台付壺 出土状況



12号方形周溝墓 勾玉・管玉 出土状況



三口台付壺



勾玉・管玉



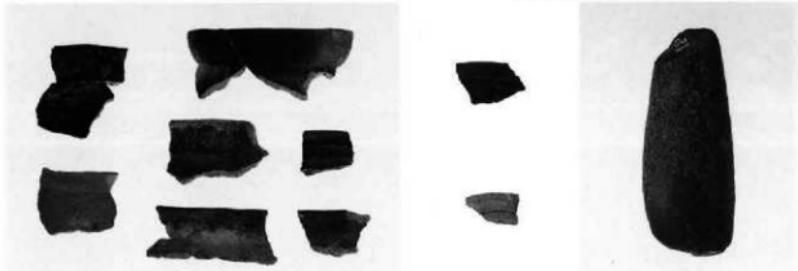
2号住居（古墳時代）



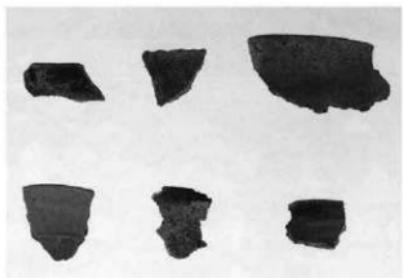
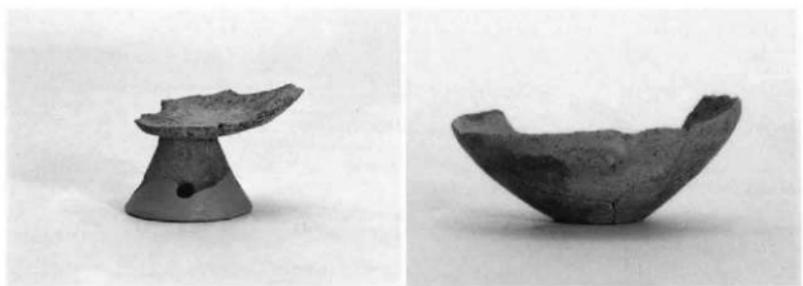
2号住居 床面検出状況



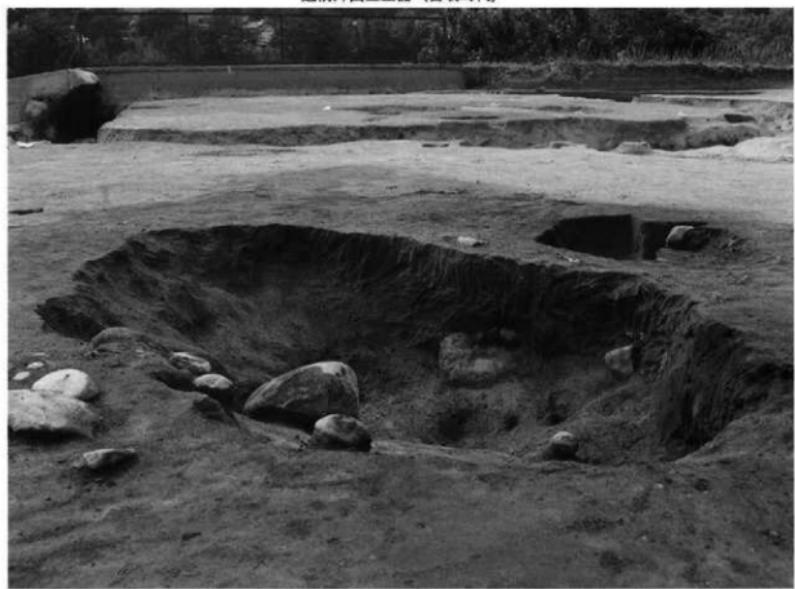
2号住居 遺物出土状況



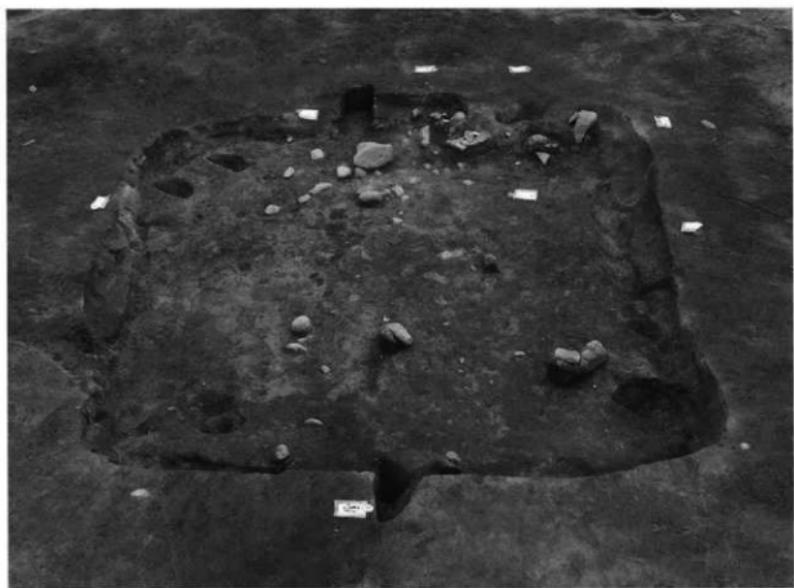
2号住居 出土遺物



遺構外出土土器（古墳時代）



1号土坑



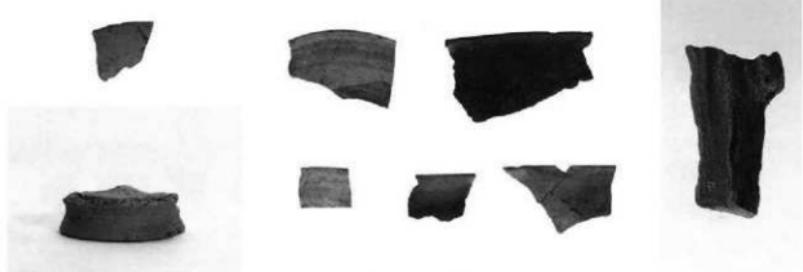
1号住居（平安時代）



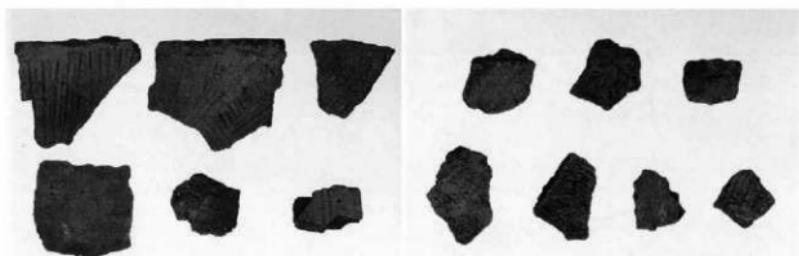
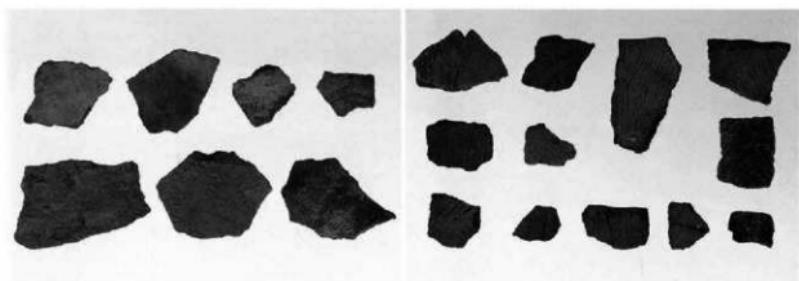
1号住居 かまど



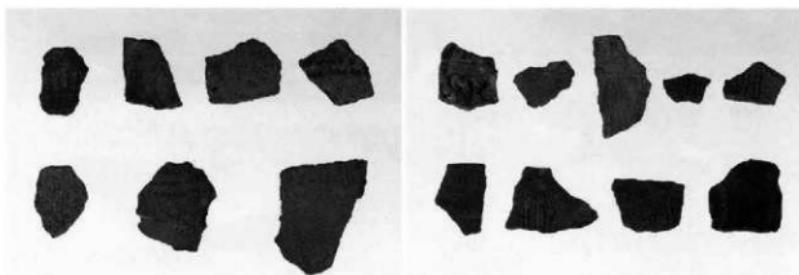
1号住居 出土遺物



1号住居 出土遺物

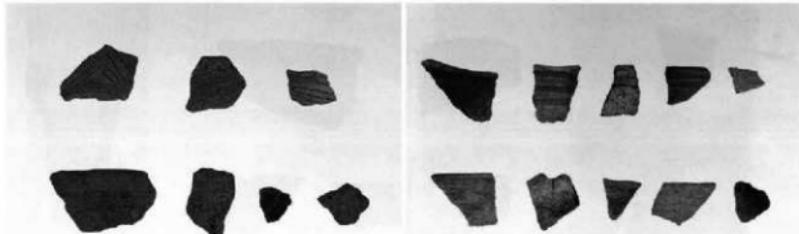


縄文時代の土器（早期後半～前期初頭）



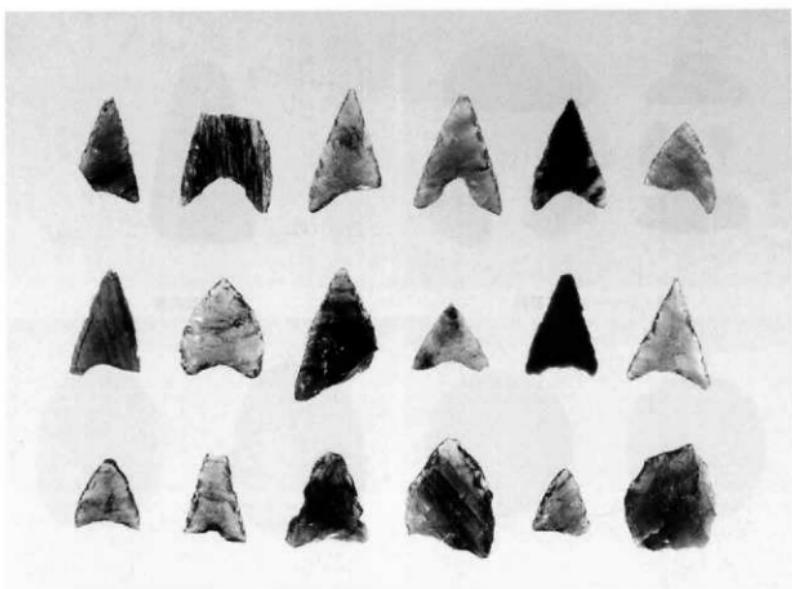
縄文時代の土器（早期後半～前期初頭）

縄文時代の土器（前期後半）

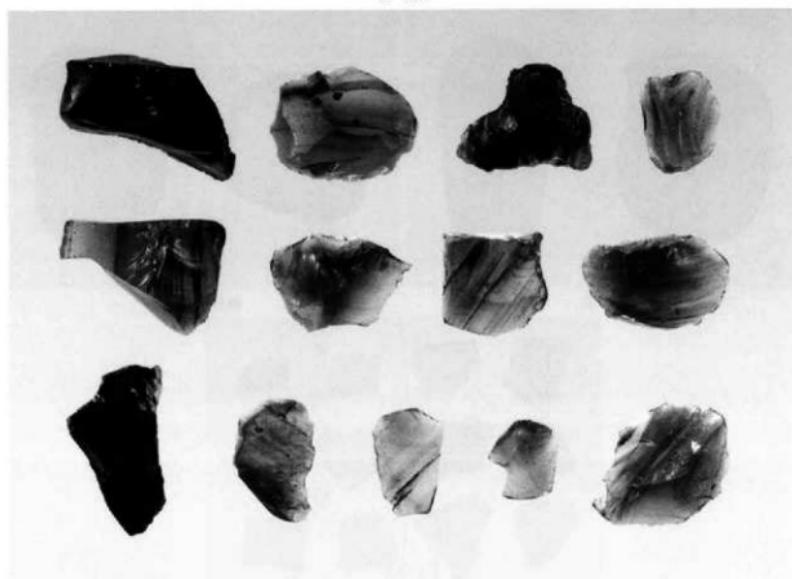


縄文時代の土器（中期）

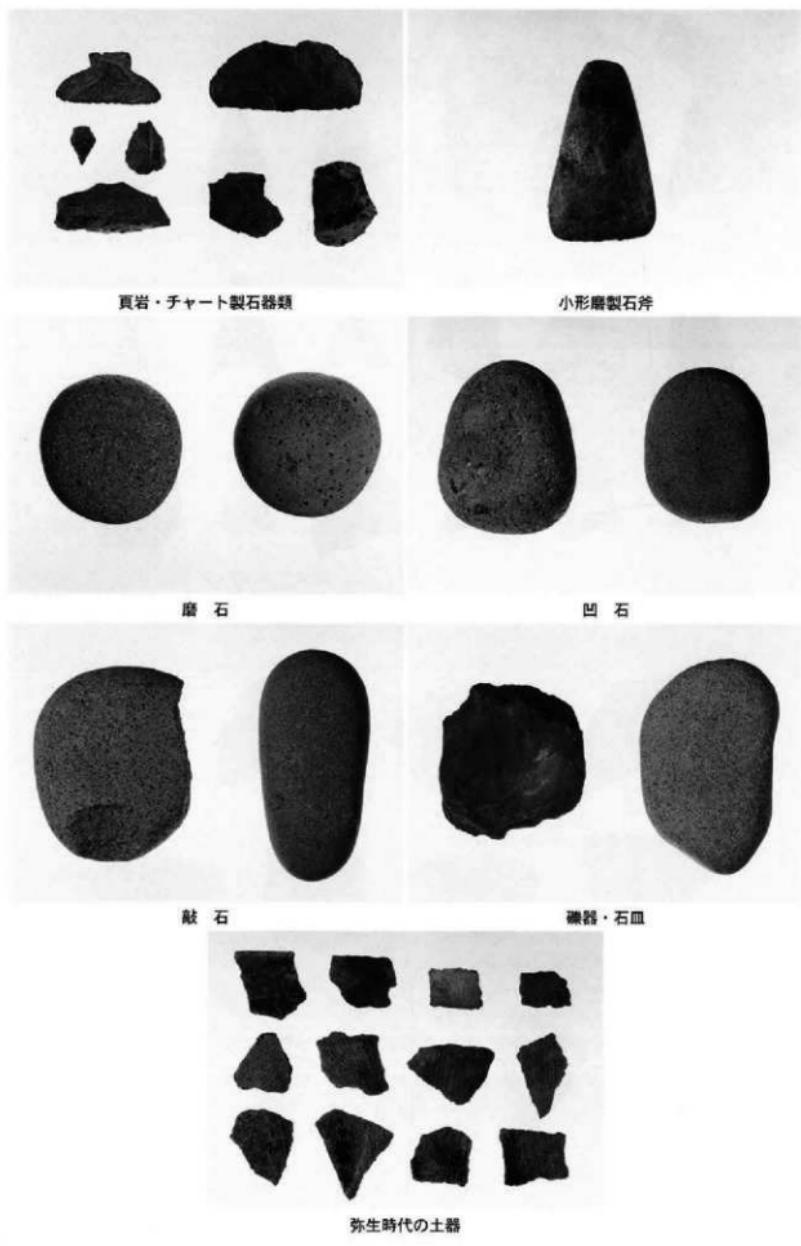
縄文時代の土器（後・晚期）



石 鐛



黒耀石製石器類



報告書抄録

ふりがな	だいにちがわらいせき							
書名	大日川原遺跡							
卷次								
シリーズ名	明野村文化財調査報告							
シリーズ番号	第13集							
編著者名	高田賛治・内藤かおり・大山祐喜							
編集機関	明野村埋蔵文化財センター							
所在地	〒407-0015 山梨県北巨摩郡明野村8310 TEL 0551-25-2019							
発行年月日	西暦2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
大日川原遺跡	明野村上神取 43ほか	市町村	遺跡番号	°°°	°°°	19990405～ 19990608	2,250	保存闇場 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大日川原遺跡	散布地	縄文時代	なし	早期末～晩期の土器、石鏃・搔器・石匙・剥片石器・磨石・敲石・凹石・石皿				
	散布地	弥生時代	なし	条痕文系土器				
	墓域	古墳時代	方形周溝墓12基 1:坑1基	古式土師器		神取遺跡にあった古墳時代の墓域か？		
	集落跡	古墳時代	竪穴住居1軒	古式土師器				
	集落跡	平安時代	竪穴住居1軒	土師器・灰胎陶器・砾石				

この報告書を作成するに当たり、筆者の非力のため完成まで非常に難航いたしました。兼にぶつかるたびに様々な人にご助言を頂いてなんとか乗り越え、ここにようやく報告書を完成させることができました。この報告書が多くの方々の目にとまり、ご活用いただけたらこの上ない喜びです。

最後に、発掘調査から整理作業・報告書の出版に至るまで数々のご協力をいただきました関係各諸氏・諸機関の皆様には、この場を借りて心よりお礼申し上げ、謝辞とさせていただきます。

大日川原遺跡

2001. 3. 31発行

発 行 明野村教育委員会
岐北土地改良事務所

印 刷 ほおづき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
電話 (026) 244-0235㈹
